主幹・麻生路郎

川柳雜誌

八月特輯號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和七年八月一日發行（毎月一回一日發行）
第九卷 第八號
川柳雜誌社發行

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一 大島椿の精

輝く美髪

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

小賣商店の繁榮機關

化粧新聞 は化粧品、小間物、藥品の小賣商店繁榮促進機關として發行する化粧品業界唯一の消費大衆に普及する機關紙

▼**化粧新聞** は毎月一回發行、各地の著名な化粧品店、小間物店、藥店にあります。

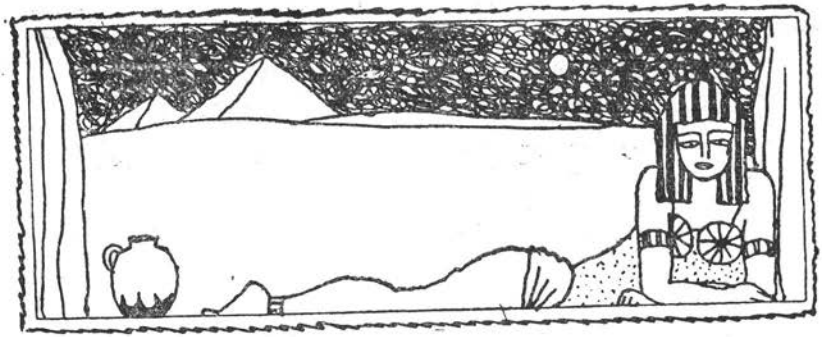
▲**化粧柳壇** を設け、毎號川柳を募ります。

選者　麻生路郎先生

大阪市住吉區住吉町一〇三一番地

化粧新聞社

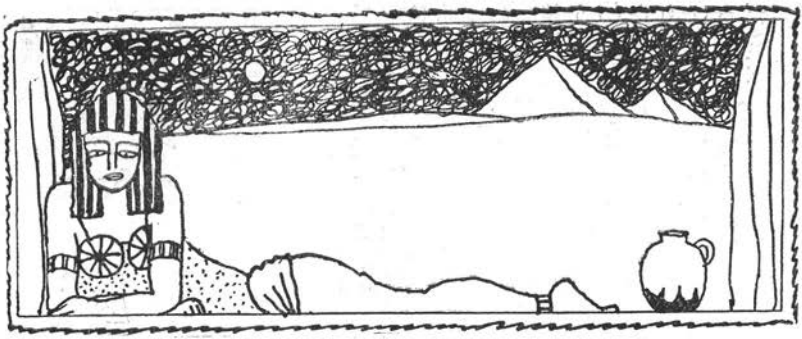
▼參加御希望の小賣商店は御照會次第詳細規定御報いたします▲



第九卷
第八號

川柳雜誌八月特輯號目次

壁に書く文字（雜感）……麻生路郎（四）
武玉川初篇研究（三）……梅本秋農屋・森東魚（三）
柳の絮（二）……長野吉高（四〇）
川柳に就て……河盛純子（三六）
五葉を語る（一）……麻生路郎（五六）
嗚呼淺井五葉君……木村半文錢（五八）
冷やつと五葉氏の思ひ出……橋本綠雨（六一）
天地人制廢止說に駁す……福田山雨樓（六一）
川柳ハルピンの此頃……立井登美坊（四七）
柳壇諸家に關する第一聯想……同人、社友（四八）
小林不涙人　柴田五萬石　大谷五花村　麻生路郎　前田雀郎
龜井花童子　高橋かほる　本田溪花坊　井上劍花坊　坂井久良伎
安川久流美　塚越迷亭　西島○丸　西田涙人街　橋本綠雨
長崎柳秀　布部幸男　川上三太郎　山川紫明　岸本水府
蛭子省二　村田周魚　大島濤明　麻生葭乃　小田夢路
地下鐵
冬嶺秀孤松のこと……蛭子生（六）
おもひ出……天痴人（七）
チャツプリンと川柳……松盛琴人（八）



ケンゲキ狂打明けばなし……二南生(一〇)
鎖夏ナンセンス……吉田水車(一一)
馬鹿……妹尾變人(一四)
近事片々……森田久(一四)
近作柳樽十句評……松丘町二(一三)

創作

不朽洞句稿……麻生路郎(一五)
川柳塔……同人・社友(一三)
近作柳樽……麻生路郎選(六)
粒々集……諸家(一四)
光耀抄……麻生葭乃選(一四)

一路集（課題吟）

腕……前田五健選(五一)
波……松丘町二選(五一)
各地柳壇……(六三)
本社七月例會……(六三)
川柳書架(四九)……(一〇〇)
西之町メモ……緑雨生(五一)
編輯の窓……路郎生(七六)
表紙……吉岡鳥平
題字……麻生路郎

壁へ書く文字

（雜感）

麻生路郎

○

譬話に嘘はない、が、嘘突きも譬話をすることがある——とリップ・キングがいふ。近ごろの柳誌を見てゐると嘘突きの譬話が多いレイヨンはレイヨンだといふことを想はざるも甚しい。彼等の句には力が無い。壁に押し戻されるやうな貧弱な句、薄つぺらな話なら止した方がいゝ。

○

世の中に知らぬ位、強いものはない。川柳をホントに知らぬ連中はああ、川柳ですかと何んの苦もなく川柳を片づけてしまう。中には川柳を十年も二十年も作つてゐて、まだホントの川柳を堀りあてずに、一ッかど川柳が判つたやうな顔をして柳誌を出したり、選句をしたり、短冊を書いたりして、川柳家氣取りでゐる物凄い人もある。洋行したところで大して得るところはないが、外國へ行つてはじめて日本といふものがハッキリ判ると或る人が私に語つた。この人などはホントに洋行をした人だと云ひ得ると思ふ。

川柳でも、その派、その社に沒頭してウヨ〳〵してゐる連中に、ホントの川柳が判らう筈がない。その派その社に屬してゐても、眼を心を常に遙か高所に置いて川柳をヂッと見きはめばならぬ。即ち實相觀入をやられば幾ら十七音字の詩形を辿つて、文字を羅列してみたところでソレは眞の川柳ではない。

大正十一年であつたか尼崎市の圖書館の樓上で、武藤山治氏にはじめて會つた時、同じく新聞人のSが僕を紹介して川柳家だと云つた。

ところが武藤氏は言下に「隱れたる天才ですね」と僕に酬ひた

僕はこの時位、知らぬ者は強いと思つたことはない。

武藤氏にして見れば大いに讃辭を呈したつもりらしかつたが僕は思はず噴き出さうとした。

僕は天才でないから天才は過褒であるが、隱れたるはおかしい。僕は川柳の畑では隱れたるどころか知られ過ぎてゐる（しばらくうぬぼれは容せ）。

武藤氏もいゝ加減なものだと思つた。

河盛蘆村翁の知きは教育家、學者、文藝家、演藝方面の人々については甚だよく知つてゐたが、政治家、實業家の名は殆んど知らず一二名を知つてゐてもどんな地位にある人であるかを知らなかつたその蘆村翁が武藤氏に會つたとして、己を遙か高所に置き、あゝそうですか、隱れたる天才實業家ですねとか、隱れたる天才政治家ですねと云つたとしたら、おそらく武藤氏は破顏一笑されたことであらう。尤もその頃の武藤氏は隱れたる天才政治家であつたかも知れ

ないか。

大向ふを狙つたり、素人ばかりを相手にして、當世流行のラヂオで自己宣傳をやつたりしない限りは、世間では自分がうぬぼれてゐるほど知つて呉れるものではないのである。

尤も專門家の間では誠に苦笑に値する人々が他の畑では案外高く買はれてゐることがあるにはあるが、そんな人は、自分のやつてゐることが川柳であつても何んであつてもいゝ。世間でワイ〳〵騒がれさへすればうれしい人なんであるから頗ぶるお芽出度い話である。

武藤氏を引合に出したことは甚だお氣の毒であるが、僕の尤も好感をもつてゐる武藤氏すらこんなことがあつたのであるから、さうした不用意な言動を平氣でやつてゐる人々が何處の世界にもかなり澤山ゐるだらうことは想像に難くない。

川柳家はモット勉強しなければならない。僕なんかも時々實力以上に買はれてゐることを思はされるが、そんな時には顔があかくなつたり冷汗が流れたりする。

勉強は死ぬまでしなければならぬ問題であるが、近來空虛な偶像に出遇う度に痛感させられる。ポーンと頭をたたかれても空ツぽの金佛でない覺悟を今のうちからして置かねば十年の悔を遺さぬとも限らない。いくら暑からうが勉強すべしである。

○

滿洲に在る柳路君から新滿洲國のスローガンを多數送つて呉れた語句と云ひ色彩と云ひ新興滿洲國の面目躍如たるものがある。その一部をサロン・キングの壁間に貼つて、新滿洲國の匂ひを嗅いでゐるが、客が支那料理屋と間違へるのには困つた。けれどもソンナことは一切お構ひなしである。その後に送つてくれた大刀會匪（奉天軍の殘兵）一旅團の中尉の肩章も參考品として並べることにした。皇軍入城に潰走した敵兵は、自ら肩章を取り捨てゝ逃げたさうだ。この肩章と同封で森中將のビラも屆いた。このビラは入城後各部落民へ飛行機から散布したものだとのこと、柳路君は僕に滿洲氣分を味はせやうとしていろんなものを送つてくれる。

以前にはリットン卿の歡迎ポスターを數種送つてくれた。これもその一部を壁間に貼つて君の好意を謝してゐる。リ卿歡迎のポスターの（1）は疊の三分の二位な大さで、上部に赤字でWELCOME！と記され中央に鳩が飛んでゐる。鳩の口にくはへたカードにはLook and see the signs of peace in the Far East とイタリツク文字があり、鳩の嘴にはManchoukuoの文字が矢張りイタリツクで書かれてある。下部にはENVOYS OF PEACE とある。（2）は

Dawn from the East
Peace from Geneva

（3）は

Co-operate to
make Manchoukuo
the Geneva of
the East

次に新滿洲國のスローガンは「歡迎和平使者國聯調査團」「大同元年就是歷史上最光明的新紀元」「民意的國家即是民衆的家庭」「與民同樂是新國家的希望」「滿洲國是民族平等的先鋒」「滿洲國旗飄々人民歡樂陶々」「燦爛光華滿洲國敢叫做世外桃源」「前車之鑒勿染國民黨彩色」「農耕於野商歌於途」「施行王道氣象有如旭日東升」「新國家是爲民衆謀幸福的主人」などである。

次でに森中將のビラを御覽に入れる。四六二倍の黄色紙に

佈告

大日本獨立守備隊司令官　森

出示曉諭事、照得現在滿洲新國家、以大同共榮、爲理想、立脚於王道正義、己業成立矣、我日本軍、爲圖增進滿洲國三千萬民衆安寧福祉起見、盡心竭力、進行恢復、維持治安、是以如有惡棍擾亂治安非痛剿到底不止、但對於良善人民、必爲保護、我日本軍令嚴肅、秋毫無犯、爾等人民、各宜倚賴我軍、安意均皆改邪歸正、各安其堵、自勵其業、毋得恐驚、並協助維持安、最爲緊要、各宜凜遵特此曉諭

昭和七年六月二十七日
大同元年六月二十七日
大日本獨立守備隊司令官陸軍中將　森　連

と記されてある。如上のポスター、スローガン、散布紙に對して私は感想は述べない。が、近き將來に於て川柳をエスペラント譯の世界的短詩にまで押しすすめやうとする私には、新國家の樹立と我が獨立守備隊の勞苦を壁の向ふの仕事とは思へない。

近作抑揚

路郎選

憂き朝に濡れ新聞を拾ふなる　大阪　閑生
神佛に懸命細い手を合せ　同　同
ため息の中に大ため息をつく　同　同
楡の蔭先に寢てゐる男あり　同　同
泣き止んで灯のまぼろしを囚へゐる　同　同
暗がりに躓かれても默りをり　同　同
泳げいざ小池北村遊佐牧野　同　同
こんにやくの型が變らぬ老の身の　大阪　新水
時間限りのサービスと知る　同　同
腰紐を男に貸せば寢てしまひ　同　同
圓タクも止めては見せるルンペンだ　同　同
怪談に妻が化けるこ思はれず　同　同
救命器ア、人生はもろいもの　同　同
父若く水からくりへ水をさし　同　同
富士を背景に彼等戀愛至上主義　大阪　雅幽

冬嶺秀孤松のこと

蛭子生

大阪の×氏から臺本に因ると第一句の冒頭に「冬嶺之部」と記されてあるに就てお尋があつた。武玉川初篇には

冬嶺之部　望樓之部　主壽之部

と三區分され皆點印で、茲には御申越のもの丈けを説明するに止めるが、記逸は色々な印を用ひた、斯る事も當時の流行であつたのだ。

不驚不崩　二十五點　四時望樓　二十點
冬嶺秀孤松　十五點　秋月明輝　十點
夏雲峰　七點　春水　五點

歴字(半狂堂本字は誤)三點　屯　二點

而て五篇には胸裏三斗、其他九篇には王母林其他、十十二十四篇以下度々點譜改正を行つてゐる。有名な陶淵明四時の詩に

春水滿四澤、夏雲多奇峰、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松

とある。點印は、これから生れたもの、實に九篇の序をよむと「點譜はくだんの四時庵に付て、淵明の四時の詩を分て印と成し手に弄する事久し」とある通りだ。此序に以後の出所

値ぎられて汗を拭くより世辭がなし　同　同
貨幣價値汗することを忘れさせ　同　同
死に行く道に腰掛け石があり　同　同
働き過ぎて僕は左遷で彼は馘首　同　同
蚊帳に影して齒がいたむなり　同　同

聯盟調査團の再入京

滿洲と云ふ象を見て來た調査團　大阪　琴人

地辷り保線課の山雨樓氏

豫期してた事に忙しく電話なり　同　同

友を待つ焦燥

待つてゐる目に街の灯はつき揃ひ　同　同
土がない・土がない・都會の憂鬱　同　同
青葉越へ若葉越へ飛行機小さうなり　同　同
淫らな線を夜にとかしてゆく女　大阪　愚陀
唇の端へ宿つたお孃さん　同　同
顎なでゝ女の腰のゆら〳〵と　同　同
猫の觸感が娼婦の咽喉に住んでゐた　同　同
ふるさとは青い天と地青い風　大阪　町二
夏と私とハンカチのやうに鮮しい朝　同　同
炎天に藥火のあかさ賴りなき　同　同

ピクニックにて

も陳べてある。

元と點式は歌に倣つたもの、眞德以來であつて江戸座にて尤も名高きは

春の月琴に物書くはしめかな　其角

半面美人の點印である。「俳諧或問」に、沾涼鳥山彦に其角元祿の末に洒落風といへる一体を發して即常の俳諧には十點を限りとし、洒落風には半面美人の印を五十點とし用ひたるよし書けり。で、「隨齋諧話」に、其角が世上に點多くなりしを慣り世俗を撓めおごるかさんと、半面美人等の印を刻み、これを句の傍に施して、かれは幾點これは何點と點數を數へしも、すべて世を玩びてなしはじめしことなるに、その頃の俳士、其角が輩に倣ひて自々點印を作り卷毎におしけるなり尙ほ「末若葉」の序も參考となる。以て點印發達の經路が知られる。

近く改造社版俳句講座中に晋風氏が點印研究を執筆されるそうだから、全般に亘つてはその方に讓る。（六月二十日雨）

おもひ出

天痴人

秋田雨雀氏が檢擧を喰つたさうだ。おもひ出は一九三〇年三月の松江に於ける文藝講演會の夜の盛況を畫く。私達五六人の松江劇場準備會の連中の思ひ付きであの頃の戰旗社へ交渉をして橋本英吉、山田清三郎に氏を加へた人々にわざ〳〵來て貰つて入場料三十錢で九百ばかしの聽衆をうならせた。氏のニコニコ顏。そして座談會での珍稀なロシア寫眞の廻覽そして細かな說明、秋田氏の印象は頭髮のゴマ鹽ガールパックだ。秋田氏だけ一人遲れて松江へ來られたので出迎へる者

初夏の皿の食べ物の上を往き來する雲　同　同

病院にて

宿直が起される度一人死に　大阪　綠雨

寢臺の下で乳呑兒泣きつゞけ　同　同

拗ねさしておけば膳立また出來ず　同　同

當分の御滿足ミ女知るや否や　大阪　艸樂

母の愛の帶を續けて四十才　同　同

誘惑にかゝつても見たし五圓あり　同　同

○

この秋も知れぬ身空にへちま棚　別府　晃卓

箒迄チビて貧しさせまるなり　同　同

市議改選

金で動かぬ俺の一票　同　同

滔々たる？詩論家の句に接して

貴郎てバ貴郎てバ句が泣いてるよ　同　同

耕朗氏と語る

初對面師の句を語り歩を語り　同　同

金がほしくば嘘を言へ言へ　同　同

路郎先生よ健在なれ

祈りける我病めばミて師を思ひ　同　同

農會長遲刻の上に異議を云ふ　松江　天痴人

がない。査公に案内をさせて宿へつかれた。査公宿へついて來て左翼の小父さんと知り口あんぐり。それ程氏は紳士的だった。○君がエスペラントで歡迎の辭をのべ、氏が之をほん譯された。私達はそれを聞き乍ら何だか自分が歡迎されてるやうな氣がし始た。今市や濱田での演說會の盛況のおもひ出と共に過去となつてしまつた。氏の健康を氣遣ひ乍ら筆を置く。(七月四日記)

チャップリンと川柳

松盛琴人

チャップリンの特別寄稿を、改造七月號で讀むとチャップリンが、箱根を僅か數日で切り上げたのを人々は氣まぐれだと評したと彼れは言つてゐる。それだけで現代日本の人々が如何に彼れを知らな過ぎてゐたかを知ると共に、この人々が、それほど皮相的觀察に馴らされて居るかを知る事が出來る。之に對して、彼れは正直に、何等の飾り氣なしに雨に參つたと云ひ、陰濕に一種の戰慄を覺えたと言つてゐる。

此言葉は直ちに、彼れの總ての藝術の上に深刻なる味ひとなり、憂鬱的にも現はれてゐる。彼れの藝術は迎合的でない、頗る樂に無駄な骨折なしに、唯だ純な個性を表現するだけで、足りてゐる樣だ、其餘りにも僞りなき彼れの個性が、人生の裡面を透視する時、如何に現代社會と矛盾する處の多きかを直感する、左うしたジレンマを取上げて銀幕で躍る。之を見た觀衆は笑ひの裡に隱された本當のものに突き當つて、忘れられてゐた自己が顏を出す。それは泣いてよいか、笑つてよいか餘りにもユーモラスだ。惹きつけられずに

祖父にきけば松平さんの時代が好い　同　同

農民決死隊に與ふ

意氣や壯されごテロを如何せん　同

歌人M日の生活

安閑ご三十一文字の阿片性　同　同

ごもすれば荒き言葉を子に與へ　同　同

つゝじ滿開托兒所ごなる寺の庭　同　同

三男に妻白粉を見棄てたり　同　同

バラソルも戀も眞夏の寶塚　神戸華水

もう一人來るごにしてお茶をつぎ　同　同

まじりけもなく人形ごミスがゐる　同　同

妻になり戀人になり新世帶　同　同

デパートへ來るご女は先になり　同　同

花屋から負けて貰うた百合が咲き　同　同

三浦環の歸國

十年の黑髪の謎誰が解く　松本民郎

こんな夢で畢つてしまふのか毛臑抱く　同　同

白馬岳にて

御花畑彼氏の戀の山日記　同　同

槍ヶ岳絶頂にて

岩を抱く大空の死に觸れんごし　同　同

は居られない。

川柳もさうだ、先づ汝は汝自からに歸れなのだ、汝自からの純を取戻す事が先決問題である、そして自分自からの世界を造り上げれば、よい川柳、優れた川柳は生れない、毎日を創造の生活と考へて、それに努力すれば、チャプリン以上の川柳を創作するに難くはない。或時は現在の川柳は、一チャプリンに及ばぬといふ感じさへする。それは多くが他動的であり、眞の創造的で無いからだと考へさせられる。

彼は云つてゐる、環境の犧牲となり、個性を壓殺する事は出來ぬ、「此膝王候にも屈せず」と、自己の個性を守る事其如くだ、其處から生れたチャプリンの藝術に感心する以前に、自己を反省せよと云ひたい。

彼の僞らざる個性は箱根三日の滯在に樹々の一本一本に美くしい個性をすら發見してゐる。純な個性はそれほど鋭敏に働く。彼れは日本の美くしさは、チエリイ、プラツサムに限らぬと喝破してゐる。櫻を誇る國民としての吾々川柳人の多くは、之を何んと聞いたであらう。日本の短詩を以て誇る川柳人として、此言葉を聞いて、猶平然としてゐる程に、神經が痲痺してゐるであらうか。それは兎に角、日本の川柳はチャツプリン以上の藝術でなくてはならぬとは、誰しも同意であらう、さうするには彼れの如く、自身の世界を川柳に發見する事であらう、否自身が自身の世界を開拓してゆく力を忘れてはなるまい即ち自身は自身の毎日の生活に改造しなければならない。此のならないが眞の川柳を生む原動力である其點で吾々川柳人は、自身がクリーターでなくてなるまい。

上　高　地

キヤンピングあなたまかせに炊かせこ　同
玉葱が坊の頭に似てをかし　島根　緑之助

問題の渦中にあるN氏

猜疑の中の白きズボンの憂鬱や　同　同

農民は喘ぐ

死に似たる踊り情緒は黒くして　同　同

繭　價　安

上作へ繭の値なんか話すまじ　同
活潑に行く妓の持てる若さかも　同
榮轉に父の病氣が明日しれず　大阪　沒食子
背が低いばかりに採用もれになり　同　同
質札が抱き合ふだけの豪口さ　同　同
醫者の給料がうらやましい日なり　同　同
肉體美椅子の足さへぐらつくよ　同　同
取るものは取られてからの裏住居　大阪　紅
いつそもう俺も蠶に成つたろか　同　同
法律の端上役へつゝかゝり　同　同
人絹の娘こモスの娘こ仲がよし　同　同
頃合の空家は家賃高かうをす　同　同
凱旋のそれ機關車が見え出した　大阪　豆秋

ケンゲキ狂打明けばなし

二　南　生

「やれ御兩人！」

私は此の掛聲に異狀な魅力を覺えるものであります。不知不識に身がひきしまる樣な覺えず躍動を促す樣な、それは〳〵私にとつて嬉しい言葉であります。學生時代に「龍馬暗殺」を上演した時も昨年神戸の川柳祭で「赤城颪」を公演した時も、觀衆の中から此の「やれ御兩人！」を叫んで貰つた萬よし氏の聲が今でも耳の底に殘つてゐるのであります。

舞臺は青い照明で見るからに陰慘な氣が漂つてゐるのであります。スラリと拔いた刀がギラリと反射して思はず ヒヤリとさすのであります。ピツタリ正眼に構へた眼と眼、息と息、ムラ〳〵と殺氣が生じるのであります。そして私は私自身ゐ警戒しなければならぬ程度にまで本氣になつてゐるのであります。この時「やれ御兩人！」と叫んで呉れる人がなければ此のケンゲキは拍子拔けとなるのであります。此の掛聲が上手なれば上手なほど、私のケンゲキは本格的になつてゆくのであります。

○

私は何時の程よりかケンゲキ狂となつて了つたのです。

第一に私は幼少の頃から活動寫眞や芝居が人並勝れて好きです。芝居では何と云つても澤正、それから中田正造、山口俊雄、田中介二、最近では新國劇の島田正吾の劍さばきに夢中に惚れてゐる私です。活動では尾上松之助から阪東妻三郎、河部五郎、そして大河

薄化粧してから朝の戸を開ける　同　同
快晴へ黑い目鏡をかけて出る　同　同
日曜の裸體ヒョコに取りまかれ　同　同
ジャン拳に負けたと思ひ自重せん　大阪　奇可愛
病室で昇汞水は櫻色　同　同
算盤も要らぬ日給稼ぎなり　同　同
應諾の目元便利に出來てます　同　同
落ちぶれた心は君も落ちて欲し　神戸　春秋

その夜

シグナルの光に雨が見へてゐた　同　同
よしきたと若い女に使はれる　同　同
五六年たつてしまへと腹を立て　同　同
窓あけて祇園の午前二時の星　大阪　鶴峰
ポケツなごしらべたらしい妻のかほ　同　同

政界の昨今

今に見て居れと安達は立ちあがり　同　同

夜學

疲れてる顏へ先生繰りかへし　同　同
冷しあめ賣れるにサクラなかりけり　大阪　鮎美

ベッドの綠雨さん

病室にゐる子にあまき父なるぞ　同　同

内傳次郎と次第に趣味が變つてゐます。中でも大河内傳次郎に對する私の尊敬に似たファン振りは友人間に有名なものであつて「オウコウチ」と云ふニックネームのある所以なのです。

第二は私は十四才の頃からお面、お胴に興味を覺えて擊劍を習ひ始め、今日に至るも未だ飽いてゐない有樣です。勿論此の十餘年間の劍生活は波瀾重疊、話せば盡きぬ一篇の講談ものですが、兎に角此の間に私のケンゲキ趣味が病的にまで昂進したことは事實です、

第三に私のよき相手役華水君の出現です。彼も亦澤正が好きで大河内を畏敬する點に於ては並々ならぬものがあるのです。高商時代から私のケンゲキ病が傳染したのか專らケンゲキ役者として私の相手役をつとめて呉れるのです。併し私は一芝居ごとに彼に對して何だか濟まない樣な氣がしてならぬのです。實際氣の毒な程彼は私のよき相手役をつとめてくれるのです。總べての場合私は立役か二枚目になり、彼は惡役か老役を持つて呉れるのです。私は幾度か彼を殺してゐるのです。或時は眞ッ向梨の立割或時は斜め袈裟掛け我時は横眞一文字に胴を拂つて彼の苦悶する態を見ながら得々と見榮をきつたものです。とう〳〵私のケンゲキは狂的になつて了つたのです。眞刀、竹刀は云ふに及ばず、ステッキ、モノサシ、ホーキ、ホコリタヽキ、ソロバン、センス等々盡く私のケンゲキ用具ならざるはないのです。或時或芝居好きの英語の敎師と「ケンゲキ」に就き激論を闘はしてとう〳〵その授業時間をふいにして了つたことがあるのです。級友の話ではその時私の眼は血走り、肩は怒り、手にしつかと握つたエンピツが恰も懷劍に見えたと云ふの

退院後會ひて

藤本へ校正にゆく足なるぞ　同
配本の包が少し重たすぎ　同　同
美しい孔雀神經過敏なり　神戸明珠
早いものベビーゴルフの店も閉め　同　同
軍艦の波がいぢめるさかな釣り　同　同
涼風に子は寢たチロリ悲しいか　同　同
南國へ近く榮轉晴れわたり　大阪水車
ラッシュアワーこれ人間の姿さや　同　同
蛙鳴け鳴け其處も貸家を建てるけな　同　同
世間体狹心症さやらにされ　同　同

豪雨頻々

ダンサーも長靴で來て恙なし　大阪二南
信號を無視して通る一派がる　同　同
螢籠さらはれの身さ云ふでなし　同　同
水碧くこゝろの傷がいたむなり　螢ヶ池愚寵
死ぬさ云ふ看護婦ありき笑ひたる　同　同
ながく病みのぞみちいさくなりにけり　同　同

妹死去

ぽつたりさ雨が落した病葉よ　滋賀蒼太

淨明院本堂

です。その日から私は「ケンゲキ」と云ふ別名の所有者になつて了つたのです。

○

學校を出て以來、劍を握る機會も次第に少くなり、殊に最近大阪に移り華水君と別れ〳〵になつてからはさしも頑强な「ケンゲキ病」も稍快方に赴いてゐるらしのであります そして小妻の琴を相手に 尺八を吹奏すると云ふ頗るしほらしい 生活を始めたのであります。

その私を又ぞろ「ちとせ倶樂部」の舞臺に上げようと云ふのであります。ごだい無茶な話で折角おとなしくなり始めた私の「ケンゲキ病」を再び發熱さそうと云ふのでありますけれども私は本當を云ふと決していやではないのであます。青い舞臺と白鐵の劍光は今でも私を限りなく 誘惑して吳れるのであります。それにふき相手役華水君も乘氣になつてゐるし里十九氏、かほるさんと云ふ藝達者が力演して吳れることだし、とう〳〵「やつたろか」と云ふ氣になつて了つてゐるのであります。

併し私は果して昔日の樣な思ひ切つた「ケンゲキ」を披攝し得るかどうかこのところ一寸疑問になつてゐるのであります。「やれ御兩人！」と叫んで吳れる人がゐなかつたらどうせう、スラリ〳〵と刀が拔けなかつたらどうせう。私は今こんな心配をしながら、机の前で「ケンゲキ」の型を餘念なく研究し續けてゐるのであります。勿論私の腰には小妻の「二尺ざし」がさしてあるのであります。(完)

銷夏ナンセンス

吉田水車

カフェー入口の看板口上に、滿蒙美人攜ひ

昇天の曲にほゝえむうつし繪ぞ　同　同
燦々と南京玉よわれに散れ　同　同
代へ難き仕着せ一杯のナフタリン　大阪　夢裡
見逃した情心中沙汰となり　同　同
いけるかこわが意を得たり椅子を寄せ　同　同
父親の意見と梅雨がせめるなり　大阪　小柳子
淋しさに鋪道を行けばモガの足　同　同
猿も見ずあひるも見ずと兒を見つめ　同　同
夜逃げした隣の猫は身重なり　愛媛　英賀夫
奢るなら附合ませうバスに乘り　同　同
童貞を信じてくれる娘が一人　同　同
櫻ン坊初めて逢うた日の思ひ　大阪　翠夢
ゲートルを卷くのに席をあけてやり　同　同
しみ〴〵と話もならず未亡人　大阪　變人

金太君逝去

三十七あまりに若き佛よな　同　同
うまの合ふ家へ新調やつてくる　大阪　八歩
鏡の裏で本能が笑ふ　同　同
聲色がのれんをぬけて笑はれる　大阪　夕鐘
俺の金出しに行くのに氣がとがめ　同　同

◇

—是非一度—とある。流石大阪だ嘸エキゾチックな感味を居ながらにして喫し得るなどとはウルトラ時代の餘惠かと　よくよく見ると其處の名が「滿蒙」だつた。

○

毎度お運び下さいまして有難う存じます或百貨店十錢ストーアでのメガホンの叫び聲である。勿論御足勞を感謝してゐるのだがとり樣によつては妙に聞こへる。ほんとに運んでゐる奴ッも居るのだらうと思ふと。

○

場所は某食堂時は白晝、腹をへらして待つてゐる後から大聲一番、ダイナマ一ッチョウ—ッと、來た。肩々相磨す食堂の晝時へダイナマをほり込まれては、爆彈三勇士以上の大ごとになるテロもやがては……なぞと空腹の頭で愚想してゐると件のダイナマを目八分に捧げて通つたそして行衛をそれとなく注意すると注文の主は生ビール大コップを息をつかず飲んでゐた。

馬鹿

妹尾變人

子供が澤山あるのにほんとに馬鹿やなと、子供が澤山あるが故に、僕は妻氏に再三馬鹿にされる。外出して夜更かしをした時、醉ふて歸つた時、等、等、そうすると、うつかり子供製造も出來ん事になる。では子供がなかつたら妻氏は如何なる方法で攻擊するだらうか、妻氏に馬鹿やなと言はれる、馬鹿やなあが、一寸考えにくゝなる。

そうかと言つておけば好いではないかと、漸くさとりを開いて眠る事にした。

（六月五日夜）

團結の弱身食費が嵩むなり　長野　柳兒
褒められる素行の男として淋し　同　同
問ひ詰める膝俯向いた眼へ迫り　同　同
ファッショに矢張り資本家けなされる　同　同
醉つた恩師に人生の裏を聞き　同　同
裸になればおゝ親愛なる臍よ　島根　羅門
ひこりこりのこされてかぜがさる　同　同
貧しき事ばかりなるまるく坐る　同　同
黑き部屋なる貧血のかひなよ　同　同
マダムのかひなが春風に挑みたり　同　同
洋裝で女は上京すると云ふ　大阪　みつる
笑つてゐます苦しき嫉妬　同　同
思ひ出にして歸るこは淋しいぞ　同　同
手紙なぞ出して弱さを知られたり　同　同
ジャズと光線人間の泳ぐこと　同　同
客のない女給花火をもてあそび　大阪　裸人
くもの巣が無文子な父の手にかゝり　同　同
晩酌へ袴をはいた娘がもぎり　同　同
夜が明けてまだ病人が生きて居り　同　同
大掃除へこの月出來る姙婦がゐる　同　同
おはいりよ門はいびつになつてるが　神戸　重陽子

近事片々

森田　久

汽車が松本に着く毎に、幾十組もの登山者が下される、そして之れ等の人々は足自慢であり、山を征服する人らしい、謂ゆる山を征服する心算らしい。

そして中には、上高地あたりでキャンピングをする人、それから山から山へハイカーとして山から山に明かして行く人々もある。

それ等の人々は皆充分の旅裝をしてゐる、キャフエルもキャンプ、ロープも、アルペンストックも、中にも、夜道をするらしいランタンを用意した人もある。

そしてそれ等の道具が、必ず必要とする人とそして、それでない人も混つてゐるらしい之等の人々は、徒に明日の天氣を氣にしてゐる、燕あたりの小屋のラヂオは主に、天氣豫報を憶し爲に用意されてもゐる。

午後から、今日は、時雨るかも知れない、そんな、言葉を聞くと人間の方が先に曇つてくる、女の子なぞは自分が、時雨そうな顏をする。山は晴れた時のみ、山であり旅であるらしい。山の姿の美しさは、見晴しの利く時が山の形態であり、情趣である……と恁う云ふ。

山の姿を一つより見ようとしない、着飾つて化粧した女が、女の眞の姿といふのと變りはない、それでゐて自分では山の憧憬者であり山のファンだと云ふ。

雨や風の山、嵐の山、雪の山、山の姿の

軍國の朝の箒が生きてゐる　同　同
子を叱る眼にも糸瓜はぶら下り　同　同
そこら中つかむ眞似して啞眞顏　同　同
信頼を裏切るまいと墨をする　神戸　竹
女房があればと思ふシャツをぬぎ　同　同　風
溜息が待つてた樣な露路の空　同　同

女性に捧ぐ　奈良に遊んで

大佛の膝より高い自尊心　同　同
よい夢を見てゐる顏へ蚊がとまり　大阪　大
額の裸婦に尻むけられて待たされる　同　同　門
カフエーのとなり妙見講をはじめ　同　同
執達吏來たごさくさに湯がたぎり　同　同
湖は澄めり凡夫の淺ましき　松江　柳
赤い灯へ錢の有難味も解り　同　同　人
妓の乳のふくらみをせく帶の巾　同　同
アッパッパ京南虫の嚙んだあと　大阪　柳
去る者は追はずチビリ〳〵酒　同　同　次
飛び〳〵に若返つてる日記帖　同　同
買收をされて張子の虎となり　犬阪　いわを

病　久　し

磨滅せしレールと同じ身となりぬ　同　同

美しさは、その變化毎に美しい、天氣のよい日、見晴の利く事が山であり、眞の姿だと、

それでは、山も案外つまらないものである山に親しみを持つてゐるといふ山のファンは、もつと山の姿を見てやらねばならない。山を征服するといふよりは、山に抱かれて、しまひ度い心が、山を愛する心だと、いつたら山の姿が嵐の日にも眺めれば、と、いつたら、百人が全ど、それは物好き變質的な、人間だと笑ふかも知れない。

キャンピングが、まるで不自由を買ひに行く樣である、味噌一つ米一合も、五六町の宿屋か、それでなければ、汗と一緒に運びと、げなければならない、その不自由の中に面白いキャンプライフの、眞隨があるですよといふ。そこまではよく判つてゐる。

それでゐて、罐詰の空罐はすぐ、すてゝしまふ。

そして水の杓がないといつては困つてゐる勿論困る事に、無上の喜びあるといふ、キャンパーアには、讀めた理窟になるのかも知れない。

少々、此邊から、これ等のキャンパーアが違つて來てゐる、原史時代の生活を髣髴ならしめるといふ、言葉に、キャンプライフを價値づけようとする人々に取つて、その價値が不自由を買つてゐるより以上のものはない、

まだこんな人々は、幾分でも、ましな方だが、山へすぐ、自分の都會生活を植付けようとする人々がある、ダンスレコードも持込む事を忘れてゐない、それでゐて、山の不自由

燈は暗くして階段靜かなり　同　同
嬉しきはコースを變へる破目になり　大阪　黑天子
つきあひへ年を忘れて歩いてゐる　同　同
同衾の男は忘れられてゐる　同　同
心プラで足がもつれる空財布　大阪　南面子
果しない合唱いつもの二階ですこかけ動かず冷たい石と思ふなり　同　同
ハラキリと櫻日本はよいところ　同　同
自家用のあとへゆれてくバスの嵩　大阪　吐句坊
世間皆俺に逆らふやうにすみ　同　同
おごかそとそつと上ればみんな留守　同　同
仁丹を盗んで留守の部屋を去り　島根　鴉天
ルンペンの目に花吹雪唯淋し　同　同
大馬鹿と信じきられてよく睡る　同　同
迷ひ出たとこ花園であつて欲し　笠岡　雀子郎
そつと置く積木に似たる生活苦　同　同
ドンファンが去んでかしまし女給たち　同　同
二男から育兒法なぞ捨てられる　愛媛　孤鶴
幹までも靡く柳と早合點　同　同
家主とはかゝはりのないつばめの巣　同　同
　　石川　柳村

を樂しもうとする、この矛盾の心理の中に無理ありと理論つけて自の滿足點にたどりつく。

何が不自由だ、何かあれば、そうすぐ口の下では、いゝ出す。

面白い事には、火をおこすにも、日常家庭の瓦斯にマッチでつけることより知らないので、火をつくる事を知らない、パロメチースが、やつと山の生活にゐないかと思ひ出す空罐の利用が考へ出され、火をどうして作るか考へられ、薪にどんなものがよいかゞ解つて、すべての生活の資料が、自分に作り出され、作り出す爲めに、蓄られた智腦が、生活に沿つて生れる、そこにキャンプライフがあり精神がある。

不味いものが、食へる樣になる、自足經濟の本質が判りし始めて。自分の常の生活に反響させて見る、そこに近代農村問題もよく考へられるだらうし、不景氣と、又濱口さんが死んでも、する事が判きり解つて來る筈だ。

間違つても、見ることが不足してゐても、その他は見ようとしないのが、世中のこのごろらしい。

やれ經濟不況だ、農村問題だ、外交だ、教育問題だと、問題の問屋が、今の日本である

爲替が二十五弗を割つた、米國が金禁止をしそうだ、輸入超過だ、こんな自分の考へと用意のなかつたことで、招來した結果を誰れに聞えよがしに、云つたつて誰れも、それは聞こうとはしない。

認識不足は、アメリカやイギリスやフラ

ステップを踏んでねだるも女の子　同　同
うたゝねの裾から六月の咳　大聖寺　吉祥
女給よりいゝポスターがゆれてゐる　同　同

父長病にて

七年を石の如くに寢る父ぞ　廣島　露斗

工場のひま

休まない程度に仕事さすらしい　同　同
金持よその利子だけを貸して呉れ　松江　冬生
トマトの赤さにマダム油ぎり　同　同
新綠は光るに續く藥瓶　鳥取　耕民
明るさは衣桁五月の柄になり　同　同
理に負けて逃れる道へうづくまる　京都　啓秀
貧しさの無口な意地を誰が知る　同　同
起される事も樂しい日曜日　兵庫　普天

交叉點風景

乘りちがへ子を携げてあわてゝゐる　同　同
純情を組し易しと見た不良　大和　白帝子
零落れてから親と子の意見合ひ　同　同
ゐ次第で釣られてもやる氣持なり　福岡　河鳥流
叱られた娘に糸がもつれてゐる　同　同
三越と三井の間通りけり　大阪　青兒

ンスばかりだと日本は思つてゐたが、今始めて、自分の認識不足が判つた。

産業立國、そういつて如何にも生産國らしい鼻をうごめかしたが、それが非合法であり認識不足だつた。

原料がないつて事を初めて知つた。

人間が多いけれど、仕事に役立つのがいないつて云ふ事も判つた。

こゝ十五六年前の小學校の讀本に分業といふ事がのつてゐた、それを今の大人が子供の時に教つた、アメリカニズムの大量生産と原料豊富と資源のともなつた國の事であつた事も今氣がついた。

世界の一等國の工業が、その工業的價値に於て、三等的工業であつた、日本で出來る工業は、世界のどこでもが出來る工業であることが判つた。

製品の目方が金の目方と同じであられば ならないと考へてゐたのが、フランスやその他の國の工業であつた。

一つの機械の價格が、その目方だけの金貨で始めて賣とすれば、それこそ産業立國らしい、フランスの失業者の少ないのも高級な工業にある。

之等工業は、失業者は、不況と共に製産された。

農村問題に火がついて、今にも佐倉宗五郎が飛出しやしないかと思ふ。

今始めて、自分が自分の認識不足を判り見た。

同情をすれば落込む罠なりし　同　同
眼の小皺寫してからをうこまれる　大阪　勝二
繼ッ子へ隣の袱紗が熟して來　同　同
駈付けて呉れた巡査が頼りなし　京都　草村
人間の弱さ尊さ銃が要る　同　同
さかむけこ爪の垢こにうこまれる　大阪　白柳子
小刀のきずだけ歪む定規にて　同　同
不幸にも勇士こならず生延びる　大阪　菊路
四十一始めてこいふ妻を持ち　同　同
騒ぐ奴だけに慰安の椅子を呉れ　福岡　木喰象
虚か實か敷布へ涙音をたて　同　同
初夏の陽を受けて車掌はあくびする　京都　富美三
初夏の陽がつばめの白い胸に映え　同　同
草に寢てはるか野球の人だかり　東京　蒼梧樓
忘れたる指輪にそれこなきおそれ　同　同
自らを偽り變を爭ふ日　蛍ヶ池　煙太郎
愁ひなき人に倣ひて草に寢る　同　同
紙屑の一つへ社長カンを立て　大阪　素月
STOPを盗聽らしく驅け抜ける　同　同
ウインドの裝飾に夏がついてくる　大阪　呑吸
空想をしばしむさぼる女店員　同　同

經濟界が、逼迫するにつれて、謂ゆる、儲からなくなつた、儲ける事が趣味の樣に儲ける事以外何もなかつた、人にはかへつて眞に考へさせる時代になつて來た。

儲ける事が、なくなると淋しうもなる人生だつた事に、人間生活の見解がやつと判つて來た。

氣を引立てる事は、儲ける事ばかりでないことも判つた。自分一人のやり方ばかりで、いけない、自分の力のみでどうしようもないと、はじめて眞の吐息をついた。

購買力の有無を問はず、インフレイションをやつて、物價が騰らないことも判つた。

農村も、米や野菜を完全に商品化しないで儲けやうとのみする。

すべての考へ方に、創作がなかつた。經濟界にも、産業界にも、政治界にも、すべてに創作がなかつた、率いて

人生にも創作がなかつた、それが、つひにつまる所まで來た、安値な安逸が自分をくらませて始の自己滿足が一個の自我になり切つて、すべてを眺められなかつた。

創作といふ、一個の鋭角性が、鈍ぶつて、あまりにも、だらけたまゝで來た、それに對して、自己判斷も、内省力もなくなるまで自己陶醉を行つて來た。

創作と云へば、藝術界も、御多分に洩れない歩みの上にある、世の中の風といふ、一個の不可動力的なものと考へて、之も其まゝ押して來た。

張板と一緒に傘も並べられ　石川　青嵐
鐘が鳴る俺の心にさもにたり　同　同
馘首だつた事病人に知らすまい　大阪　まさる
看護婦のめがね冷たく光る朝　同　同
榮養不良の苗がひよろ〳〵　兵庫　瑞穂
神棚の下でまんまと嘘をつき　同　同
玄關に見劣りのするおのが靴　大阪　鯉友
國の母土産の中にれんげ草　同　同
糸瓜より君南京を植へ給へ　大阪　夜王
こんご借るとこ考へてゐるソファー　同　同
世の中がごう變らうと二階借り　愛媛　素舟
經營難を思はす新聞社の硝子　同　同
ちと寒うカンカン帽へ降つて暮れ　石川　革刄
駄目だとも云へず藥へ頼らせる　同　同
鯛網を見てわがものゝやうに云ひ　高松　楊半山
とは知らず且那の世話を下女にさし　同　同
ビール飲む庭樹の雫灯に光る　大阪　平八樓
農夫もう信じられない世と思ひ　同　同
貧乏に人の誠を教へられ　大阪　紀太
五十圓のパナマ帽にも雨が降り　同　同
めしいつか焦げてあるなり竹箒　大阪　大夢子

美術界も、師匠の引がなければ、畫家として存在しないまで固つた。

好いか惡いかを考へる餘裕は毛頭ない、それを利用しないものが時代落伍者であり時代を解さないものであり、畫家でなくなつた時代が作つたものは、よい惡いは別として立派であり絶對な價値となる。

大衆の支持するものが何んでも一番よい事になつて選擧運動の時の誰れにも御便利主意な政策の樣になつた。

八公熊公にもよいとほめられねばならない、そこに觀者の藝術的批判力の有無は別問題だ。

かくして藝術の領海は、平面へ平面へと擴がつた、よいことか惡い事か之が時代として迎へられてゐる。

その時代だけ價値のある事でよいらしいすべてが現實主義の專横にゆだねてゐる。

知らなければならない事と眞理である事とに到達しないで、自分を何でも正しい自我と決定して了つてゐる、そこに自己批判もなければ何もない、それらの感情の人々が謂ゆる社會的の見方として、又一つの決定を與へてゐる、そしてそれ等認識の不足した人々が世間の賞めるものは正しいと、一途に思つて自己催眠と自己詐稱にかゝつて、充分とし足りたとしてゐる。

之等の事がすべて社會層の上にある。ことに藝術の上になどは直多い事である。

ところが、こゝに野蕃人の社會を見た文化

電車までは大事に持つた花なれど　同　同

結婚して

素張しいリズムで朝の臺所　今治　曉童
何もかも知り吸取紙すてられる　同　同
歸らうと子供が云はぬ池の鯉　大阪　憲坊
隣でも眼醒しがなる春の朝　同　同
折詰の空を投手の型で投げ　愛媛　世都象
電話口裸のまゝで走り行き　同　同
つまさきは重し義理だの人情だの　大阪　卜居
人間にそむきて壁に親しまん　同　同
女給等の意地とは哀れエロなりし　金澤　今雨
たまさかに歩く妻だに遠慮をし　同　同
椅子に淺くかけるも俺の貧乏　長野　有爲郎
金魚鉢重役室を落つかせ　同　同
短夜へつんのめつたる儘に居る　松本　句念坊
飢餓線を走りて良に氣が付かず　同　同
寂しくてすましてみたが寂しくて　螢ヶ池　靜太
脱ぎ捨てた草履に心見られける　同　同

入院生活滿三年

アルバムを開けば死んだ人ばかり　螢ヶ池　美子
愛人の仕草悦しく目で受ける　同　朗

人に、それの一つの生活を充分批判出來る樣にあるより以上の知識層と人生體驗を持ち合せてゐる部分の人々が、それに對して、その批判を正しく高い所からしようとしてゐる一部があるけれど、世の中は、それ等の人々の批判は大衆の支持する所でないとして斥け勝ちな形である。

十年、五十年、百年の後にそれ等の人々の批判の正しさが判つた時、又その批判のすべて達した時、その藝術なりなされた事は死んで行く。

その塲だけの、世間的なよさで滿足したものには、つひに生命は蘇がへらないだらう。

川柳にも、今までいつた事を以ていひ當て得ると思ふ。

川柳書架（四九）

僕と語る

木村晃卓

▼その「序」を左に擧げて著作の意のあるところを示すことにする——

此の冊子は僕と語る赤裸々な僕です、句の善惡を茲に問ふものでもなければ勿論世の同情を乞はんつもりのものでもない、只病むが故に貧しきが故に人は皆健全に且つよく働らかん事をこの

ふるさとにこんな蛙の夜があつた　螢ヶ池　寒子
友の死へゆうべの雨が光るなり　同　同
デパートの呉服へ男觸れてみる　同　青鬼

日君を送りて

病癒へ去る友なれば悲しまず　同　同
ひやかされあんな男にする女給　大阪　北人
物思い菜種の花がつゞく道　同　同
金持てばなんと日本の面白し　堺　慈雨來
妻と子と晝の苦勞のまゝに寢る　同　同
溜息をしてお針娘は鏝を燒き　大阪　こも坊
團体をぬけて我が子に會ひにゆき　同　同
ピエロとは男なりけり淋しき世　大阪　沐天
唇に醉つてお前も芝居じみ　同　同
二階借りされど大阪市民なり　大阪　方眠
酒のあじ女のにほいはたちすぎ　同　同
母らしいのが入りしぶる喫茶店　大阪　秋無草
寫眞班お城もこれるとこで待ち　同　同
握りつぶされた金魚こそ災難だ　大阪　坊茄子
三十の年增苺の熟したる　同　同
大阪のまんなかをひとりであるいてる　尼崎　義郎
スカートが風に吹かれてる夜でした　同　同

念願である。昭和七、六晃卓生

▼菊半截上部綴一〇〇頁

▼内容の形式は句帖の如きもので一頁の左端に一句宛掲げられてゐる。著者からの書信に據ると、本書は柳友に頒たんがために出したものではなく、自分の死後親戚の手に渡して一人でも川柳を知つて貰ひたいためだとのことです、本書を手にした私は心から私に師事してくれた著者晃卓君のために涙ぐまずにはゐられなかつた。師としての德のない自分は內心じくじたるものがあつた。賣品でない本書の奧附には左記の文字が烙きつけられてある。

此の冊子編輯に當り松本市大名町石曾根民郎氏の御好意と御盡力を忘れない事を明記して置きます。昭和七年六月別府市下野口木村雄賀（晃卓）

▼本書の句は環境を痛々しいほどに切實に卒直に詠んでゐるだけに驚くべき迫力をもつてゐる。

昭和自選　川柳集　第一輯

▼柳樽版で和綴四六頁、非賣品。

發行所　大阪市外守口町大枝二〇二　川柳同舟會

▼岩本素人君の編輯である。作家は全國にわたり呉越同舟である。

病院にて（二句）

檢温器破れて話題がふと變り　蚕ヶ池　湧水
日光浴なんと細いよ我が体　同　同
安らけくねむりかけるに醫者の來る　西宮　三代吉
愛慾の眞つただ中へカルモチン　石川　水玉
不自由なライターですふ都會人　大阪　永樂
美容院ほめる言葉の種がつき　同　儀助
七月の鋪裝工事へ動かぬ陽　神戸　麥刀子
汽車の窓日は五月の田に走る　石川　醉羊
股引をはけばほんとのわが姿　高知　鐵吉

軟弱外交官へ

握手して心の刺を感ずまい　大阪　洋々

美粧院にて

その日まで顔を任して夢多し　同　貴志子
忘れたい金の思案に眼がうるむ　京都　蜂郎
失業者の樣な氣分で晝寢をし　大阪　句林
バランスの犧牲となつた生き字引　福岡　奇惠兒
明日にも返す心で借りし金　鳥取　湖山
調査團滿洲に來て氣が變り　神戸　幸村
變人へ金の工面をたのんで來　愛媛　虹一
川一つ向ふは祭畑をうつ　石川　しとし
種痘醫へ娘ヴワンプの型でゐる　大阪　ヨネダ

近作柳樽十句評（前號）

松丘町　二

崖の砂一つくづれて事もなし　閑生

しんかんとた午さがり、太陽は疲れ、木々は默し、風は死し、生きとし生けるものゝ動かぬ中に、ふと思ひがけなくも崖の砂がばらりと崩れた。靜中の動この一瞬間を捉え得た作者の眼を除いてはあとは、再びひつそりしたもとの靜寂だ。去りげなき描寫に自然との核心を捉へて誤たぬ手法を見よ。人々は例へばテーブルの花瓶の花が、ひとりでに崩れて落ちた瞬間を見たことがあるか。崖の砂が自然に崩れて落ちた瞬間を見たことがあるか。かゝる瞬間はまことに我々の實生活中稀有にして貴ぶべき一瞬間なのだ。かゝる當然なあるがまゝなる一事象に、驚きの眼を見はるといふことは詩人の中なる詩人の心であらう。

疲弊農

山の膚をむくやつれに痩せ草々刈る　艸樂

かつて飴ン坊氏は「やうに」は單なる二つの事物の比較形容の語であつて、表現手法として働きなく價値少きものと難じ、三太郎氏は「やうに」は決して飴ン坊氏の云ふやうな「やうに」に非ず。一つの表現技巧にして、輕卒に難じ去るべきでない。とゝに反ばくしたことを記憶するが、洒落や滑稽の手段としての「やうに」又は「如く」は別として、場合によつては、一向差支ないことは、この句に於て見る通りである。かうした素材の句として屢

勝尾寺かすかに河鹿聞き流し　大阪　正路
ふくよかな乳のあたりをひこりもの　同　玄坊
ダンスでも踊つて金の使ひ道　同　天柳
本買うたサクラが二人散るを待ち　同　晴雨
斷崖に危なく見せる鳥の巣　同　笛秀
銀幕の如く曇つて波もなし　同　葉光
老僧は昔のまゝの口をきき　愛媛　靜光
可愛さよ箸を揃へてもう眠り　同　みの
賽ころにけづられて行く頬の肉　福岡　一田
我が影を踏み〳〵歩く暑さなり　大阪　小舟
貧乏が無限の恐怖になつて居る　同　洋花
あんまりの噂に母娘宿を替へ　尼崎　虚白
餌を持つてきのふの鳩を待つてゐる　泉北　錦石
大雨だべーヴメントが踊つてる　大阪　木公
モタイナヤ飯が苦勞の種となり　同　幸男
刻み行く針へ不安な戀となり　松江　汀華
晩酌にもんくも言はず精進日　大阪　巴調
たまさかの早起き雨に嗤はれる　愛媛　南葉
懐ろに手を入れ庭の藤を見る　山口　宙芥
歸省する度にかなしい父の皺　東京　花亭
切抜ける智慧をしぼつた明日の金　松山　松葉

々陷り易い徒らな感傷や悲鳴や怒號に墮さず、説明にも終つてゐない。

暗殺の世にもわたくしのうたね　雅幽

一讀微笑を催さしめる。「わたくしのうたゝね」歌ひ得て妙である。一種のあきらめに似た安易さと、心の平和さを思はせ、延いては主人公を人生に對する「わびしさ」と云つたものが感ぜられる。

春夏秋冬思ひのまゝの桐だんす　奇叫愛

女主人の生活と性格を語つてゐる。「思ひのまゝの桐だんす」いゝ言葉である。これは滔々たる工藝作家等のマンネリズムの手によごされてゐない。

はだかが裸をみならたゞに美しき　蒼太

官能描寫に獨特の境地をみせる作者は、こゝにも「をみなら」など句に相應しきよき言葉を撰んでゐる。「たゞにうつくしき」如何にも世の常の常識的な批判を超えて「たゞにうつくしき」と批判にあらざる批判を、深き省察の眼を、女の姿体に向けてゐる。

まぼろしさめなば追はゞ身なり　綠之助

切實な心を見る。「まぼろしさめなば」我等常にまぼろしを追ひ、まぼろしに憧れては、幻滅の悲哀を繰り返す。まぼろしの追へる間はいゝ。現實の生々しい陰慘さに眼をそむけて、まぼろしを織るには、餘りに自己省察に馴れた自身だ。一時代前の人々が、その少年の頃空想の夢を織るべく仰ぎ見た當時の青空は、今やいん〳〵と降る煤煙に曇る空と

新任が來るこ母校を思ひ出し　泉北灯羊子
散財の影を映した河岸向ふ　大聖寺白花子
呑む事の多き春なり五月なり　伊豫芳岸
停止線チト行過ぎてごなる聲　大阪正晴
競馬場へ行くに俥を値ぎり　青島琴舟
二三日位は病氣もしてみたし　大阪青米
市場から腕拔けさうにさげて來る　同　禿山
こもすればわすれ勝なる許嫁　同　定夫
鮮人は鮮人の唄夕月や　同　山茶花
鉛筆をけづりすなほに返事する　京都豐次
心臓の弱さを自覺して淋し　島根與詩雄
整然こしてロボットの儀杖兵　松本正司
灯がついて金魚豐かな吐息する　大阪向歩
小説を小説こして讀まぬ母　愛媛紫雲
夕立へ咳のはげしく止まずして　螢ヶ池煙柳
屈辱に下駄の鼻緒が切れそうだ　同　のぼる
空寒う辨當函の鳴つてゐる　同　魔砂夫
今日は金を借りたい街を行き　同　英樹
セヽラギが聞えてるよだ鮎の肌　同　松雨
肩がこる事ばつかりで女主　同　巻巴
ハイヒール八百屋に用があるらしい　同　公平

變つてゐる。あはれ何處へ行く。追はるゝインテリルンペンよ。

筍が土を破つたさみしき健康よ　羅門

この句をほめたら、或る鑑賞家の友が自分には解らないと云つた。で僕だけの意見として、すく〳〵と伸びゆく旺盛な生長を秘めて土を破つた筍だが、彼等の明日への生長は明日への食膳を意味するのだ。何とさみしき筍の健康よ。と作者が觀じたのだ。と云つたら或る程度れ。と彼氏は一應納得した。そして僕はかうも考へるれ。と附け加へて云ふには僕は「さみしき健康」を作者の健康と見たい何等の顧慮も逡巡もなくぐん〳〵空を目ざして伸びてゆく筍の生命力と、潑溂たる健康に比べて、虐げられ踏みにじられて朗らかさを失なはうとする自分の魂と、その魂の棲家として徒らに頑健な肉体と——魂と肉体との相剋に深刻な惱みを惱む身へ、世間は「お達者ですれ」と洒々と挨拶する。悲しい健康でなくて何であらう。といふ意の句だと彼氏は云ふ。成る程れ。と今度は僕が答へる、從來一つの句の意味が二つにも三つにもとれる場合は、焦點のきまらぬ句として推稱されなかつたが、それは表現技巧の未熟さとか、素材のつまらなさとか、そんな句の場合をさすので、作者の主觀の完全な燃焼に依つて生れ出た句の場合は、鑑賞者の頭の程度と一種の直感から、解釋が多様に岐れることは當然であつて、あやしむに足りない。君と僕との解にこの相違をみたのは、この句のもつリズ

支那服を着てらつしやいと云ふ彼女　同　比呂志
町行けば段々船が見へて來る　堺　曲豆
長唄が嫌いで父の娘なり　大阪　岩石
星を數えて更生の朝を出る　同　白峯
妻に似た勝氣と俺に似た短氣　大和　翠峰
聞きづらい話へ目鏡拭いてゐる　大阪　史錄
去るものは去れど大阪に人多し　同　あや美
運命を聞いてる空に月白し　同　富士雄
念佛のふつと童心よみがへり　松江　苍二

長女朝子と命名

日月の下に幸あれ女の子　兵庫　鳴玉
遠く話を避けて眞面目なり　大阪　四五磨
笑ふばかりが慰めでないものを　同　宏朗

不朽洞にて

句を選むといふことは砂の中から金を求めるよりも難しいことだ。神樣でなければ出來ない仕事のやうに思はれて怖ろしい氣がする時がある。しかし珠玉の句を手にしてためつすがめつするよろこびを感ずるうれしさもある。萬一目をすつて諸君の名句を見落すやうなことがあつても、僕としては全力を傾倒してゐるのであるから容してもらひたい。だん〳〵個性がハツキリしてゆく作家の前途をみつめてゐると愉快でたまらない。精進を祈る。（路）

ムの複雜さによる。このリズムに共鳴すべき君と僕との心のアンテナの相違に依る。僕は君を尊敬すると同樣に、この句に對する君の見解を尊敬しやう。そして同樣僕の見解に對する君の敬意を疑はない。すると彼氏は會心の笑みを洩して云つた。君の言や佳し。そして僕はこの作者の句を愛する」

いつまでも〳〵積んでゐる煉瓦　大夢子

この單調さ。この單調さは一種の壓迫感をさへ覺えしめる。「これが君の人生だよ」と呼びかけてゞもゐるやうな煉瓦。「君見たまへほうれん草が伸びてゐる」路郎「バラの木にバラの花さく。何事の不思議なけれど」白秋「よく見ればなづな花さく垣根かな」芭蕉。

思ひ出さう思ひ出さうと剝く筍　秋彦

これは又ほのかなユーモアの漂ふ句だ。筍はきれいに剝かれて仕舞つたが、遂に思ひ出せない。爪にしみた筍の匂ひが匂つてくる句だ。「何か思つてゐるんな蠟を割り」水府。

燕が來た素直な私になつてしまう　司郎

井泉水一派の「層雲」の覗ひ所と期せずして一致してゐる。川柳獨特の强烈さを避けて素直なリズムと素直な表現に、作者の心が嬉しく偲ばれる。十句中殺も既成觀念の所謂「川柳味」に乏しく、若しくは「川柳的表現味」に缺け乍ら、尙一つの清新なスタイルを持つと觀るのは、私一人の好みばかりによる言葉ではないだらう。川柳を邪道に進めて、邪道から救ふタアリシチの一人として、私の作者に期待するところは大きい。

武玉川初篇研究（三）

梅本秋農屋
森東魚
蛭子省二

（28）説經の上手か嶋に生キて居

東魚＝嶋へくる罪人に説法してやる老翁がある。恐らく其人の半生には波瀾があり暗さがある――こいふ人物が想像せられる。

秋の屋＝私は佛家の説教でなくて、三絃樂の説經節だと思ふ説法と説經では大なる相違である。内地に於ては既に癈れた説經節が、遠い島地に殘存してゐるのである。

省二＝説法と説經が等しい意味で用ひられて居る例はある。が、説經節説は又面白い。――私はナゴヤ產丈けに説經源氏節を知つて居る。東京に在つては若太夫一派の説經節をよく聽いたものだ。

（29）相圖にするをしらぬ看經

東魚＝「看經の間うれしい顏二ツ」で、一方はキツカケにされるともしらず、鉦を叩き經を唱してゐる。輕い皮肉な味がある

秋の屋＝親父か姑女か。

省二＝マア姑女として味はつてみたい。

（30）柏もらいの下手な木登り

東魚＝柏餅を作るので柏の葉を貰ひに來たのであらう。

秋の屋＝前説の如くならん。

省二＝下手な木登りは、何の技巧ではあるが、これ丈けで意味がこれるのである。

（31）智惠のない顏が揃て扣キ鉦

省二＝皷鉦、ふせがね、皷形の鉦、扣いて念佛をする。智惠のない顏とは皮肉過ぎるようだ、イヤ隨分お有難い連中の寧ろ得意顏は、他からは滑稽に思はれる。

東魚＝法華の太皷だつて他からみれば、隨分馬鹿〳〵しくみ

へる。

秋の屋＝地方の農家なので、念佛講を行ふ光景で、愚痴無智の男女である。

(32) 家内の留守をねろう鶏飯

省二＝鶏飯位はおとなしい處、、ねろう饅汁黨であらう。

東魚＝鶏飯は鶏喰の書損ではないかと思つてゐる。松魚喰ひイカモノ喰などの言葉がある、異常に殊にそれを好んで喰ふものに上記の如く「何々喰ひ」と稱する。生物をつぶして喰ふので家内の留守をねらう特に鶏好きな男を描出したのだらうが、飯は少々變だと思ふ。又この時代に鶏飯といふものがあつたかどうかも疑はしい。

秋の屋＝書損説に賛成する。昔は鶏飯といふ物は無かつたと思ふ。親子丼といふものも、明治の初年に出來たものである。

省二＝書損かも知れぬが、古書に鶏肉と糯米を食ふは害ありなど載つて居るから、或はイガモノ喰に鶏飯もあつたものではないかと察したのであつた。明治事物起原をみても親子丼の項がなかつた。

秋の屋＝明治初年に櫻飯といふものがあつたが、これは鶏血を採り味をつけて、飯に掛けたものである。これに鶏肉を入れたのは勿論で、今の親子丼に卵の無いやうなものだ。これも現今は廢れたらしい。

(33) 賣喰の丁子頭は無念なり

省二＝丁子頭、チヤウシカシラと讀む。諺に丁子頭生ずれば吉事なりと。「昨日の晩の丁字頭がこんな小判になりやした」(壇浦兜軍記)。燈心をかきたて、丁子頭を落す時に、丁子丁子吉丁子と繰返し言へば、貨財吉事が得らるると。賣喰も此世に未練は百パアセント、無念の思ひあるも無理からぬ＝「すさまじい丁字頭と三浦云ひ」

東魚＝自ら嘲つてゐるやうな心持がある。賣喰ひでつないでゐるのに、丁子頭もないものだ——といふ自嘲的氣分の中に一脈のユーモアがある。

秋の屋＝支那では丁子頭を燈花といふ。「聯珠詩格」に

有　約　　趙　師　秀

黄梅時節家々雨、青草池頭處々蛙、有約不來過夜半、閑敲棊子落燈花。

とある。私の幼年時代には、この丁子頭を、燈心押を以て、油皿の中へうまく入れると、吉事が來るけれ共、萬一取落すと、吉事が去ると稱したのである。

省二＝樊嗇同陸賈曰、自古人君受命於天有瑞應乎。賈曰、目瞤得酒食、燈花得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而有事喜（漢書）。田宮仲宣の橘菴漫筆に燈花を喜ぶ事が出て居る。

(34) 尋て歩行穴藏の壁

省二＝穴藏—例へば今日の地下室は書も電燈がついてゐる、その感はせぬ。私は毎日酒倉を巡視するが、釀造季を過ぎた今では、穴藏程暗い。因に「我衣」に、夫江戸穴藏の始は、明暦二内申年本町二丁目和泉屋九左衛門と云ふ呉服屋が始なり云々

尤も此說を否定した本もある。

東魚＝「尋ねてあるく」は、かなり穴藏の大きさを思はゐる私の生家にも小さい穴藏があつた。夏などは格子の蓋をして置くと涼しがつて、皆な其上に晝寢をしたりしてゐた。

秋の屋＝現代の地下室と異なり、昔の穴藏は甚だ狹いものであつた。家人が見えないので、彼方此方を呼び歩くうちに其人が穴藏の中から返辭をするといふ句である。

(35) 記念屆けて元の奉公

省二＝記念はカタミと讀む。

東魚＝亭主に死別れて、かたみの品々も夫々送り先へ送つて舊主家へ又奉公するといふ意味であらう。甲斐〳〵しいが運の惡い年增の女が連想される。

秋の屋＝少し句意不明瞭だが、前說の如くであらう。

(36) 古骨買の辛崎へゆく

省二＝古骨買は古傘買の事。近世風俗志に、「京阪には稀に錢を以て買之、多くは土偶及び土瓶行平鍋又は深草團扇等を以て交易し物少き方より錢を添る。京阪此賈詞に、土びん行ひらきびしよやきなべ上うちわや上人形とかゐますでござい、なんなりかなりとかゐ升でござい、上人形は精製土偶の惣名也。江戸は交易せず、一古傘大略四文八文十二文許りに買之ゆゑに此賈を古骨買と云詞、ふるほねはござりい〳〵と云所荷具植木やに似て小也」と。

東魚＝奇拔な趣向の句である。拵へ上げた句には違ひないが又其處に妙味がある。

秋の屋＝傘の古骨買といふ名は、明治十年頃まできたと記憶するが、呼聲は近世風俗志の通りであつた。

(37) 低く言高く笑はおもしろき

省二＝人の噂などは此の流儀である——尤も此句噂の場合とのみ限らなくてよい。輕いお互の情的秘話などの折りにも、あてはまる。註釋するは野暮らしい。

東魚＝前句の工合によつて、此句など益々面白味があるのであらう。一句とした丈けでは熱が乏しい感がある。

秋の屋＝句としての巧拙は兎も角も、なか〳〵面白味があつて、凡手には作られまい。

(38) 勘當させた挑灯の施主

省二＝「提灯屋安い女郎は知らぬなり」。提灯の施主となる程の女郎は全盛なのである。「提灯を噓の名人共納め」に至つて、勘當のプロッセスも判かる。

東魚＝傾城と明らさまに云はず、挑灯の施主とした處が働いてゐる。氣が利いてゐる。(勿論附合としてである)。

秋の屋＝この提灯は、淺草寺、回向院等の開帳場に掛けられたものである。

(39) 朝顏の思ひ直して二ツ三ツ

東魚＝朝顏も末になつてもう咲かぬのかと思ふと、ふと又二三輪咲いたといふのを、朝顏が思ひ直して又咲いたと云ふ風にいつたのである。

秋の屋＝晩秋になつて、朝霜の置かむとする時の光景であらう。

省二＝「朝顔や九月の花に恥多き」（子規）

40）四月の紺屋立波にあく

東魚＝夏になつたから、例へば水茶屋などでも立波の暖簾にかけ替へたりするため、あきる程立波の染模様の注文が殺到するといふ意味ではなきか。（果して水茶屋がそんな暖簾をかけたか否かは知らぬが、明治時代の氷店などによくみかけたからあれらは其名殘ではないかと想像してゐるのである）。

秋の屋＝立波といふのは、五月端午の幟の模様で、「東都歳事記」にも其圖があるが、幟の上部に紺色で子持前を畫き、其下に家々の定紋を現はし、最下部に藍色で、立波を染出したものである。明治の初年、函館五稜廓の氷が、東京に賣出された時に、氷屋の日除に立波を畫く事となつたが、江戸時代の水茶屋には、立波の暖簾も日除も無かつたのである。昔も市中を賣歩く、水賣、白玉賣の屋臺の暖簾には、立波を畫いたのも有つたが

立波はもう風呂敷にして仕舞ひ

の句のやうに、風呂敷になる程の大幅の暖簾ではない。立波は端午の幟の代名詞である。

省二＝私は今「不斷櫻」の「幟にて夜着拵る乳母かもと」の句釋の筆を終つたところであるが、立浪も幟で、「川柳年中行事」には端午の項に次の如く列べてある。

立浪をもう風呂敷にしてしまひ　（　）

立浪をいゝ潮時に產みおとし　（化）

四月の紺屋立浪に飽く　（寶）

と。因に昔、女子童子許りでなく大人にも、大形の裾模様總模様が流行した事があつて、其模様には、立浪、渦、魚網、轡、輪違等々と記されて居る。

東魚＝立浪の模様などは涼しげなものだから何にかぎらずあつたのであらう。手近なところで、萬象亭の「田舍芝居」にも「立浪に水車を染出したる手織木綿の單物……」などある。恐らく一般的に色々立浪模様はあつたので、この句も夏には、その染物が多いと解し得ぬ事もないと思つたのだが、お說を伺つてなる程、それで四月といふ文字が特に面白い味が出てくるのだと悟つた。全く五月の幟と解すべきである。

（41）不食の給仕飛石を行

東魚＝この句充分解せぬが、言海を見ると「夫食（ふじき）人夫の食糧」といふ條がある。按ずるに「不食」は「夫食」の宛字ではなからうか。原本は明かに不であるから書損でもなからう。夫食の意とすれば、庭園或は家普請にきてゐる工人達に、其家から飯時の茶でも配んでやる場合と解せられる。「飛石を行く」で、庭傳ひに普請場へゆくと解せられるが如何であらうか

秋の屋＝「不食」とは食慾の無い事を只ふ。東京人もをり〳〵使ふ言語で、決して「夫食」の宛字ではないのである。「不食」は「ふしよく」とよむ。

省三＝宇治拾遺物語の五十八項に、八十歳の僧が進命婦を見て慾心を興し病となる、「誠は京より御堂へ參らるゝ女に近づ

き馴れて、物を申さばやと思ひしより、この三ケ年不食の病になりて、今は既に邪道に落つなんづる．心憂き事なりといふ」とある。因に「子高曰、我死則擇不食乙地、而葬我焉」（禮記）なぞの語もある。

東魚＝私も初めは「不食」を食の進まぬ意にとつて、飛石をゆくといふのは、途切れ〳〵の給仕のさまが恰も飛石をゆくが如くだといふ洒落の氣分かと思つたのであるが、餘りに奇に走るやうに考へたので、前說の如きではないかと疑つてみたのである。お說を拜見して矢張食欲のない方が正しいと思ふ。さすれば句意は離座敷にでもたれ込めてゐる人に給仕する場合と考へて受けとれない事はない。この前句がどんな句かそれが分れば一も二もなく分明すべきである。

（42）鳶までは見る浪人の夢

東魚＝緣起の良い鷹の夢はみられない。やつと鳶位まではみるといふ諧調。奇拔な面白い句。

秋の屋＝「鳶が鷹を產む」といふ俗諺があるから、鳶の夢も吉兆として宜しからう。

省二＝「鳶の子鷹にならず」で、鷹と鳶には階級が附けてある。關東大震以來の浪人たる私は、もう鳶の夢さへ見なくなつてしまつたが、先月持病に特効ありと、友人の厚意で鳶を食つた。外國でも東洋でも鳶の肉を忌む風習があるが「鳶までは食ふ浪人の德」と笑つた。

（43）貴人の方へ曲る罔兩

東魚＝對座してゐるかけ法師、一方はうつむいてゐる、一方は定めし貴人であらうといふ氣分。——明治大帝の御馬車の中に、德大寺侍從が謹嚴そのものゝ樣にうつむいて陪乘されてゐた姿を、小供心にもよく覺えてゐるが、まあ、ああいふ趣を影法師にみた場合と思へばよろしからう。

秋の屋＝川柳點の作句家は、事物を大まかに看たが、紀逸點の作句家は、細かい所に目を着けたやうだ。

省二＝武玉川には影法師が、よく巧みに材料とされて居る。

（44）鰒はいやかとたつた一筆

東魚＝鰒汁の誘ひに內證で筆談する場合。或は一寸一筆走り書きの手紙を使ひにもたせてよこす場合。鰒汁でも一所に喰ふといふ。言はゞ道樂仲間呑仲間の心持が、「たつた一筆」といふ處によく現はされてゐる。

秋の屋＝「鰒はいやか」、達意の明文である。

省二＝一筆啓上である。

（45）六月しれる娘の身代

省二＝「內中を嫁でふさげる暑い事」、土用干に嫁の全財產が展觀される。

東魚＝案外貧弱なものだといふより、なんと素晴らしいものだと云ふ方の氣分にとれる。さうとる方が「知れる」にいやみがない。又「身代」なる言葉の味ひが、豐富な方に響くやうに思はれるので、自分はさう考へる。

秋の屋＝此の「身代」は嫁の實家の身代を想像するのである

（46）**恥かしい目に島臺を能覺**

省二＝「はづかしの森は島臺松に竹」で、婚禮の際、臺へ松竹梅や、尉姥など飾りたる道具を島臺といふ。元來は食べ物を上せたのである。十五錢の費用で結婚したなどと新聞に出てゐたが、これでは島臺を借りるわけにもゆかぬ。兎角尖端をゆく結婚には恥しさなどないらしい。

東魚＝恥かしい、わく〳〵した中にも、はつきり島臺が印象づけられてゐる、花嫁の氣分が能く出てゐる。

秋の屋＝島臺といふのは俗語で、本名は洲濱である。

（47）**三めくりは蛙の聲に煙立**

省二＝三圍の入口には、汚ない池があつて、蛙が聲をたててゐた。其角時代からの子孫かと足を止めた事があつた。——今日の三圍は荒廢したと聞くが果して如何。河畔公園が建設された以上、三圍保存は當然附隨事業である筈なのだが。

東魚＝「煙立」は掛茶屋の煙であらうか。蛙がなき始めた三圍あたり煙が立つ。そろ〳〵茶屋も店を出しはじめるといふ春の氣分を捉へたのであらう。前句によつてこの「三圍」が動かぬものなのだらうが、一句だけでは不充分な氣もする。

秋の屋＝現今の三圍社畔には、自動車のガソリンの煙が立昇る。

（48）**掃下を段々辿て棚の下**

省二＝辿げ場所に窮した姿、そして棚の下も邪魔にされるかもしれぬ。

東魚＝友人の駒井みの作の句に「帚先き羽織をぬいで叱られる」があつた。棚の下へ追はれるのも面白い。

秋の屋＝達磨ならば棚の上へあがる。

（49）**合羽に尖る船の若黨**

省二＝若黨氣質が巧みに現され、尖るに客觀的敏感性があふれて居る。

秋の屋＝所謂三一侍で、瑣細の事に尖りたがるのだ。落語の「岸柳島」が聯想される。

省魚＝若黨が適切で面白い。子規に「五月雨に合羽つゞぱる刀かな」があるが、形丈けの寫生に止まつてゐる。この句は人物の氣分迄が出て、尖るの諧謔味が嬉しい。

（50）**夜討の跡にけいせいの帶**

省二＝チャンバラ十四字大衆詩。

秋の屋＝曾我兄弟の夜討か、富士川の平家陣屋か。夜討に三絃を踏折るといふ句があつた筈。

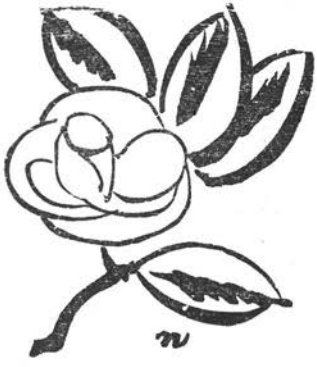
東魚＝「富士川で三味線を折る白拍子」であらう。この句は曾我の討人の方らしい氣がする。

（51）**羽衣を鮮い手で皺にする**

省二＝羽衣といへば漁夫伯良の登場をまたねばならぬ。「羽衣をなまぐさい手でらりにする」がある。「鮮い」はそう讀む。鮮魚とかくは新鮮なる肴の謂であるが俗にナマグサと言ふからであらう。ケイ三編に「鮮キ納屋の廂に草紙干ス」などある。

秋の屋＝昔の俳人等は種々の當字をかいたもので、この鮮も腥の當字に相違ない。がさつの漁父だから羽衣を皺にするのである。

東魚＝皺にするは尤も乍ら、チト味のない措字だ。



川柳塔

ひ・町・素・琴・山・綠・合議選

○　朝田新水

いつとなく友愛結婚してしまひ
謎にして妻の心を暗くする
めぐまれもせむいつの世にかは
氣を紛ぎらしてゐるに電報
夫の浮氣夢に病んでる
冷淡な男いつしか來なくなり
家建てゝ妻の理想が叶ふたり
紫陽花へ妻を忘れてゐたに飯
嫁の手の白粉くさいことを知り
陳列のパンよ懷中無一物

○　西田艸樂

氣持ちよい注文がはいつた朝の飯
無造作に握らせた手は太かつた
今になつて目覺めた事を笑へかし
燈籠の雫がポタ〳〵客團扇
女學校へ通ふ娘へ講義めき
男はんは德やこ道樂者にする
石投けて登る小雜魚を散しけり
提灯をつけて電車へ送られる

○　松盛琴人

巡禮の母子へ朝のお日樣よ
お茶の稽古に世の中が美しい
色つぽく見られて女誰か待ち
新聞社海嘯の如き音で刷り
ルンペン君！君はいゝ詩を忘れたね

○　關本雅幽

我を通す靴のほこりを眺められ
保證人探す世間へ引つかへし
梅雨晴れて物干し竿は紺がすり
米櫃の米がそんなに減る事實

手術した綠雨兄へ

足ばたくこと退院の日を數え
貧乏がうかんだたんび横になり

○　岩崎柳路

さや豆をむきく妻は流行歌
彷うて來てパパの晝寢を起すなり
智慧熱にもう安心の体温器

○　橋本綠雨

眞白い襟足に汗にじんで居

煙草店女は白いおてゝ出し

◇ 平岩司郎

前掛が泣けて來る氣を知つてます
魚屋の威勢に負けて起こされる
換氣筒ジャズを隣によく廻り
ペン軸をくわへる心隙多し
「誰れと思つて」風ある午後のアスハルト
しきり鳴く鳥六月にもろい僕
トンボ釣る子の見上げたる空はみなぎる

◇ 西村明珠

女房があるかい酒をついでくれ
スリッパをはかずに通る下女の母
こりかへたレースカーテン寢てながめ
夕涼み植木市からくたびれる
上役の晝寢をさますホッチキス
叱られる方へも廻はる煽扇機

◇ 日野華水

カーキ服今日一日の膝が出る
硝子戸がみんなわられて貸家札
澄み切つた瞳愛人らしくなり
潑溂と朝へ末ッ子泣いてゐる
櫻ン坊處女の唇奪ひけり
あの人と云ふ音になり聲になり

◇ 水谷鮎美

書留へ水晶のはんを押してゐる
遠ざかる尾燈ルビーに見へるなり
塗り盆のはげてる夏の暑いこと

借家風景（三四）

お隣りは法華わたしは寢つかれず
茶ばしらがたつて借家に氣嫌よし
灯が見へて夏の家並になつてゐる

◇ 喜多春秋

旨從の部下を叱つたカン違ひ
銃口へ夜明けの霧が流れてゐる

求職

威嚴とは多くをいはぬ事なのか
惡友の顎に似てゐる壁のしみ
狂人をなだめる樣にいふな妻

◇ 吉田水車

食堂は落ちぬ角度で持つて來る
願ひみな左傾と云ふも資本主義
土下座するやうな菅笠苗植はる
急行車先がつかへてよく停り
おとなりもライスカレーを抱へこみ

◇ 平井蒼太

僧院のやうに女教師三人棲む
零落の今ふるさとの土を踏む
見えすいたうその手紙を讀まれる
不甲斐なき兄の涙だ隱さんか
山越えて脫獄囚の晝寢かな

◇ 市塲沒食子

惚れてゐる證據に爲替送つて來
滿洲の話忠勇燗が出來
珍客へ寢むい眼で子が抱かれに來
灯がついて番臺やをら位置に付き

あやまちですまぬお腹になつてゐる　廣江天痴人

◇梅雨霽れやキャベツ畠の土にむせ田植から憂鬱となり隣りの娘　体重二十貫の夏　舍弟の結婚

汗ばかりブルヂョアめきていづるなり

亡き母にせめてカップルの夕涼み　熊谷紅

◇バスが來てシガーの先の火を摘み片々の下駄でのりやを追ひ掛ける　二人連女給が二階借りに來る旅の夜を一つ覺えた國訛り　木村光卓

◇人目には熱と思へぬ頬のいろ見かけだをしに服を着て出る内職に飯を忘れて居て呉れる　岩崎奇可愛

◇哀しさの涙でさえも乾くなり歌ふ聲甘えるに聲と異ふなり　ビフテキの厚さ七月だと思ひ　村松夢裡

◇令嬢にいやしくみせた爪の垢人間へ闘争をいどむか蚊の唸り　くつろげぬ座敷盃洗の水は澄み　中澤濁水

◇一人兒を洗ふ夫婦のもめてゐる　トランクは輕く檢査へ子が歸り　見替へてる路次に賣藥帖を繰り　松下小柳子

◇氣短かな男と見へぬ白い顔　書の風呂めくらが髭をそつてゐる　重かつた事をわすれた子の笑顔　生田翠夢

◇梅雨の空また失業をしそうなり　逢ひにゆく愚かな心雨がふる　妹尾變人

◇裸の可愛さ表へ抱いて出る　泣き聲に見向かぬ佛いたく　し

粒々集

—路郎選—

松山　前田五健

涼み船ポツカリと出た月に搖れ　我が家ではあるが深夜の臺所　宿直が蚊に足踏みの長電話　黒ッポイ着物が似合ふ美くしさ　水車番都へ娘浚はれる　東京　富士野鞍馬

乘ると直ぐ窓へつかまる子供服　幇間のチンドン屋とは思ひつき　目に青葉人はカンカン帽となり　寺の庭明るく派手に皐月咲き　御影　長崎柳秀

誘惑を待たぬでもなし女事務　毆られた毆つた人も長い髪　不器用に酌ぐは好かない男なり　妹へ感謝し乍ら病み續けり　忍耐も女房藝者の兒を育て

不朽洞句稿

麻生路郎

滿洲へ行く兄バーへ行く妹

書置の一ッはテロの兄へ宛て

氣違ひになる外はなし善人よ

悼五葉

藥湯の隅にひこりの君なりし

前號正誤　學校の倫理で行けば死ぬところ

川柳に就て

河盛純子

拙稿「川柳に就て」は私の學校の教科書に川柳が掲げられてゐるのと、たま〳〵私の父が川柳家であるところから川柳に關する意見を書いて展觀會に提出するやう先生から求められたまゝ執筆して母の補筆をうけたものであります。が少し難かしすぎるといふ先生の御意見で遂に展觀を見合はせ匡底にひそめてゐましたが、編輯部の方々のおすゝめで發表することにいたしました。各學校の先生方や女學生の方々に讀んでいただければうれしく思ひます。

○父の子として

私は川柳を作る才がありませんので、川柳を作りません。作りはいたしませんが川柳とはどんなものかと云ふこと位は朧氣ながらわかつて居ります。曾て私の父（麻生路郎）が短詩或は新短歌の名稱で川柳革新に沒頭いたしましたため從來の川柳家たちから異端者呼ばはりをされてゐた事がありますが、今日それ等の句は立派に川柳として專門家の間に迎へられるやうになつてゐます。然るに、或る教科書を見ますと、川柳を說く事が單に古川柳のみにとゞまり、其後の經路については何等の知識も與へてゐません。のみならず、川柳家の最も忌避する狂句なども時には例句として混合羅列してゐるのを見ますと、今も猶三十年計畫のもとに、新川柳社會進出のために家族の衣食を削り、自分の作句熱さへも犧牲に供して、奮鬪努力を續けてゐる父の子として、川柳普及のあまりにも遲々としてゐるありさまを慨嘆せずにはゐられません。

私は今、事新らしく川柳の起原を述べやうとするのではありません。傳統的な貝殼を破つて自己の心境を詠ふやうになつた近代川柳の姿に一瞥を投じて頂きたい抱負を以て淀みながらも語らうと思つてゐます。

○古川柳の眞髓

先づ手順としまして父が主宰して居ります「川柳雜誌」に掲載された父の評釋をそへて二三の古句を紹介して見ませう。

旅立ちは二度めのさらば笠ですする　古句

評「別れの言葉を一人〳〵に交してから、草鞋の紐を引締めた「留守中は家族が無事息災でござりまするやうに」と心のうちに念じながらも畦の曲りかどまで來た。玉蜀黍の葉に晝を淋しく鳴く虫の聲がする。これでしばしの別れだと思ふと、何となく後髪ひかるゝ思がして、ふりかへれば、我家のかどに妻も子も茫然として佇んでゐる。今ならば白いハンカチでも振るところを笠が別れのシグナルとなる昔さながらの情景である。」

迷惑な顏は祭の牛ばかり　古句

評「京の祇園祭、大阪の天神祭、江戸の山王祭を日本の三大祭と云つた。江戸の山王祭は將軍家のお膝元のお祭だけに祇園祭や、天神祭にひけめをとつては、將軍家の威光にもかゝはるといふので特に町奉行では各町の町役人を呼出し本年は山王の本祭であるから盛に執行するやうに」と命令的に言渡してゐたものである。さうでなくともあそびずきな江戸下級民がどんなに騷いだかは想像に難くない。牛は默々として山車を曳いてゆく。そこには疲勞があるばかりである。氏子の町内では囃子臺まで設けて、ちやんちき〳〵と騷いだ。江戸の祭の華やかさをさも誇るかのやうに」。

ぬひものを少しよせるも禮儀なり　古句

評「内儀が針仕事をしてゐる。そこへ客が來た。「これはお珍しい、さあどうぞ」とほんの少し縫物を片寄せる。別にそれがために座席が廣くなつたわけでもなんでもないが、さうするのも一つの禮儀だと川柳的觀察をくだしたのである。」

右の句はいづれも穿ちの句であります。

時には例外もありますが、古句の多くは客觀的描寫によつて、人情の機微を穿ち當時の風俗習慣を披瀝するのに、滑稽、諷刺洒脫の太刀を振りかざす事を決して忘れなかつたのです。

○模倣時代より改革への曙光

明治年間の作句者は此等の古句を典型として句作三昧に耽つてゐました。所謂模倣作句時代でありましたが、大正に移つてから、句風は徐々に改革を加へられやうとする曙光が見えて來ました。穿ち味は輕妙に、滑稽、諷刺は漸く原色を脫して間色の淡白さに變らうとする傾向がありました。或は穿ちを除外した純感じの句や、純寫生句さへ見るやうになりました。今適切な例句を引用する事は出來ませんが、

大佛の鐘杉をぬけ杉をぬけ　五葉

蟬の聲右も左も石疊　同

などの句は

松原の茶屋は煙るが景になり

の古句に比べると、同じく自然をあつかつてゐるのではありますが、前者は感じの叙景句であり、後者は作句者の理智にうつたへた穿ちの句であります。叙景川柳はよほど氣をつけなければ、月並俳句となり、純寫生句は稍々ともすると、「さうですか川柳」となる惧れがあると父は云つて居ります。「さうですか川柳とは」何等の特徴も持たない單なる事件の報道に過ぎない句の事であります。

辭職して何をか言はん植木鉢　五葉

此の句などは古句の如き普遍的な色彩を帶びないで充分に此作家の個性のきらめきが見えてゐます。

○異端視された新傾向

果太皷今や鰻を裂かんとす　日車
今日もまた煮豆か疲れたる頭　同
髭剃ると言へば事々しき水よ　同

信濃路にて

うれしくも町の半鐘が見ゆるかな　同
宵は酒淺間の煙今朝見たり　同
妻や待たむ靴音を高めんか路　耶
素肌素足眼が熱うなる櫻　同
遲櫻汽車の音ばかりきこゆ　同
鰹節に男のちからからるゝ　同

右に掲げた句は大正四—六年の頃尖端を切つてゐた月刊雜誌「雪」に發表せられた句であります。父は既に明治四十二年頃より句の革新を志し、柳誌「轍」「矢車」によつて句の向上を計らうと努めてゐました。勿論この當時でも多くの作家は依然として古句の足跡を辿つてゐたのではありますが、此等の二三の人々によつて投げられた覺醒の石は、大きな波紋を畫いて當時の柳界へ響いて行きました。江戸趣味の鼓吹者坂井久良岐氏からは毎日のやうに父の手許へ經濟を度外に置いた攻擊文が舞ひ込んだものださうです。異端者扱ひをされたのは此の「雪」時代が最もはげしかつたさうですが文壇殊に俳壇の先覺者からは驚異の眼を以て迎へられてゐたさうです。「雪」が廢刊になつてから「土團子」を出し、續いて「後の葉柳」を發刊しましたが號數僅かにして倒れました。

○川柳の社會進出

此時父は考へました。川柳の文藝的地位さへ疑はれてゐる今日に、柳壇的に川柳の革新を叫ぶのみでは到底其主義主張を徹底させる事が出來ない。それには先づ第一に川柳の普及を廣く社會に知らしめる事であるこ、父は日夜東奔西走して、教育者に、操觚者に或は青年團に今日の誤れる川柳觀を說き、餘暇を作つては、本島は申すに及ばず、北海道、四國、九洲までも足を延して其使命を果してゐました。私達兄弟は殆んど父こ顏を合す暇のない程父は忙しいからだでありました。今住吉區平野西之町へ川柳雜誌社の事務所を置いて發行を續けてゐる「川柳雜誌」は川柳の社會進出こ初心者指導の目的で大正十三年に阪神の鳴尾から其の創刊號を出したものであります。その頃、私は鳴尾の小學校に通つてゐましたが私の家では朝から晩まで毎日川柳家の方が訪ねて來られ泊つて行く人さへ珍らしくありませんでした。「川柳雜誌」の發刊こ同時に父は尖端的な鋒先をおさめて「週刊朝日」「キング」「講談倶樂部」などの大衆向きの誌上へも依賴されるがまゝに句を送つて來ました。それは從來の父こしては心苦しい點が少なくなかつたやうではありますが、ひこたび意を決した弟一計畫の完成を急ぐためには一時忍ばねばならない事であつたここゝ思はれます。

○新川柳の句境

川柳はいつまでも遊戯であつてはいけない。少くとも自己の生活を基準とせなければ嘘であると考へるやうになりましてから、つとめて自己の心境を詠むやうになりました。川柳はもう社會のあらさがしではなくなつて來たのです。滑稽、諷刺、皮肉は川柳が必ずしも具備せなければならない條件ではなくなつて來たのです。勢ひ女學生には女學生の川柳が生れ少年少女には童心の現れた句を見るやうになりました。次に「川柳雜誌」から父や其の他の人々の句を拔萃して句風の一端を示すことにいたします。これらの句は現代の川柳として最も新しい傾向であります。

雜兵に拜まれにけり　選擧權　路郎
借りる氣で行けば有馬の夏ときく　同
君見たまへ　波蘿草が伸びてゐる　同
家へ歸れば社長は社長僕は僕　同
くびきりにまがうかたなき父の御名　同

大正天皇を悼み奉る

草葬の臣かなしみの炭をつぐ　同
子よ妻よばらゞになれば淨土なり　同
ふと眼をやれば煙突に煙なし　同
お互の世にせうとしてかどがたち　同
寢轉べば疊一でふふさゞのみ　同
秋さらり銀のふすまのものおもひ　同
その日ぐらしも軒に雀がこぼるゝよ　同
電車のひゞき涼みになるものか　綠雨

秋風にすゝきもわれもさからはず　同
冬の抒情詩のポプラやポプラ　町二
雲よ散れちれうちも隣も赤ン坊　山雨樓
飛行機は流れるせなの子は達者　葭乃
への字くの字の字の子等の中へ寢る　同
人と鰯鰯は油したたれり　平八
貨車の牛神戸をさして急ぐなり　新水
花鋏花のいのちのそれ〴〵や　草木
瀨戸火鉢想ひはめぐり〳〵消え　雅幽
蛙ふくれるな埋めてかへすよ　石竹

以上は川柳變遷の概略でありますが一日も早く父が主張せる新らしい川柳の境地を世上一般の人々に味つて頂きたいと思つて居ります。（昭和七年二月稿）

新刊紹介

壬午鷄林事變（外骨編纂）　明治十五年の朝鮮事變の花形花房公使の飛躍振りを明治の新聞雜誌から拔載して編纂した風變りの傳記である。編纂者が外骨翁であるだけに翁一流の編纂振りがうかゞはれて興趣の深いものだ。（子爵花房太郎氏寄贈）

合歡の花散る日　近江砂人）　近江砂人（夷佐一）君が亡父の靈前に捧げた四六橫綴四頁の追悼記と川柳家の追悼句からなる小冊である。子としての美しい心が流れてゐる。

柳の絮

長野吉高

一六

「I can't see my feet or my hands……ピ、ピ、ピ、ピイ」
貞子さんは、靜かなピアノ獨奏曲のレコードをかけてゐたが頭々吹出して
「ま、ピピピなんて——」
茂里榮ちやんが、部屋の圓窓の外の廊下に置いたテーブルの上で、大きなフランス人形を踊らしてゐる。電球を青紙で包んで、窓の側にぶら下げてゐるが、これは照明の心算らしい部屋の中から見ると、この圓窓舞臺は蒼く照し出されて、動く人形がまるで繪のやうに美しく見える。しかも、其の舞臺の上の花瓶に挿した小さな百合の花が、人形の動くにつれてかすかに震へる。
「お姉さまア、つぎわすれちやつたア」
貞子さんはゆつくりと
「I want to go home」
舞臺の左手から別な人形が出て來る。茂里榮ちやんは、器用に其れを振り〳〵上手なアクセントで
「Come, don't keep on crying……かへりたいのよウ……ピピピピイ……Come……だつて、あたいかへりたいのよウ……ばかばか、ばか、泣きむし、よわむし……ピピピピイ」
ごうやら臺詞が目茶苦茶になつて來たと思ふと、急に人形を引込めた茂里榮ちやんは、窓から頭を出してベロリと舌を出す。
「ばア」
貞子さんはレコードを止めて
「ま、いやな茂里榮ちやん」
「お姉さまジャズをかけてちやうだい。こんごはダンスよ」
「ダンス？ダンスなんが無い筈でせう」
「いまのは、あれでカーテンにしたの。だつてせりふがむつか

しくつて、なか〳〵おぼえられないわよ」
奥の間の方から、茂里榮ちやんを呼ぶ聲が段々に近くなつて來たと思ふと、髪を茶筅にした上品な老婦人が部屋をのぞく雨軒居士の母堂である。貞子さんの母堂とは氣が合ふのでよく話に來る。
「茂里さんや――おやまあ、お人形芝居らしね」
「あらア、お婆さまア、すぢ書きごほりよ。お人形の方にももつとさきでお婆さまがでるところがあるのよ」
「えゝ？」
茂里榮ちやんは、窓からポンと飛んで扱けて部屋の中へ這入つて來る。お婆さまは呆れて
「ま、ま、何んてはねつかへりでせう――さ、もう歸らないとおつつけ九時だから、お姉さまご勉強のご迷惑だつて、ささ、其處らを附づけなさい」
「だつてお婆さま、明日は日曜なのよ」
「休ばかり大きくつても、おねんねさんで困りますね。お人形と遊んでゐないで、さ歸りませう」
「お婆さまつたら、いや。おねんねえだなんて――遊ぶんぢやないわよ。英語のおしばゐしてるのよ。これだつてやつぱり勉强だわ。ねえお姉さま」
貞子さんはほゝ笑みながら
「お婆樣、若し遲くなるやうでございましたら、茂里榮ちやんは私のお部屋へ寢かせますから、さう仰有つて頂けますと

お家でもご安心でございませうから」
「何時もお邪魔ばかりかけますね。では、置いといて歸りませうか――これ茂里榮さんや、歸りにお家へ寄つて、さう言つてあげるからそのかはり明日は早く歸るのですよ。――お姉さま、やんちやをしたら、たんと叱つてやつて下さい」
「お婆さまア、ではやすみなさい」
お婆さまも、この子には隨分もて餘してゐるが、其れでも孫のやうに可愛がつてゐる。
お婆さまがゐなくなると、茂里榮ちやんはすぐに貞子さんにもつれついて
「お姉さまア、明日は花屋敷ゆきませう。ね、ね」
「さうね。行つてもいゝけど、でもこの次にして、お友達と多摩川園へでもいらつしやいお姉さま、明日はご用事があるのよ」
「多摩川園ですつて？アラ、子供みたいね」
「あんたも子供よ」
「ちがふわよ。あたしはお、と、な――」
「大人？」
「に、なりかけよ」
小首を傾けて、澄んだ瞳をきよとんと見張つて、チラリと白い齒を見せる時のこの子の姿態は非常に可愛い。
茂里榮ちやんが、××文化學院に通ふやうになつてからは、或る有名な女流音樂家についてピアノを習つてゐたが、ごう

したのか突然にこのピアノ先生を嫌ひ始めて、どんなになだめすかしても、二度と練習に行かなくなつた事がある。ママさんが不思議がつて、其の理由を訊ねても、むつつりと默りこくつたまゝ何んとも言はない。しつこく問ふと、癇癪玉を破裂させて、四つ五つの子供のやうに地團駄を踏んで泣き喚く。樣子が變なので、ピアノ先生に聞くとこれ亦さつぱり要領を得ない。貞子さんは「茂里榮ちやんがピアノ先生に可愛がられ過ぎたんでせう」と、其の時意味ありげに笑つたが、どうもさうらしい。近頃では、ピアノを止めてコロコロチンシャンと琴を習つてゐる。

「お姉さまア」

と茂里榮ちやんは、貞子さんのふつくらとした胸のあたりをグイと押す。貞子さんは驚いて

「まッ、いやな茂里榮ちやん！」

「ぢや、ご用事つてそれをおつしやいよう」

この子には貞子さんも惱まされる。土曜の晩には大抵遊びに來て、部屋を引つ掻き廻しては歸つて行く。

貞子さんのお部屋は、實に簡素そのものである。狹い四疊半で、壁にはミミ子クンでも描いたらしい靜物の油繪がぽつんと懸つてゐるが、其の他には何の裝飾も、何の色彩も無い、たつた一つ、彫刻入りの黑檀の廣い大きな立派な机だけが不調和に見える。この机が頑張つてゐるので、書籍は全部押入れの中に整理されてゐるが、書架を疊の上に置くと、狹くて身動きも出來ないのである。世の常の女の部屋とは餘程趣が違つて、どう見ても極めて簡朴だ。だが、却つて其れが貞子さんの氣品や教養それから落着きといふやうなものをよく語つてゐる。

「お姉さまア、これ、いゝでせう？」

茂里榮ちやんは、本と一緒に押入れに置いてある絹張の化粧箱を持つて來た。赤リボンが掛けてある。これは二ポンド入りのチョコレートで、茂里榮ちやんのママさんから「お姉さまに」といふので、茂里榮ちやんに持つて寄越せたのである。

「チョコレートはね、よくかんがへないと、男の人からはウツカリいただけないのですつて——」

貞子さんは意外な、といつた顏で

「ま、よく知つてるわね。そんな事を誰から聞いたの？」

「わて、よういはんわ」

「變な口眞似するものぢやありません」

「そやく」

貞子さんも、この子にはがつかりする。

「ちよいと、お姉さま、この箱の赤リボンだけ、あたでちやうだい、ね。お人形にこれでネクタイこしらへてやるのよ」

「チョーコレートも欲しいんでせうね」

「えゝもち——でもママさんにはないしよよ」

貞子さんは、箱を開けたチョコレートをつかみ出す。

「パパさんはね、これ嫌ひなんですつて。やぼてんでせう。

あ、パパつたら、そりやうるさいのよ。毎晩、うたひのおけいこだつて、犬のこほほえみたいなおこえで——」
グッと体を後へ反らした茂里榮ちやん
「エヘン！はなさかアばアア、つうげんさいひしやまざアこのウ、つかひはきたりイ、うまにくらアアおウけエエエ…」
聲が咽喉に引つかゝつたと見え、急にゴホン〳〵と咳き込んで
「いまのはバスね。あたしはやつぱりソプラノがいゝわね——きみすめるみんなみのかたにはする白雲、つげてよわれすこやかなりとアアアアア、ラアラアラア……」
貞子さんは辟易して
「ちつとも默つてゐないわね」
「よろしうないでありますね——これ、熊さんのまねよ。お姉さま、熊さんつたら、そりやをかしいのよ。學校ではこんなにして——」
と、スッと立上つた茂里榮ちやんは、部屋の中をグル〳〵と歩き廻りながら
「えゝ皆しやん、わたくすの耳に入りましたのは、このごろ皆しやんの中に、ルウジユをつけるかたがあるさうですが、よろしうないでありますね。えゝ、皆しやんは、この××文化學院のほこりある生徒でありますね。わけて普通部の皆しやんは、てんしんらんまんでなければなりません。高等部の大きなかたとはちがひます。ようございますか——たれですックス〳〵笑つてゐるのはッ、よろしうないでありますね——えゝ皆しやん、わたくすは」
貞子さんは、フイと立上つて机の前に座る。茂里榮ちやんは拍子抜けがしたらしく
「お姉さまア」
と呼ぶが、貞子さんは返事をしないで、原稿紙をひろげて萬年筆を握る。
「お姉さまアつたら！」
茂里榮ちやんが背後からもつれつくと
「いゝから、そこで一人でお喋りなさい」
冷やかに突つ放された茂里榮ちやんは、すぐにッンとして
「知らないわよ」
貞子さんは、まるで人が違つたやうに、ひどく憂鬱な顔をして、グイと唇を嚙みしめたまゝ原稿紙を睨んでゐる。
まだ植物のやうにやはらかな兩腕を組んで壁にぼんやりもたれた茂里榮ちやんは、其のまゝの姿勢で暫く貞子さんを見てゐたが
「お姉さま」
と、呼びかける。貞子さんの返事が無い。
「お怒りになつて？」
到々近寄つて來て顔をのぞき込む。貞子さんは沈んだ聲で
「いゝえ、怒つたのではありません。たゞ、たゞね、少し考へねばならない事があるのよ」

「原稿をお書きになるのね。でも、そのおしごとは、こん夜はしないからつてお約束だつたでせう」
「えゝさう、お約束だつたんだけど、そのお約束さへやつぱり守れないやうな氣がしてならないのよ」
貞子さんはひどく嚴肅である。茂里榮ちやんは机の上をのぞき込んで
「いつになつたら出來るの?」
果し無い空の彼方で、悲しみを鞭打たれでもするやうな何物かに接觸したらし、貞子さんは、肩をゆるがして針のやうな聲を絞り
「何時になつたら?何時になつたら?」
と、がつくりとうなだれて了ふ。
貞子さんにとつては、思へばそれは餘りにも忍苦に滿ちた作家修業であつたに違ひない。學校で三ケ年も學んだフランス文學は單に女性としての高等教育の一分野に過ぎない。其れは作家として立つ豫備的なものとして多少は役立つたれ、多くは抽象的に概念的に作家に對する理論を指示してくれたのみで、如何にして作家たるべきか、といふ事に就ては何等の智識も與へてはゐない。作家としての道は、各自に叩き求めない限り、到底その門は開かれるものではない。まして貞子さんは、學校に於てドラマ・ツルウギーは學んでゐない。學校を去つてから後一年有半の作家修練は、時間的に見てさして長いものとは言へないが、然し貞子さん自身にとつてのこの期間は、他の者の四年間にも五年間にも相當する苦痛があり努力がある。母室の言ふが如く、貞子さんをして作家志望が助長せしめたのは、多分に雨軒居士の感化があらうが、一面またこの事は貞子さんにとつて幸運だつたかも知れない。何んとなれば、ドラマ・ツルウギーを學ぶ機會を與へられなかつた貞子さんが、文壇的にも學壇的にも知名な雨軒居士の直接指導を受けるといふ事は、作家として世に出る上に非常に役立たうとしてゐるからである。こゝに有機的な關係がある事を見逃してはならない。事實、雨軒居士なり八福君なりから手離されたと假定すると、貞子さんとしては非常に不利な立場となる。貞子さん以上の努力を以てして、然も猶何等の作家的地位を得ない者が限り無く世にあるを思ふ時、まだまだ貞子さんは自分の不幸を嘆いたり、悲しんだりしてはならない。よき努力は、よき機會を得て始めて早く實を結ぶ。然らざる限り、單なる努力のみを以てしては、一年有半の時日を七十倍しての後に實を結ぶものと覺悟せねばならぬ。この奇怪な現象は、必ずしも悲しむには當らないが、然し作家を目指す者にとつては強く胸を打たれるに相違ない。
貞子さんは、多くの者がさうであるやうに其の最初に於て、作家に對する認識が不足であつた。ビルディングの重役秘書や、患者のブルスを氣にする女醫の仕事とは凡そ其れは別な世界である。作家として立つといふ事は、何人にも無條件で許さるべき性質のものではない。一枚の原稿を世に貽る爲めには、後の九十九枚は葬り去られるのが常道である。この偉大な努力を續け得る者だけが最後の勝利を得ることになる。とは言へ、若し作家として社會的地位を占めたとしても、其の生活保證までは約束されない。こゝにも惱みがある。
貞子さんは、二、三週以前からまた新しい題材で構想を練つ

てゐる。のみならず、この作の爲めには背水の陣をしいて悲壯な決心をしてゐる。これの失敗によつては、作家になる事を斷念する心算でゐる。與へられないものを望むのは餘りに寂しい。貞子さんは、この決心を雨軒居士にも八福君にも告げてはゐない。書き上げたとしても、十中の九分九厘までは例によつて酷評のまゝに握り潰されるのは解り切つてゐる。作家を斷念してから?貞子さんは、其の事に就て眞面目に考へた。平凡に結婚して平凡な主婦になるか、其れともフランス語を別な方面に役立てるか——とまれ近く一轉換せねばならない。

「茂里榮ちやん、もうお寢みなさい。お姉さまは、まだ少し起きてゐなければならないのよ。此處へお寢床をつてあげませうね」

貞子さんの側に座つて、机の上をのぞき込んでゐた茂里榮ちやんは、おかつぱ頭を横にふつて

「だつて、お姉さまがおきてらつしやるんだつたら、あたしかつてねないわよ。お姉さまがおかきになるやうな原稿は、なか〳〵むつかしいんだつてね。あたし學校では、みんなにお姉さまのことを大ゐばりしてやるのよ。いまにゐらくなるんだつて——しつかりやつてちやうだい。おつかれになつたら、おコーヒでもなんでももつてきてあげるわ」

貞子さんの眼からホロ〳〵と涙が落ちる。グイと茂里榮ちやんを抱き寄せると、その額に唇を押しあて、押しあて

「有難ふよ。よく言つてくれたわね。强くなつて、誰にも敗けないやうにしつかりやりませう。强い人になつて、强い人に——」

（つゞく）

暑中御伺

色紙、短冊の御用は

大阪市東區安土町堺筋西

川柳雜誌社指定

書畫用品
風流雅品 商

和正堂

電話 本町 二一六番
振替大阪九一七五番

暑中御伺

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋一丁目
電話 南四一八八番
醫學博士 長谷川成一
私宅 大阪市東區大手通一丁目

光耀抄

葭乃選

指切りの町の子供にたそがれる　堺　道子

別れては睫の濡れる宵を行く

居守りこやみん柱の蔭の待ち合せ

黒ダイヤ羨望の眼を意識する

雨の日の麻雀すだれ上げさせる

彈力のない母の背に知る苦勞　神戸　茂もよ

日光浴母の心も知らず眞似

書方をしてきた顏で歸つて來

おやッより一錢がよい子の遊び

奥樣こ云はれ子供がほしくなり

黄昏の植木へ走る如露の水　大阪　壽枝子

表具師のせはしさうなる襷がけ

ルンペンのお宿は雨にぬれて居る

捨てるには美くし鮑貝の殼　撫順　松代

泣いてゐる子の眼に怖い稻光り

彈いてゐるは男か撥のさばき樣

ウインドも夜店も夏になり切つて

胸騷ぎするこて母の書く手紙　大阪　機見女

食事時間卅分減

タイムイズマネー能率は無視せられ

嚙みすてゝチウインガムはそれでよし

旅おもひ〳〵枕をふくらまし　大阪　伊勢子

泣いて居る事をあくびで消しておき

一枚の便箋へ愛のあふれてゐ　大阪　美津女

世話方は酒の上だこ中へ入り

活動の平塲扇の波がうち　大阪　公子

バスガールもうお二人に成つてゐる

均一の品も五圓の十圓の　○　葭乃

へちまへちまこゝは行水するこころ

ごの袖のバットも空になつてゐる

氣をきかし過ぎてお銚子もちになり

川柳

ハルピンの此頃

立井登美坊

突擊の話手入の手を休め

朝は西、夕は東、こても目まぐるしい活動を續けて居た兵隊さん達が久しぶりにハルピンの街に歸つて來ました。落着く暇もなく武器の手入……話は突擊の手柄です。

迷信の槍、肉彈になつて死に

紅槍會の運中、不死身の御符を呑で我が機關銃の前に進で來ます、然し哀にも体は鋼鐵ではなかつたのであります。

重傷の手は萬歲をはり上る

勇敢なる日本魂は群がる敵の槍の中に飛込みました三人五人七人こ敵は刺れましたが如何せん敵は無數、遂に横からの槍こ差しちがへてサット血煙を立てゝ倒れました。

手拭を下げて風呂屋へ鐵かぶこ

幾多の武勳をたてゝハルピンに歸つて來た兵隊さんが五六人皆鐵かぶこかぶつて手にはタオルをさげてやつて來ました。中の一人は護衛の爲に銃をかついで居ります。

暮の鐘、男女ボツ〳〵手をつなぎ

ミレーの晩鐘を思ふ……七いろの鐘が鳴り出しました街の天主教の鐘樓から……街はボツ〳〵賑ひかけます。

ハイヒールの群、軍刀がかき分ける

午後七時ハルピンの夜はこれからです。若い男女……おぢいさんお婆さんも皆腕を組でハルピンの銀座キタイスカヤを歩いて行きます、戰塵によごれた日本將校二人悠々こ日本刀を引きづつて行くのが目立ちます。

地下室の、ヂャヅが浮き立つ

ベープメント

愈々異國情緒が鳴り出しました。エロ、グロ百%はこの地下室にあります。

青い眼こダンス軍服背がひくし

カキ色の將校、イブニングドレスこ腕を組で居りますが、殘念乍らダンサの背が高すぎます。

あんなもの裸踊を見て戻り

夜はスッカリこ更けて午前二時彼の女はドレスをぬぎましたそしてズロースも。ダア〳〵です。

午前四時もうハルピンの夜は明け

ホテルに自動車が着いた時分は朝日は高く昇つて居りました。

ハルピンにて、七、六、一八

加茂川句會

日時　八月十九日(金)午後七時
會場　仲源寺（京都四條繩手東入）
兼題「上陸」三句　幸男選
兼題「同性」三句　新水選
會費　金參拾錢
京都市七條大宮東入桑原方
京都支部

御會葬御禮

朝田新水
親戚一同

柳壇諸家に關する第一聯想

同人社友

鎖夏ナンセンスとして同人及社友に「柳壇諸家に關する第一聯想」を募つた。來た〳〵。こんな時とばかりに續々と來た。

痛いのがある。奇天烈なのがある。滑稽なのがある。癇に觸はるのがある。それでも怒てはいけない。怒つたら怒るほど暑くなるから鎖夏の目的にそはない。聯想あまりに平凡なのや的を外れたと思はれるのは編輯局で一寸篩にかけた。紙代が損だといふ決議に據つて——(編輯局)

小林不浪人

ルンペン
門松
東北地方は不作
船頭

柴田五萬石

岡崎樣
トツカピン
禿頭
齒醫者

大谷五花村

村長

大將
上京
俠氣

麻生路郎

落ちかゝる吹殼
無産闘士
オールバツク
朝顔日記
ウイスキー
剃刀
爆彈
父

子規
石川啄木
錐
流汗淋漓
ブルドツグ

前田雀郎

茶六氏
情夫
素顔の林長二郎
シラノ
素
カツパ

龜井花童子

殿樣
隈取り
剪刀
若且那
鈴蘭

高橋かほる

有藝仲居
手拭
サイナ
村芝居
神詣

裾からげ
おゝきに
おかる
コンニャクの化物

本田溪花坊

養子
古書
先生
電話
有閑夫人
活花の帥匠
温泉
凸版
心殘り
破產

井上劍花坊

田中義一
樫の六尺棒
叡山の荒法師
天皇旗の句
ライオン
貸元

飛白の足袋
明治文學
岩見重太郎
風呂敷
日本一
無軌道電車

坂井久良岐

山縣有朋閣下
梟聲
看板
はなし家
アナウンサー
賣殘り
位牌
養老院
頑固親父

安川久流美

煙突
川柳教の牧師
夜の川水
浪人

二日醉
酒は泪か溜息か

塚越迷亭

兄貴
惡趣味
豆狸
豆鐵砲
妻楊子

西島〇丸

冬籠り
お淸書
高利貸
西念寺
古い文藝倶樂部
寄附
文福茶釜

西田浪人街

金持根性
チャンバラ
有閑夫人

新靑年

橋本綠雨

川柳雜誌
水車
鋼鐵のエンヂン
市外電話
時計
牛
電車
句會の隅
終始一貫

長崎柳秀

お講の提灯
きせる
皮肉屋
酒
能舞臺の翁

布部幸男

柔道選手
纜子
口

悲しき萬歳師
印刷界

川上三太郎

院外團
酒糟
水族館
名馬
新興力士
耳
チンドンヤ
袴
萬歳
無産黨
油脂
河馬
本社一泊

山川紫明

東山
高野豆腐
祭詞
世話方

白足袋
ピック氏膏

岸本水府

煙草の名
世話役
航空母艦
百方美人
菊池寛
番頭
長西瓜
足袋
土木請負業
ヒガミヤ
繪看板
十錢文庫
グウダラ

蛭子省二

杓子大明神
勤王家
仙人
代書

圖書館
犬
貴公子
喘息
校正
首卷
紙魚

村田周魚

粕屋義三
校長先生
齒磨スモカ
鯛の片身
仲人
宴會幹事長

大島濤明

川柳大學
孔子
尺八
滿洲嵐
牛の尻
旅行

支那服

麻生葭乃

元帝劇女優
鈴蘭
醉ざめの水
あの眼
子寶
大阪辯
冬の田
煙草
アートちやん
看病
戀愛結婚

小田夢路

モチでない女給
寢坊
ピンセット
主婦
ダブルベット
機械
汽笛
高利貸の番頭

天地人制廃止説に駁す

福田山雨樓

選句の天地人制を廃せよと云ふ水府氏の主張には同意し難い点が尠くない。

歌壇・俳壇では遠うの昔にそんな制度をやめてゐる。だからと云つて別にその眞似をするのではないが、結局おつき合しようと云ふ態度は世間並の見榮坊ではなからうか。

「川柳が和歌や俳句と同じやうに文壇的に扱はれる今日」と云はれるけれどもさうこちらが獨り決めするわけにはゆくまい。まだ〳〵文壇から差別的に見られてゐる現狀であると思ふ。そんな狀態だから幾分でも現狀を打開し、向上せしめやうと云ふ考えのもとに天地人制を廃すると云ふのならばまだ聞える。それをこちらで勝手に肩を並べてゐるつもりになつて世間並の附合ひのやうに、同じ服裝をしようなどと云ふのは聊か思ひあがつた了簡ではなからうか。そんなことでおどしがきいたり、ごまかしの出來るものではないと思ふ。

しかしこれは何も川柳がずつと遅れた、低いものだから卑下し遠慮せねばならぬと云ふのでは決してない。寧ろ一時も早く和歌や俳句の域に摩する程度になることを心から熱望するし現に漸次その過程を踏みつゝあることは内心愉快に思つてゐるところではあるが、單に上べや服裝をかへただけで澄ました顔をしてゐるのでは危なかしいと思ふのである。

それから選者が集句のうちのいゝ句に段を設けるやり方は兒戯に等しいやうであるとのことであるが、自己冒瀆も甚だしい言葉ではないか。若しそんなことが平氣で言はれるならば、昨日迄人の前に立ち得々として披講した三才の句に自ら唾を吐きかけるやうなものだ。

甲の選者の秀逸　決して乙の選者の秀逸でないことは、事實あるかも知れぬが直にそれでもつて兩者の選が無價値であるとか、共に誤つてゐるとか云ふ結論にはならない。選者の川柳に對する鑑賞眼或は主張、方向等の異つてゐる以上致し方のないことである。若しそんなことで迷ふ初心者がゐたとしても、これに得心のゆくやうに説明するのは別段至難事ではない筈だ。

選者が一人で以て「此句は飛びぬけてよい」と認めた句を、認めた通りに發表することは專門の雜誌であつても何等遠慮氣兼ねの必要はあるまい。否選句を一任された選者の誠意ある、忠實なる選であればあるほど一句々々に付てその評價度の違ふことは當り前だ。天地人別は紫明氏が「京」に書かれた如く正しく選者の義務である。しかし澤山の句に對してそう一々順位をつけることは繁に堪えないので大體前からやり來つてゐる五客三才（或は三才）位の程度の發表方法を取るのに、悪いと云ふ理由はないではないか。

雜吟の發表に天地人制がないとは云はれない。現に「川柳人」の句會では御大・劍花坊氏が毎月やつてゐられる。しかしこれは寧ろ少い例で多くはなるほど天地人を付してゐない、又他の稱呼による段階の付し方もあまりとつてゐないやうだ。しかしこゝで課題吟と雜吟とをごつちやにして考えることは無理であらう。課題吟は一つの或る的が與えられてゐるのだと見てもいゝ。或は特に型の變つた篠を設けてあるものと見られぬこともない。この的に最も適中し或はこの篠に最も確實に發つたものゝ中で、その大小内外の區別は比較的見分け易いし、又投句したものゝ方でもその撰句の結果如何なるスコアーが示されるかは多大の興味と期待をかけてゐるものである。即ち課題吟には投句者、選者の當事者間に暗默の約束が取り交はされてゐるのである。さう云ふ通念のもとに川柳の課題吟は非常なる進展を續けて來たのではなからうか雜吟がこれと趣を異にしてゐることは敢て贅言を費す迄もなからう。

斯樣な考へ方からしても課題吟に天地人制をとることが原則的に何等間違つてゐるとも思はないし、遅れた發表方法だとも考えない。況んやこれを古い殼だなんて云ふ言葉で一掃しやうなどとは更々思つてゐない。

又、天地人といふ呼び方を何とか新らしい稱呼に變へたいと云ふ意見が前に出てゐたが、これに代はるべき適當なる稱呼も差當り見附からないし、天地人が是非取り替えなければならぬほど古びた呼び方だとも思つてゐない。

腕

前田五健選

請願は腕に自信のある男　永樂
看板屋腕一杯にのばしきり　柳村
腕自慢今日は繃帶卷いて來る　吉祥
閑散なここでは腕を組みませう　瑞穗
腕輪なぞ嵌めて上海育ちなり　同
江戸ッ子と云はぬばかりの腕まくり　あざみ
腕のおぼへもあきません肺でする　靜太
筋張つた腕に資本家逆はず　岩松
電車自動車巡査の腕にひかれる　白峰
組む腕の白ふにむるアスアルト　義郎
洋裝の腕に遠慮の眼を向ける　變人
弱い氣に酒が云はせる腕自慢　水人
白い腕野心があれば云つてくれ　紫風
淑女フト腕の細さを淋しみぬ　沐天
腕グット伸して朝の風を吸ひ　方眠
腕自慢、力自慢のなれの果　豆秋
片腕と云はれて家も顧ず　艸樂
ぬか漬の桶の深さへまくし上げ　句念坊
案外な腕を持つてる無口者　水車
誘惑の腕飽く迄もなまめかし　鴉天
衰弱の腕から先にやせて行き　おさむ
腕さゝ過ぎて容れられず居る　いわを
俺の腕矢ッ張り鍬がよく似合ふ　與詩雄
眞面目さと腕とがあつて失業し　孤鶴
腕自慢結局人に使はれる　同
男性のモデルは腕を組んで立ち　琴舟
腕章へ耳の遠いを云ふてきゝ　春秋
陣笠も四段の腕で名を知られ　世都象
ブラヂルへ行く決心の腕を見せ　白花子
縋られた腕に理性のフト芽生へ　曉童
世間モウおれの腕をば信ぜない　素月
手腕家にされパトロンに恐れられ　沒食子
腕まくりしても淋しい男にて　虹一
握手する腕に友情フト感じ　富美三
働けば働ける腕斷られ　明珠
片腕を友に預けて管をまき　革及
此の腕を信ずる妻の片ふくぼ　柳次
今日の繃攝むに腕が疲れきる　壽惠兒
揚げ物の箸の長さよ腕の冴へ　白柳子
上陸をして嬉しさの腕をくみ　同

▼同人中島鐵洲君は七月四日の因伯新聞へ「川柳から見た民藝の横顔」を發表されました

▼社友平岩司郎君が、六月廿日より五日間の豫定で一行八名テントを張りながら琵琶一週を企てられ、江洲雄松から便りがありました。七月十一日から若狹小濱へ一週間海水浴へ行かれて十八日歸京されました。

▼社友桑原京郎君の宅では、赤ちゃんが出來ましたそうです。お喜び申し上げます。

▼松江支部では七月三日筱川支部の海月、與詩雄、華村巷二の諸君を迎えて奈良井柳人君の宅で句會を開かれました。(會報參照)

▼横山勝二君は川柳熱がなか〳〵旺盛でまつた句會だけでは足らず近く大阪ビル内で句會を開き同ビル内を川柳化せんと努力されてゐます。精々御奮闘を祈ります。

▼宮内耕朗君（松山）は六月廿三日別府支部幹事木村晃卓君を訪れられ、親しく話されて歸松されたそうです。

▼番傘川柳社の重鎭淺井五葉君は七月六日永眠されました。哀悼の意を表します。十六日追悼川柳會を開かれましたが私は勤務の都合で遺憾ながら欠席致しましたが本社から路郎先生が個人との關係が深いのと社を代表し出席されました。

▼大阪日日新聞柳壇の選者として柳界に貢獻されてゐました柳愆亭春彦君が不幸にして老軀臥床されたので舊柳愆吟社の人々が

西町之
MEMO
綠雨

あの腕で一家を生活ピストカルシユーム痛々しくも小さい腕　美津女
此の腕を見せたい人は來て居ちよ　靈白
沈默を破つて腕の男立ち　清五郎
眞ッ裸手持ち無沙汰に腕を組み　靜光
運ですと腕に自信があり過ぎて　みのる
振り上げた腕よ相手が惡すぎる　葉光
ばつさりと孫六程に切れる腕　英賀夫
寂しさは我が腕走る青き筋　河鳥流
信じてはくれるな子等よ己れの腕　洋二
腕組めばとて逃れる道も見付かも　季一
つり皮に女の腕の面倒さ　啓秀
君は君、僕は僕だよ腕を組み　掉二
棘腕と云はるゝ人の華奢な腕　華水
腕一本位、工場の消耗品　鯉友
腕々々彈力のないのが婦長　勝二
精　鋭　吟

藝者今日腕で賣れない事を知り　白帝子
腕出して出して寢て居る兒の達者　史錄
腕次第頭腦次第と勵まされ　靈壺
汗くさい腕を振りまわせて居　綠雨
貧へ戰ふ父の腕姉の腕母の腕　平八郎
天勝の腕輪に年を考へる　柳路
細い腕ネ女は笑づただけだつた　竹風
脊伸びした腕に子供の足が有り　句林
痩せた腕だらうに涙にも飽いて　勝二
圓たくが腕出して腕出し通し過ぎ　青兒
感　吟

二の腕の露はよ金にゆだねたる　一水
腕なんか問題じやないバックだ　蒸雨來
青空へ腕を延ばせど何もなし　紅
腕のいゝ女にされて荒みきり　八歩
善人の腕の太さに食ひかねて　同
腕力に觸れまいとする眼が据り　民郎

波

鯡鯉の鼻を撫でる小波　吉祥
波の上ヨット傾いた儘走り　柳路
不氣味さをふと味ひぬ波の音　坊茄子
波の音何か歌うてみたうなり　掉二
生きものゝ如くに波はよせてくる　方眠
療養の一日暮れる波の音　水人
さらはれたのはあの波かこの波か　里十九
波の穗のキラリ〳〵と初夏ら〳〵　鴉天
名をすてゝ波によろめく足の迹　民郎
松風や波のリズムに砂が冷え　與詩雄

松丘町二一選

海の塵波じり〳〵と隅へ寄せ　琴舟
土甲波空の高さに及ぶまい　紅
荒波へ故郷はゆれてゐるだらう　素月
石投げてぢつと波紋の消えるまで　巴調
黄昏れて都を思ふ波の音　富美三
日本の端から波が碎けて來　湖山
深呼吸波のしぶきをうれしがり　錦石
小波もつなみも同じ水ながら　美津女
船醉ひは波の高さが目に止り　句林
大波に色黑き子のたはむれる　一田

暑中御伺

カ　ナ　メ　喫　茶　店

朗らかな心と愉快な顏は
一九三二年の
カナメ喫茶店より
柳人は特に歡迎致します

大阪市南區疊屋町周防町
東入南側
カナメ喫茶店
柳人
永田里十九經營

死ぬ人へあまりに波は靜かなり　玉兒
檣波に渡しの客は叱られる　雷兒
波の音聞いて決心鈍つて來　菊路
病める子を想ふ旅宿に波の音　西英子
立海の荒波越えて來た手紙　呑湖
落葉の波紋へ鯉がよつて來る　英賀夫
ひとゝきは波に想ひをよせて見る　黑天子
弱かつた事を怒濤に敎へられ　耕民
モーターボートの波が生活苦を語る　蟬郎
潛航艇波の高さは知らぬなり　華水
八月の波をくゞつて子はたつゝゃ　玄坊
興奮の枕にひゞく濤の音　句念坊
さゞ波も少しは立てよ森の池　青兒
歸國して波の暖かさもわかり　いわを
亂れ髪靜かに明けた波の音　正路
病床を訪ねて波の音をきく　變人
打上げる浪に悲しき戀の果　四五磨
海戀し波打ぎはに下駄をぬぎ　こも坊
足跡の一つは波に消えてゐる　岩石
川波をみつめて蟇蛙をきいてゐた　靈壺
留守宅は船出を想ふ波頭　水車
波音を氣にせぬ漁師町の夜　今雨
波の上ひねもす搖れて鰹釣　艸樂
波頭陸に闘ひいごむなり　白花子
內氣な娘想ひを波に打ちあける　八步
スカールの快適となる朝の波　天痴人
波と波渦のところで低うなり　綠雨
スカールは薄刃のやうに波を切り　竹風
一うねり漁船聲なく浮いてゐる　同

斷付けて見れば素知らぬ波の音　沐天
淋しくて海のひゞきに立つ若さ　同
穩かな波だヨットの走る朝　瑞穗
大波を潛つた底の靜けさよ　同
密航は波の荒さに觸れる底　尙步
甲板は波の荒さに椅子ばかり　同
波の音夕陽の沈む頃となり　おさむ
自滅するやうに波打際へ波　同
滿月を缺いでなぎさへ運ぶ波　曉童
宿の下駄少しぬらした朝の波　同
打ち明ける間ボートは波のまゝ　革又
身を投げた波紋の中の貸ボート　同
母ちやんと行けば小さな波ばかり　柳次
皇禮砲波はいよ〳〵高いなり　同
波を乘り切る聲を揃へて　白柳子
燈臺は波に逆らふここに建ち　同
甲板に憂色がある波頭　吐句坊
貨物船重たくゆらぐ波になり　同
波の音へまほろとに聞く子の叫び　清五郎
じつと波見つめる二人氣が弱い　同
大うねり太平洋を霞めてゐる　水
艪を止めて波のない日のうらかさ　新
鋭敏な波紋だ初夏の風渡る　同
すぐそこに浪が迫つてゐるドラマ　葉光
波頭俺をあざける樣に來る　同
見送りの波止場の波は高かりき　珠
波高く母が日延べを子に迫り　明
海荒れてきらひな夫すきになり　同
波のまに子供の下駄が浮いてゐる　一柳
まさる　同

發起され慰問句會を七月一日開催され本社からは路郎先生、琴人、萬よし、里十九、夢裡、鵜峰、水車、沒食子、おさむ、八步、夕鐘の諸君と私が出席致しました、尙句報「なぐさめ」が發起の人々によつて刊行されるさうです。

▼京都の山田愚人君は七月三日長男久雄君中村可仙君は七月四日博子さんを儲けられたそうです。お喜び申し上げます。

▼德田双柳君は七月廿三日朝鮮金剛山電鐵へ勤務される樣になつたので出發されました

▼同人安西杏三君の四女洋子さんが病氣のため七月十五日永眠されました（生後八十幾日）哀悼の意を表します。

▼松江支部幹事廣江天痴人君の三男好也君は急性肺炎で七月十五日縣立松江病院へ入院されました。一日も早く全快を祈ります。

▼青砥可明君の嚴父が永眠されました。謹んで哀悼の意を表します。

▼多久和喋朗君は煮え湯が轉覆したので太股から一面大火傷されました。一日も早く回復を祈る、同君の編輯「神火」は六號限りで廢刊されるそうです。

▼舊同人竹田芦穗君は七月七日から九州方面へ旅行され下關、琴平、久賀町、博多などからしきりに旅信をよせられ、久賀町では舊同人の啞人君の宅で一泊され、七月十五日歸阪されました。

▼江戸みつる君は（社友翠夢君の令弟）七月九日湯崎溫泉から便りをよせられた「雨の白濱湯崎も川柳味がありますとてもエロです」とのこと句には「海に噴く湯を眺めつゝ湯にひたり」

▼菱井不路子さんは、しばらく作句を遠ざかつてゐられましたが、近く復活される由、尙赤ちやんが生れましたそうです、お喜び申し

思ひ出へ波はよせては返すのみ　同
波ぎはに椿の花が落ちてあり　同
ごんと來る波に繪日傘すぼめたり　司郎
波の音水平線は靜かだな　同
我影がとゞく波間を破れ靴　同
荒波へ船が進んで家のこと　幸村
吉報へ今は嬉しい波に搖れ　同
榮轉へ日本を離る波がしら　同
漁師いきつい波見て腕を組み　同

○

眞裸の漁夫波を罵る　平八樓
繫船ポカリとかもめは波にねる　雅幽
浪の音する部屋風の夜の時計　葉光
冬の雨戸に波のしぶき　綠雨
砂へ泡殘すアメリカからの波　勝二
麗人の足もと白う波が立ち　一水

選者　吟

波は吸盤を持ち音もなく吹雪吸ふ　町二
波黃昏の風を生み話こぎれる二人　同
人を溺らせた海がだぶりだぶりと搖れて　同

漁村にて（二句）

波波を追ひ波波を追ひ、裸の漁夫ら　同
魚類を喰べすぎた娘たちの皮膚へ寄す波　同

本社基金醵金者　御芳名

醵金を拜受しました方々の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します

金貳圓也　木村晃卓殿

小計　貳圓也

累計金　四百四圓七十錢也

納涼

八月句會

日時　八月六日（土）午後七時

會場　大阪市南區千年町（市電日本橋停留場西辻北入東側）
ちとせ倶樂部
電話南二四五五番

兼題　「海岸」三句　麻生路郎選

兼題　「袖」三句　松丘町二選

會費　金參拾錢

新柳劇公演（餘興）

—閉會は十時半—

笠置積編「赤城颪」二場

上州赤城の山に立籠る俠骨漢國定忠次をめぐる恩愛葛藤の物語。劍あり涙あり、興趣擅なる舞臺面。さても演じまする川柳家は誰と誰、希は多數御觀劇の上御批評を賜へ。

配役

國定忠次……永田里十九
板割淺太郎……楊井二南
御室勘助……日野華水
高山定八……同
勘助娘お花……高橋かほる

川柳雜誌社

▼上げます。

▼大連川柳社、東北川柳會、奉天川柳會、本社松江支部から寄せ書が屆く。

▼私は阪大病院岩永外科へ慢性移動盲腸炎並に虫樣突起炎の手術のため六月十日から廿五日迄入院致しました。入院中阪大川柳會の方に特に長崎柳秀博士、井上通三博士の大なる骨折で全快致しました。外多數の川柳家からの御見舞狀や、わざ〳〵御見舞下さつた方に厚くお禮申し上げます。川柳雜誌の創刊以來一回もかゝさず編輯に從事しましたが前一〇二號の編輯には止むを得ず連らなることゝ出來なかつたが、校正には三日間杖にすがつて印刷所へ通ひました。

▼本號の編輯は路郎先生、愚陀、山雨樓、と私とで致しました、尙當日竹內機見女さんが御手傳ひ下さいました。

新誌友

（七年三月廿一日まで）

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致します。何卒新讀者を御勸誘下されるゝ樣御願ひ致します。御紹介下されるる方には川柳雜誌の近刊を見本として差上げますから御申込みの下さい。（綠雨）

都藤古木、天野卜居、上久保まさる、小寺鳴玉、本橋坊茄子、横田方眠（梅田支部）長岡牛太郎（長崎柳秀）武田支六、麻生路郎）西木直利（福田鶴峰）岩城狸仙（橋本綠雨）古門康雄田中歇乃、池田梨花、石井竹馬、大橋素月、辻詳平、深野吾水、上林壽夫、大越富士雄、森動一、南喜三郎、宗諦、宮岡白峰、里田顯尙、梶浦正尙、奧野禿山、中出木公、吉松曉男、一柳憲之助、吉本末吉、正木琴舟、黑川龜、廣渡松次郎、岩崎松代、中村青豊、荒井英賀夫、田村西英子（本社事務所）括弧內は紹介者。

故淺井五葉君

五葉を語る（一）

麻生路郎

五葉淺井林之助君が昭和七年七月六日午前九時に港區市岡元町三丁目二十二番地の自宅で長逝した。

五葉君は自ら萱らんかなの男ではなかつたが、明治三十九年以來廿有七年間川柳に親しんで來ただけに、日本柳壇に於ける一異彩として普く知られてゐた。

その句風は所謂讀賣調から出た寫生派で、夙に一家の風格を具へ、五葉獨自の飄逸奇拔な觀察は何人の追隨をも容さず柳壇一茶の觀があつた。

田能村朴念仁、後ち朴山人の創設した讀賣柳壇の投句家であつたが、朴山人の晩年の投句家であつたか、同門の窪田而笑子繼承後の投句家であつたか、ハッキリ覺えてゐないが多分而笑子時代の讀賣柳壇の投句家ではなかつたかと思ふ。

その後而笑子が出してゐた新柳眉集などの同人にも名をつられてゐたし、而笑子に對しては、思想の上にかなり隔たりが出來てからも先輩としての敬意を表してゐたところを見ると、而笑子時代の讀賣柳壇の投句家と見ても大した間違ひはなからう。

大阪の句會へはじめて顔を出したのは僕に吳れた繪葉書の文句によつて見ると明治三十九年の夏、平野町の五二館樓上で開催された川柳大會であつたやうに思ふ。その時僕と隣り合つてゐて僕が頻りに口をきいたらしい。翌日すぐ刎心者ですからごうかよろしくと云つた繪葉書を寄越した。

この句會には隨分珍らしい人々が顔を出してゐた。記忘のため、その席上の各人に繪葉書に句を書かせ交換的に發送したものであるが僕の方へ來たのは岡本佛心病氏のであつた。佛心病氏は俳號を主岳と云つて今日では青木月斗氏主宰の俳誌「同人」の編輯者だ。

川柳大會の主催者は勿論死んだ小島六厘坊であつた。六厘坊が天涯君看板を書いてくれ給へと云ふので僕が川柳大會の文字を大書して五二館の表へ張り出した僕はその頃高商の豫科に在學してゐた。五葉君は僕より六つも年上なので、その時には既う銀行員になつてゐたのであるが、職業のことなどは少しも知らなかつた。しかし、その頃から落着き拂つてゐた。云ひ忘れたが五葉君のその頃の雅號は了軒だつた。淺井了軒ともじつたところは吳陵軒可有の古智に倣つたといふ譯でもあるまいが、五葉君も又川柳といふものを單に滑稽な面白いものだ位で這入つて來たことはこの雅號から想像することが出來る。

いつ頃まで了軒であつたか、ハッキリ記憶しないが、間もなく五葉に變更されたことは間違ひない。

後、田山花袋の自然主義文學にはしり、片々の別號で小說を書き出した。それ等の作品の多くはハガキ文學へ發表されたハガキ文學の短篇小說は花袋の選だつた五葉君の作品の掲載されたハガキ文學が尺餘の高さに及んでゐた。それを抱えて僕の宅へやつて來て讀んで吳れ給へと云つて置いて歸つた。僕はそれを故人にはすまないが、青樓の一室に寢轉んで耽讀したものだ。僕がたとへ僅かなものでも書けるやうになつたのは五葉君のお蔭だ。僕も負けぬ氣を出して大いに讀み、且つ書いた。一篇でも二篇でも書くと必ず五葉君に見て貰つた。どう

だと云ふと、平面描寫がどうの背面描寫がどうのと云つて批評するが、殆んど褒めてくれたことはなかつた。田山花袋からいろんな批評をされたり叱られたりしたのを、せんぐり僕へ讓り渡して叱つてくれたんだと思ふ。五葉君はもう少しで銀行員を辭めて小說家になるところだつたが、病身（肺が惡かつた）だつたので意を決して東上することをしなかつた。

銀行の方も休んだり行つたりしてゐるうちに、いつの間にやら相當の地位になつてゐた。僕が大正元年だつたが東京から歸つて浪花銀行の立賣堀支店へ君を訪ねた時には出納係をしてゐて、多少は得意でもあるやうだつた。

「君、これで二十五萬圓あるんやで」と云つて申上げた百圓札をおさえて見せたが、僕は

「その一枚を一ト月かかつて貰へるのかい」と云つたら、例の皮肉な眼を僕の方へ投げてニヤ〳〵と笑つてゐた。

「數へそこなつたら大變やなア」と僕が云ふと

「ウム、その代り責任者には、そのために僅かばかりやけど手當があるんや」

「時々數へ損つて辨償させられることがあるかい」

「そりやアあるさ。僕が數へたら間違ひないと思つてゐるから、下役のものが數へた時に、オヤツと思つてもそのまゝ渡してしまひよんね」

そんなことを例の眼を細うして話してゐた。それから僕が海外へ出かけることになつたので歸朝したんだといふやうな事を話して別れたと思ふ。

その後、五葉君は小說らしいものは書かなくなつたが、八公の名で今で云ふ漫文を大阪辯で書き出した。

これが堂に入つたものであることは今更云ふまでもなからう。

小說に筆を絕つてから後のことであるが「僕は小說家にならいでよかつた。僕は小說を書いてゐたら今頃は飯が食へなくなつてゐたであらうと思ふ」と述懷めいたことを云つてゐたが、それでも多少の未練は持つてゐた。それが八公の漫文となつてます〳〵冴えを見せたのである。

明治四十四年頃の「矢車」（東京の下谷坂町から出てゐた柳誌、森井荷十君編輯）の句の多くは五葉獨特の飄逸さなんて藥にしたくもない。何れも暗い句ばかりである。厭世的な句、死を思ふ句、病弱を咀つたやうな句ばかりである。例を擧げると、

いつ癒ることも知らず水藥
覺つては歩き悶へては止まり
灰吹きに吐くおのが唾藥臭く
もゝと氣を大きく持てと友はいふ
雨に泌みゆく夜のわがこころ
死んだやうに室に寢轉び雜誌見る
あるかなきかの己の影のたよりなさ
死なれない己を知つて又歩む

ざつとこんな句ばかりであつた。五葉君の健康がどんな狀態であつたかを窺知することが出來やう。

五葉君は若死するだらう。われ〳〵のグループから一番お先へ失敬するだらうといふやうな考へ方は期せずしてみんなの頭にあつたが、ヒヨロ〳〵しながらも頑強に持ちこたへて行つた。反つて僕の方が幾度かお先へ失敬しさうになつたがこれもどうにか踏んばつた。五葉君の方は弱いながらも、どうにか生きて行けるものだと、友人の誰彼が考へるやうになつた。そしてもう五葉君が死の對象にならなくなつてしまひ、實に頑健そのものに見えてゐた藤村青明君が大正四年に死んで僕等を驚かし、大正八年には松村柳珍堂が死んでしまつた。

生活にどうもゆとりが出來、思想に於ても明るくなつてゐた五葉君のことであるから、少々惡るいと聞くことはあつても以前のやうに生命についての心配はしなかつたのであるが、突然その訃が傳へられて見ると私は黯然とせざるを得なかつた。

遺言によると、告別式が濟んで二三日してから、水府君まで知らして奚れと云つたさうであるが、何處までも五葉式だなアと半文錢君と語り合つた位だ。

みんな來てくれても、もう仕方がない。要らん手數と要らん費用をかけてもつまらんと思つたのであらう。五葉君は「さいなら」とも云はずに友の群れから姿を消してしまつた。（つゞく）

嗚呼淺井五葉君

木村半文錢

七月八日の朝、一通の電報が配達された讀んでみると

ゴヨウユクシキスンダ ヨシキシモト

とあつた。即ち淺井五葉君の訃を知らせてくれた水府君の發信だつた。連日の雨で氣が腐らしてゐた私は尙ほ一層に頭の重くなるのを感じた。

「ああ、五葉君もなくなつたか——」

妻と顏を見合せて暗然とした。

×

五葉と私との關係は既に十數年以前から稀薄になつてゐた。川柳上に於ても思想的に見ても、生活方面からも、瞭に別個の隔つた存在でしかなかつた。ただ友人として交誼は繫いでゐたのは僅に新年の挨拶狀位だつた。それすら几帳面な君からいただいても、筆無精な私は兎角怠り勝ちだつた。

顏を相見ぬことも可なり久しい。四五年前に常百、日車、路郎、松窓、三太郎喜月、水府、綠天君等と共に某旗亭で會飲して舊情をあたゝめたのが最後の顏合せだつたと信ずる。

其の以後、川柳上にも個人的にも、ふつつりと關係はきれてゐた。たゞ一度、昭和四年三月十五日にハガキをよこしたそれは私の惡筆を記念のために贈つたのに對する謝狀だつた。今、その全文を左に掲げる。

「拜復、貴筆半切一葉正に到着入手しました。御壯健ですか。

早速拜見しました。なか〳〵美事に出來てゐます。隨分骨の折れるもんでせうね大分以前に靑明氏に一つ貰ひましたが、いつも捜すのですが分りません。又一遍捜してみようと思うてゐます。私の宅へ先生筆も紙も持つて來て、私にも書かせて持つて歸つたのでありました。

何思ひけん靑明は書いてくるであります。スルとあなたも一緒であります。大切に保存しませう。あの句敬意を表して置きます。

あなたもお大事に。デハ サヨナラ

有難たう」

此の時、私が何故に五葉君に半切を送つたかと言ふと、私は其の頃ひどい貧乏と健康の不安に脅かされてゐたが、それを同情して氷原一派や川柳人の人々が私の短冊頒布會を企てゝくれた。その際、天津の和田默然人君から遙々と畫箋若干と筆とを寄贈されたので希望者に半切をも書くことになつた。その筆序に、舊友四五へ記念のため惡筆を認めて贈つたものだと言うのは、舊友の間に私の惡筆を所持してくれてゐる人は一人もあるまいと思つたので、せめて私の死後の語り草にもと、實は心ばかりの記念だつたのだその惡筆の謝狀が右の全文なのだ。

思へば生命ほど不可思議なものはない既に死を豫期して半切を贈つた筆者が尙ほ生きてゐて、「大切に保存しませう」と約した本人が先きに現世を去つてゐる私は運命の皮肉に默然たらざるを得ないのだ。

以上のやうな關係で、五葉君の近況は皆目知らないのだ。だから何ういふ病氣で死んだのやら、いつ頃から病床に寢ついたのか將た急病で喪くなつたのか、その點も全く判らない。況して水府君の電文には死去の日がないから其の命日も判然としないのだ。舊友の一人として甚だ相濟まぬ譯だが今更如何ともすることができない。

故に五葉君の生活の近情も知らなければ川柳上の近業も全然判らない。それで實は突然路郎君を訪れて其の一端を知ることが出來た譯けだ。と言つて十幾年も隔絶してゐた私が今更五葉君の傳記でもあるまいし又、その方面には同君を最もよく知る番傘社の同人達もあることだから、私は特に書く事を控えておくことにする。殊に、川柳方面に就ては可なり全國的に指導者の立場にあつた關係上、各方面に胎した足跡は、それ〴〵故人に親炙してゐた人々の手により取纒められて其の業績を後世に傳えることが出來得やうと信ずるから、是も私の出る幕ではない。そこで單に故人の横顔を覗いて生前の溫厚篤實なる風丰を偲ぶよすがとしたい。

×

當百氏隱退後の番傘に於ては、事實上當百氏の後釜に据つたのは五葉君だつた勿論水府君を未來の當百第二世に繼承せしめる事は暗默の裡に五葉君も諒解してゐた。謂はゞその當時に於ては水府君は未だ若いし、生活的にも充實さが確立されなかつたから、先づ番傘を泰山の安きに置く意味に於て、五葉君を後釜に据えたのだ。是は蓋し老巧無比な當百氏の計策でもあり同時に爛眼でもあつた。

番傘は着々として發展し所期の目的を達して行つた。水府君が事實上の番傘の頭目となり、五葉君は恰度顧問格となつたのだ。是で當百氏の計劃は豫定通り進行した譯けだ。最も其の間には可なりの小波瀾があつたであらうが實質的には豫定の筋書が實現して、先づは目出度しの結果だつたに相違ない。

若し、五葉君が溫厚篤實な人格者でなかつたならば、或は番傘に頑張つて事實上水府君の勢力を封鎖して五葉天下の番傘を實現したかも計り知れない。そして水府君が實力的に抗爭した場合には番傘の内部を確然と二分したかも判らない。一歩進んで惡く解釋すると此の對立する二人勢力が相抗爭する結果番傘をして二つに分裂せしめる結果を招來したかも保し難い。

然し、遺がに當百氏の眼は鋭かつた。五葉君の人格を知り拔いてゐたから敢然と番傘の實權を彼に委れたのだ。長い時間の歩みの間には多少の感情的乃至性格的に相容れぬところはあつても、よく番傘をして今日あらしめたものは五葉君の君子的隱忍自重に負ふところが多いとしなければならぬ勿論番傘の大をなしたのは水府君の積極的努力に因ることの多いのも事實であるが、前述したやうに若し五葉君が先輩としての實權を楯に頑張つた場合には、番傘の内紛抗爭は蓋し頻々たるものがあつたであらうと想像する。その點、水府君及び同人諸君は故人五葉君の德を感謝してよいと信ずる

×

五葉君の性格は、溫厚、謙遜な反面に皮肉と機智に富んでゐた。所謂五葉調なる純寫實的作風には輕いユーモアとウヰットがふんだんに盛られてゐた。それは寫實の神域に迫るもので敢て他の追從を許さなかつた。而もその作風が私の知る限りに於ては二十數年間終始一貫してゐた、最も君にも思想的動搖期があつたけれども、尙ほ其の作風には斯の寫實的若しくは自然主義的な傾向を棄てることが出來なかつた。

又一面には八公の匿名をもつて一流の

皮肉な觀察と、ウヰットに富んだ名文とを發表してゐたのは既に柳界に於ける公然の秘密だつた。大阪辯と千日前と道頓堀と心齋橋筋とは八公の獨壇上だつた。

川柳に於ても、文章の上に於ても、斯うして終始一貫皮肉と機智とを發表して行つたのは、それが彼の生活的餘技としての戯作たるべき非難はあつても、それを自認して終始一貫偸るところのなかつたのは、蓋し偉としなければならぬ。

そこに彼の温厚、謙遜な性格の一面に皮肉味と機智の才があつた事を雄辯に物語る。何となれば彼は斯くして實生活の反面に於て所謂戯作者風に社會を白眼視してゐたからに他ならない。それは彼の相反する二元的性格即ち温厚と皮肉、謙遜と機智との不斷の内部的爭鬪が、たまゝ〳〵發して十七字型の川柳となり、八公式の漫筆と化したまでだ。謂はゞ彼の内面的苦悶——若し斯く言うことが許されるならば——の克服が川柳を生み、八公を育てて行つたに過ぎない、と私は考へる。

×

それと今一つ、五葉君から見免すことの出來ないのは彼は性格的に孤獨者ではなかつたかと言うことだ。或は性格的と言うことが環境的に又は生活的に——と書く方が妥當であるかも知れないが、何れにしても彼は番傘の享樂的雰圍氣に於ては一個の孤獨者、孤立者であつたと言うことは見免せない事實であらうと思ふ。

彼は決して明朗な性格者ではない。最も彼が青年時代に於て所謂自然主義派の勃興時代に田山花袋に私淑してゐた關係から見て、自然主義初期の影響が彼の性格を暗くならしめたか、又は、斯かる性格が彼の先天性であつたがために、自然主義的傾向に合致したのか、其の點は明瞭ではないが、然し、どこかに暗い性格者であつたことは、少こし彼を注意して見る者には直ぐに肯けるところだつと信ずる。

暗いといつても陰欝な暗さはない。尠くとも今日でいふ社會主義的な暗さは認められないが、さりとて囀りまはる小鳥の如き明朗さはない。その點、自然主義的傾向な人生の暗さを帶びる性格者ではなかつたか、と實は考えてゐる。

その點で彼は温厚ではあつたが、一個の拗ね者だつた。私のやうな狷介で且つ頑固な拗ね者ではないが、やはり拗ね者たる點に於ては五十歩百歩だつた。だから彼は時として非常に扱ひ難い人物でもあつた。隱險とか狡智とかの分子は微塵もなかつたが、反面に鋭い皮肉味が含まれてゐて、時にはそれが放散して呀つと言はしめる事もあつた。

番傘に於ける彼の現在的地位が、内面の深い事情は別としても、外見上に於ては不遇な陰影が附き纏つて見ゆるのも、實は彼の拗れ者たる、扱ひ難き性格着であるがための結果ではあるまいかと感ずる。要するに番傘の傳統的明朗性と五葉君の個人的性格とは相容れぬ一つの溝渠が存するのではないかと疑はれる譯けだ。最も是は私の一個の見解に過ぎないから、事實彼は番傘から不遇な位置に置かれてゐなかつたのかも知れないが、外見上さういふやうに見ゆるといふ事は矢張り五葉君の性格たる孤獨性に映はさるゝ結果かも知れない。

要は私の如きは眞の孤獨に徹するための苦行であり、且つ今日の孤獨生活が自らを滿足感に歡喜せしめるものであることは勿論であるが、五葉君は番傘の衆と共に歩み乍ら尙ほ且つ川柳的にも個人的にも孤獨の苦行を甜めてゐるが如き感の存在することは多少不可思議な現象に相違ない。

然し、それは五葉君の在來の歩みを考

慮すると、斯く孤獨的に、周圍を白眼視して行くのが、寧ろ彼の歩むべき必然的常道だつたのだ。其の點彼も決して惠まれたる坦々たる歩道の行路者ではなかつた。そこに彼の思想的惱みがあり、惹ては戯作者風の逃避と日本人らしさの諦觀とがあつた。この事は五葉君を語り、知る上に於て重要なる鍵ではないかと信ずる。

×

尙ほ語りたい多くを持つが、豫定の頁を遙に過ぎたもので此の邊で擱筆する。終に臨んで故人の瞑福を祈り謹んで合掌する。

（昭和七年七月九日稿）

冷やつこした 五葉氏の思ひ出

橋木綠雨

五葉さんが亡くなられたので少しばかりの思ひ出を書く。

五葉さんは「川柳雜誌」の創刊以前の「みをつくし」時代から知つてゐるが、御辭儀するだけで話した事はなかつた。當時「みをつくし」の會へ時々出席されたので青穗君が五葉さんの出席された事を大變に喜んだので柳界の先輩であることを知つたのであつた。

その後も時々道で合つたが、路郎君は達者なか、よろしく位で別れました。句に就ては破調の句を採る人ではなかつたちと變つたアクセンで披講されたが、それでもどことなく重々しさがあつた。

それからずつと後のことであるが、昭和五年十月十九日の夜天滿龜の池で媛柳川柳會主催の窪田而笑子の追悼會が開かれた。僕は而笑子とは一面識もないが出來るだけ忌とか記念句會とかにはなるべく出席するつもりでゐた。ところがその日は町内の運動會で琵琶湖巡りから戻つてからであつたので遲ればせに出席した處が會場の奥の方から五葉さんが突然おぢぎされたので一寸驚いた。席へ着くとすぐ雞牛子君から選を頼まれたので一應は斷つたが特にと頼れたので「虛無僧」の選をした。拔いた句の内で一句だけ訂正した。さて被講した所が、その訂正した句が五葉さんの句であつたので冷やッとした。後から考へるとやつぱり原句の方がよいので雞牛子君へ手紙を出してもとゝ〳〵通りにしてもらつた。

次に五葉さんが「祥月」の句を被講されたが、「この一句は字たらずであるが捨て難い句だからとつた、私は被調や字たらずの句をとらぬ樣にしてゐる」と述べられてから「祥月に二遍庭をまわるなり」「祥月に書の空を見るばかり」の私の二句を讀み上げられた。

各地柳壇

＝いのちある句を創れ＝

本社七月例會

五日夜於ちとせ倶樂部

同人ひろし君立つて君一流の直截なる個人的なる言議をなすや、餘りにも卒直に過ぎたるの感ありとして、路郎先生及び山雨樓君之に對する所感を述べ、近來珍らしき特色ある句會を現出した。參會者次の如し。

路郎先生、絲雨、豆秋、優四、艸樂、梨花瑞惠、八步、柳笑、琴人、四五磨、杏三、山雨樓、機見女、禿山、松之助、紅、雅幽、變人、かほる、柳次、勝二、方眠、卜居、紫石小柳子、源坊、水車、點玉、遊步、默平、新水、陽喜亭、里十九、あや美、青兒、夢裡、ひろし、鬼丸、丹路、夕鐘、愚陀、棹二、おさむ、みつる、鶴峰

兼題　肌　　路郎選

義理かたく包む素肌もあせて來る　明珠

きうりもみ少うし肌を見せて出來　かほる
黑石ばかりもたされて肌を脫ぎ　豆秋
鏡臺へ安心をして肌をぬぎ　柳笑
上布を通し肌もだへたり　水車
肌を惜しみ切つた女にも夏が　勝二
友禪も肌についたる京訛り　鮎美
乳飲ます肌はすこうし向をかへ　棹二
肌脫いで季節後れのものを賣り　雅幽
(人)母の肌に觸れて可笑しき十二三　同
(地)死金を肌につけてる淋しさだ　山雨樓
(天)研ぎ視線が肌の生毛を剃る月夜　愚陀
(軸)肌合はぬ人へ白髮を染めて　路郎

席題　埃　　琴人選

おでん店埃の中で煮へつまり　默平
小說家机の埃氣にかゝり　松之助
就職の無駄な埃を戻つて來　八步
大掃除埃の中で晝食はすみ　方眠
埃の中に目立つ繪日傘　あや美

賣子今埃をはたきほつとする　水車
がいせんは雄々しく埃立てゝ來る　夕鐘
單調な暮し臺所の埃　紅
手の埃拂ふ主人に叱言あり　勝二
埃氣にして羨まれるあかさ　同
埃掃き出したとこへ亦もどり　杏三
埃嚙みしめて一日ビラをまき　同
玩具店埃叩けば動き出し　山雨樓
國の母えらい埃を撫でゝ見る　同
厨の埃朝日さんらん　同
(客)日曜日朝の埃に追ひ出され　四五磨
(同)何の埃かと機嫌わるくぬる　機見女
(同)珍客へ埃をはたく用が出來　水車
(同)皆寄つてほこりを拂ふ一周忌　かほる
(同)病んで臥て埃のなかをなつかし　鶴峰
(人)失職の埃を拔ける重い靴　八步
(地)時計屋はゴミが溜つゐると云ひ　かほる
(天)足袋の埃を拂ふ賣上げ　源坊
(軸)緣側の埃見つめて淋しくぬ　琴人

席題　賣物　　山雨樓選

賣物とばかり顏なる手入して　新水
賣ることにきめて先祖の軸を出し　機見女
賣物へ上の子供は泣いてゐる　鬼丸
賣物へ手垢のほどを懷かしみ　水車
賣物でないと云はれてほしくなり　松之助
賣物へたゝ溜息のつゞくなり　變人
賣物は明日の朝迄金が入り　柳笑
賣物をひつくり返し又返し　鳴玉
男一匹賣れぬ梅雨空　愚陀
賣物へ夕陽の色のきつ過ぎる　八步
賣物にされて女は强く生き　同

（軸）賣物へ主人は痛い値踏みされ　山雨樓
席題　怪　我　新　水選
隱してる怪我を母から見つけられ　不明
怪我をして朝寢する日が續くなり　小柳子
青空へふとした怪我の淋しくて　變人
柔道の先生へ來る打撲傷　おさむ
溝板へ馬鹿げた怪我の痛さなり　紅
繃帶でみる程でなし指のきづ　瑞穗
大怪我へ自然は默しきってゐる　機見女
子の怪我へ母は見ろ〳〵鼻の汗　山雨樓
女房をたしなめ繃帶卷いてやり　里十九
怪我させまいと番人の怪我　源坊
怪我の後災難ですと付け加へ　禿山
澁面作つて怪我のあほうし　鳴玉
怪我人を見て來た話へ手が止り　艸樂
母へ出す手紙へ怪我を小さく書き　勝二
繃帶をして怪我人は禮に來る　四五磨
怪我人へ急救藥のさびついて　水車
子の怪我をおろ〳〵聲で電話して　夕鐘
これしきの怪我と手拭父はさき　方眠
（佳）怪我人へしばし機械の音もなし　四五磨
（同）怪我人のあつた所へ繩を張り　水車
（同）モートルに卷かれたことでもめんめん　機見女
（同）信心の心へ怪我も諦め樣　艸樂
（同）繃帶を卷いて課長をあざむかん　里十九
（軸）創劇へ舞臺の怪我を見せられぬ　新　水選

席題　屋臺店　互優四八步

屋臺店今日も子供になって賣り　屋臺店
屋臺店軒の暗さへ落ちつかせ　屋臺店
屋臺店練兵場の廣さなり　新　水
四ッ辻を馴染の聲で屋臺店　默　平
屋臺店雨のついでに洗ふとき　水　車
家臺店今日の儲けに醉うてゐる　柳　笑
屋臺店巡査に何か言はれてる　四五磨
屋臺店桶をのぞけばところてん　琴　人
屋臺店首を切られたもとで出し　方　眠
脊なの子が云ふ事を聞く屋臺店　かほる
踏切で水がこぼれた屋臺店　豆　秋
人間にも一度なる氣屋臺店　源　坊
屋臺店惜しいところで雨になり　同
屋臺店暫く橋の風に立ち　柳　次
裾からの好い風のある屋臺店　同
滿員の足が並んだ屋臺店　紅
家臺店五圓つりに走るなり　同

光耀會創立句會（大阪）

七月十日　竹內機見女報

全國にトップを切つた女流川柳家の創立句會は七月十日午後西成區の貴志子樣宅にて開かれた。梅雨の風情に一入雅致を添へてゐるお庭に面して、一ッのテーブルを圍んだ和やかな集ひ。それは忽ちにして初對面の角をとつて了ふ。

席題は市場、フライパン。葭乃女史は兼題瓜もみを披講せられ今後の句會について、その所信を述べられる。お互に初心者の惱みや批評など朗らかに交換せられる。と會半にして路郎師の御出席あり、一段の盛興を增す。平易な御話の裡にいろんな得る處があつた。この意義ある會合も黃昏の氣の忍びやかに泉水に迫る頃惜しくも敗會した。

（出席者）路郎先生、葭乃女史、貴志子、道子、茂代、機見女　葭乃選

兼題　瓜もみ

胡瓜もみ凝つた小鉢へ盛られけり　吟女
瓜もみをする手へ藏致とまりに來　はつ女
瓜もみに九尺二間の恙なし　道子
瓜もみへもう一册の本を出し　公子
瓜もみは酒の肴にもの足らず　茂もよ
瓜もみに嫁女やさしい腕を見せ　貴志子
お隣りも瓜もみそうな夏の夕　同
風鈴と岐阜提灯と瓜なます　茂代
にわか客主婦の手ぎわの瓜なます　同
瓜もみへ母の姿がしのばれる　壽枝女
瓜もみのかほりへつまむ花がつを　同
（佳）今日もまた瓜もみにして淋しく居　公子
（同）きうりもみ隣りのうちもきうもみ　茂もよ
（同）瓜もみの料も手にある野良歸り　貴志子
（同）妻といふ淋しさ胡瓜もみが出來　機見女
（同）うつかりと酢の勝ちすぎた胡瓜もみ　吟女
（同）胡瓜にも刻み方ある婦人會　道子
（軸）うりもみがはなへ匂ひ灯がもどり　葭乃
（同）妹の方が手なれたきうりもみ　同
（同）内なりと瓜もみのほろにがく　同

席題　フライパン　葭乃選

新世帶フライパンのまゝ持ち出され　貴志子
フライパン打つちやつてゆく松竹座　道子
カロリーが多すぎる日のフライパン　機見女
（佳）フライパンほかむりして今日はひま　貴志子
（同）フライパンの燒き具合がる讀みなる　茂代
（同）日曜と意識してゐるフライパン　道子
（同）フライパン季節のものゝ毒味する　同
（軸）フライパンもさげて節約續く也　葭乃

(同)フライパン篠つく雨の音をたて　同
　　席題　市　場　　葭　乃　選
割引きに市場の客は皆取られ　貴志子
夏の市アッパッパの展覽會　茂代
葱二錢市場をせまく通りぬけ　道子
もう一度市場へ走る座の空氣　機見女
冷藏庫へ預け市場の朝を出る　同
(佳)姐さんと呼ばれ市場に腹が立ち　道子
(同)ふところの具合メロンを諦らめ　同
(同)まかされて來た市場には品多く　茂代
(同)サラリ－日市場はホット息をつ　貴志子
(軸)公設を犬に引かれて素通りし　葭乃
(同)檢閲が來てるらしい市場の値　同

川柳雜誌社支部　**塗書柳壇會々報**
六月廿八日　於塗料青年團事務所
　　熊谷紅報　互選
　　席題　マッチ
仲裁の男ゆつくりマッチすり　元山
停電にマッチを踏んだ足袋の穴　紅
いじらしさマッチを運ぶ歩きかた　悅洋
煙草をばくはへてマッチ待つ心算　水車
すつた灯に顔がはつきりわかる也　綠雨
マッチだけにぎり　橋筋急ぐなり　同
　　席題　筆　　紅選
宿帳を手にしだ筆のより好み　新水
露店には惜しい筆蹟並べて居　水車
筆先に力があると二重丸　瓢水
肉筆に疑なしと骨とう屋　綠雨
持たされ筆に醉眼光るなる　同
長屋での達筆客なり代書役　悅洋
本人も折紙つけた僞筆にて　水車
代筆でよいと認印を借りられる　新水
此筆に自惚がある無口者　瓢水
名士みな至る所で軸にされ　水車
筆先が不足のまゝに賴信紙　瓢水
低腦兒筆を持たせばクラス一　元山
(軸)筆先の嘘へ氏から金が來る　紅
　　席題　虫　　水車選
ラジオ劇虫の鳴き聲から始め　永樂
卷舌のやうに松虫意地になり　紅
逢引の話とぎれる虫の聲　同
虫籠を一ッ提げてる浴衣なり　綠雨
こうろぎの鳴く淋しさへ宿の夕　新水
(軸)虫實の鳴かし加減もあるのな　水車
　　兼題　急　行　　新水選
村の驛超特急にゆれてゐる　水車
急行へ乘り遲れそうな腕時計　瓢水
急行へ工事悠々たる如し　水車
急行の窓に口笛吹いて見る　瓢水
寛ろいだ浴衣に更へた急行車　紅
(軸)取付へ社長急行するの也　新水
　　兼題　晝　寢　　綠雨選
小言いひ〳〵女房の晝寢なり　まこと
ルンペンはポプラの影に晝寢する　新水
外交は晝寢を待つて草臥れる　水車
借り切りの樣にペンチの晝寢なり　悅洋
晝寢からさめて今年の初西瓜　永樂
晝寢からさめると蚤が一ッ飛び　青踏
晝寢する耳へ大きな欠伸なり　元山
晝寢する顏を覗いて褒めて行き　瓢水
(佳)絹團扇晝寢の顏へ倒けて居る　新水
(同)人間がうるさし晝寢きて來ず　紅
(同)晝寢する位置にむしろを廣げ　瓢水
　　題　切　手　　錦石選
母からの手紙は切手不足なり　鬼木
消印が洩れて切手ははがされる　敏子
新妻も切手はるのは舌を出し　鮎美
切手さえ神經質な人と知る　青踏
戀のならわせ切手を斜に貼り　同
親展の切手はしかと押へられ　元山
(佳)六錢の切手で友の無貼手紙　碧郎
(同)無雜作に受付にある切手箱　虹一
(同)悔狀切手眞直ぐ念を入れ　元一
(人)切手まで祈る心の手紙出し　貴與志
(地)賴信紙切手が震ふハハキトク　紅
(天)切手さえ大日本の櫻色　青踏
(軸)客引のつもり切手も賣つてゐる　錦石
　　題　空　罐　　水車選
空罐へ金魚すくひの二三匹　鮎美
空罐を積んでスラムの端にゐる　青踏
空罐の目高大事に子は歸り　錦石
空罐を提げてペンキ屋降りて來る　紅
空罐も器用に使ふ二階借　破郎
誘らへた樣に空罐煙草入　鬼木
(佳)空罐へ夫婦は別な音をさせ　鮎美
(同)空罐を振れば子供は納得し　貴與志
(同)空罐の溜り水にも生けるもの　青踏
(同)空罐に來入れて居る新世帶　鬼木
(軸)空罐も何かになると殘しとき　水車
　　題　國　境　　朝田新水選
國境を越してふ安の夜が續き　鬼木
國境も近々密漁船の影　紅

列國の機密國境越えんとす　元山
國境を越えて御國の偉力知る　貴與志
國境のいくつ越えても青い山　青踏
愛國機今國境を越えて行き　永樂
リユックサック國境へ來た地圖を出し　碧郎
友を悼みて國境に骨埋む　鮎美
(C)二ケ國の水が落ち合ふ國境ひ　碧郎
(B)大野の草莊を締める國境ひ　水車
(A)(國境へ今一ト息の鞭を打ち　永樂
(軸)サスライの國境へ立つ我が姿　新水

川柳雑誌社 **螢ケ池支部句會**（大阪）

亀井愚寵報

兼題　肌　晴夫選

フト肌を撫でて悲しい思案なり　月下
明い灯のもとに亂舞の白い肌　泊太郎
ヴアンプなか〳〵に肌見せぬなり　一流
お守りをしつかと肌へ病みつゞけ　卷巴
(人)水枕取れば肌着がぬれてゐる　公平
(同)湯上りの肌へやつぱりセルにす　康夫
(地)處女の肌シヤボンの泡に包まれ　一流
(天)裸婦像の肌滑らかに息吹くなり　のぼる

兼題　青　愚寵選

望遠鏡若葉の青さばかりなり　康夫
唯一人青い芝生で泣いてゐた　靜太
サンルーム海の青さに暮れて來る　月下
青空へポツカリ浮いた繫氣球　公平
淀川を過ぎてコバルト色の空　泊太郎
おゝ青空一杯に青春と書かう　晴夫
波頭海の青さに戻るなり　水車

川柳雑誌社 **梅田支部句報**（大阪）

水谷鮎美報

牛　襟　かほる選

女店員自分の襟へあてゝ見せ　里十九
牛襟の粋をのぞかせ買物を　巴坊
たわむれの戀へ牛襟買ふてくる　晩春
牛襟は赤く舞妓の白い首　坊茄子
お芝居に行くに牛襟かけなほし　方眠
牛襟屋番頭さんは男前　同
牛襟へ若さを逃すまいとして　夕鐘
白襟をかければならぬ用ができ　同
牛襟を氣にしながらの初對面　點美
(人)牛襟を買うてうれしい許嫁　同
(地)襟の柄大きく見せて舞妓來る　方眠
(天)連れの妓が牛襟を引きたゝせ　鮎美
(軸)二日目からつぱり無地の襟に換へ　かほる

返　金　新水選

返金もできず思案の虫をきゝ　ト居
返金元氣な顔で這入つて來　里十九
返金は裏からそつと持つてくる　坊茄子
返金へ重たき空氣たゞよへる　同
返金の門をくゞれば觀世流　鮎美
返金のめあてもたゝず病んでゐる　同
返金はおろか借金ふへてゆき　方眠
返金へのつぴきならぬ今日となり　同
(佳)返金を氣にし乍らに酒をのみ　遊歩
(同)返金に添へる菓子折やさすぎ　里十九
(同)期日より早い返金あてがあり　同
(軸)思へども返す金とてつ出來る　新水

井　戸　かほる選

井戸の水姑は嫁の手を借りず　鮎美
選手みな井戸で足をば洗ふなり　同
井戸水を汲むのへ都會の子は困り　方眠
井戸へ來て冷水浴は胸をはり　同
傳説の井戸へ大きな錆びた錠　里十九
ピクニツク一つの釣瓶取り合うて　同
井戸水をうれしがつてる夏の客　夕鐘
(人)病上りにほんとにはい井戸の中　鮎美
(地)ふか井戸へへの網が手にあまり　方眠
(天)車井戸半分蓋をあけて汲み　同
(軸)その障子開けば井戸が見へるなり　かほる

川柳雑誌社 **鶴町支部例會**（大阪）

六月八日

席題　迷　惑　妹尾變人報

亦來たが無心斷り切れぬなり　白峯
迷惑は洋服で持つ野菜物　水車
迷惑な客ばつかりの午前二時　小柳子
迷惑をだまつて女招じ入れ　變人

物干、ひま、濱、碧郎、水車、變人選

物干しへ上ると夏の風があり　變人
物干しに目かくしもあり島之内　水車
昨夜來た父物干しへ欠伸して　白峯
桂冠をして悠々と釣つてゐる　琴人
手内職隣りはレコードかけてゐる　岩石
黒枠も讀んで仕舞つて背伸びする　碧郎
(佳)落着いた熱へ女房はひまもなく　變人
(軸)傘さして迄も植木の手入れなり　水車
宿替えを思ひ止まる夏の濱　同
石投げた濱へ背廣で歸つて來　寛柳
(佳)待たまれた一人は濱で砂を積み　岩石

兼題　帶　琴人選

コンパクト仕舞ふ彼女の帶の巾　水車
肩の荷がおりてゆつくり帶をとき　變人
角帶をゞて店の間廣すぎる　岩石
(佳)幕間の棧敷へ舞子帶を見せ　碧耶
(同)きつちりと帶を結んで悲しい日　雅幽
(軸)妾宅におく兵古帶は總絞り　琴人

兼題　自　信　雅幽選

ラストワン投手自信のストライク　水車
立候補少しは自信あり　琴人
問はれたる自信微笑の中にあり　岩石
自信あつたが世間知らなんだ　富士雄
交番で自信あるのが無口なり　白峯
(佳)体驕の自信強情者にされ　碧耶
(同)それ程の自信もないが勝つ氣だ　琴人
(軸)自信危し疊が滑べり　雅幽

川柳雜誌社御旅支部句會報（大阪）

六月廿六日　於いし堂　生田翠夢

句會終了後路耶師の川柳講話第一講の有益なる御話あり後小宴に移る

席題　易　者　新水選

近よれば易者が運の末に見え　路耶
惱んでる目付た易者見逃さず　琴人
苦るしみた易者はつゝ知つてゐず　みつる
(人)心細くも易者へポツリ〳〵降り　路耶
(地)言ふ事た易者應揚に聞いて置き　夢裡
(天)易者の言葉に人生觀を變て見る　あや美
(軸)不思議なり相と易者は思へども　新水

席題　應　援　翠夢選

應援に行けば事件は濟んだとこ　水車
應援に涙と汗を拭いた旗　多耶
應援があつて氣强ふ彈いてゐる　あや美
選手より應援團が疲れきり　みつる
應援へ磔十字にあやどられ　新水
應援の中に彼女の顏が見ゆ　紫石
(軸)應援歌鐵傘をかすフルベース　翠夢

席題　夜　店　琴人選

倦怠の妻は夜店の灯に歩き　多耶
昨晩の夜店を思ふ金魚の死　紀太
夜店もう顏を覺へるほど通り　水車
たゝきくさして夜店のメナ〻うり　翠夢
夜店見て歸る横町の暗いこと　あや美
夜店から歸れば足を洗はされ　みつる
玩具一つ買ふ嬉しさの夜店にて　新水
新妻の足袋がよごれた夜店にて　同
未練ある空へ夜店の二三軒　路耶
恩給に生きて夜店の石を買ひ　同
(軸)金魚屋の桶に緋が浮く夜店の灯　琴人

席題　男　親　路耶選

片意地をどこまでとほす男親　新水
俺に似る子供だけでは物足らず　みつる
泣いてから無責任なり男親　水車
男親蚊張の外からあやしてゐ　同
(軸)煽風機一ばいにゐる男親　路耶

兼題　辯護士　琴人選

辯護士は控室にて碁がはづみ　新水
づけづけと言ふて辯護士ものになり　水車
疑惑まだ解けず護辯士躍起なり　夢裡
辯護士の意得意になり金を蓄め　多耶
威嚴をば無くしに顧問辯護士來　紀太
(人)辯護士に聞けばたやすい訴訟なり　新水
(地)何もかも辯護士まかせ湯にひたり　水車
(天)辯護士も家賃の方は滯り　路耶
(軸)妾腹の方へ辯護士頼まれる　琴人

兼題　日　傘　路耶選

彼女もまた人後に落ちず日傘買ひ　多耶
劍道の構えで日傘もつ女給　翠夢
行く先も見屆けたんだ繪日傘の　紫石
神詣日傘神妙にたゝむなり　同
繪日傘の一ツへ工事を休め　水車
渡し舟日傘一ツが目立つなり　同
繪日傘をかざす角度もランデブー　同
嵐峽は日傘の戀の桃色や　琴人
絹日傘笑顏の返事透いて見へ　同
貸ボート日傘は輕く乘り移り　同
(日)傘繪日傘朗かな步調　みつる
(同)スケートをかゝ日傘のしはやぐ聲　夢裡
(同)母性愛どこかへ捨てゝ日傘ゆく　圓角
(地)經濟でさすとは見える日傘なり　同
(同)繪日傘の馬は肩からすべるなり　紫石
(天)忙し身の日傘繪日傘くゞり拔け　同
(軸)誘拐をされたか日傘朱に燃え　路耶

兼題　笑　顏　路耶選

儲つてからの笑顏は猪口を持ち　新水
笑顏よしつひ抱つこして守になり　多耶
笑顏にも淋しさ見せて母になり　紀太
もう一度笑顏見てから死ぬときめ　圓角
どう見ても毒と思へぬ笑顏なり　同
電話口笑顏の程も想像し　紫石
無理からの笑顏送つてまだどうぞ　同
店先へ笑顏で知らし先に行く　同

（人）滿喫の笑顔女に馬鹿にされ　多郎
（地）タイピスト笑顔を見ぜからかか　琴人
（天）笑顔など生活線へ忘れたり　水車
（軸）强がたつくせに笑顔にまきこまれ　路郎

川柳雑誌社鶴町支部　**七月句會**（大阪）

七月二日後五時三十分　於白峯居

宮岡白峯報

兼題　涙　　鮎美選

慰めに來たのに涙拭くばかり　雅幽
我まゝを叱つた涙拭いてやり　紅
金高に不服も言へず空ら涙　同
（佳）奮闘をたゝへる母の涙顔　變人
（同）落椿まるき涙の衰傷よ　ト居
（同）さげすみの涙に女は一人きり　緑雨
（同）子の涙おもちやの虎が首を振る　小柳子
（軸）妓の涙橋のむこうに虹が出て　鮎美

兼題　植　木　　紅選

病身の母に植木を植へて居る　岩石
植木鉢眺める足を蚊にくわれ　小柳子
植木から小犬がのぞくうらゝかさ　ト居
子が捕つた蟹が植木の下にゐる　鮎美
廢港の空が曇つた植木越し　同
植木倒けたり夕べの嵐　同
枝振りの上に植木屋首を出し　雅幽
くもの巣をつけて植木屋飯にくる　同
植木鉢置き替へるとみゝずが居　緑雨
（秀）植木鉢今朝も同じとこに出し　同
（同）好きだつた父の植木だ枯らまい　ト居
（軸）御隠居へ松の枝振り氣に入らず　紅

席題　我　慢　　緑雨選

幾母に育ち我慢强いなり　岩石
空腹を我慢しながら戎橋　小柳子
陽やけして我慢な男とはなりぬ　鮎美
（佳）其そこを我慢なさいと里の母　紅
（軸）女の子我慢が出來ず泣て來る　緑雨

席題　窓　　ト居選

退院の笑ひが窓をもれてくる　寛柳
講演を窓から聞いた旅戻り　白峯
窓明けて朝の元氣に背伸びする　變人
片肱を窓に次男の物思ひ　紅
窓一つ女の顔を寫すなり　緑雨
窓の下裸になつて住める街　雅幽
高架線それ〴〵涼しそうな窓　同
この窓に今日も淋しいちぎれ雲　鮎美
出戻つて淋しく窓のあけしめや　同
（軸）窓明けて靄氣に應へたり　ト居

席題　行　先　　雅幽選

行先も決めず三人歩き出し　岩石
つめたくも我行先を否定され　ト居
行先はどこでもよいと酔うてゐる　小柳子
行先を電話で探る探訪者　緑雨
行先を決めてポプラの影をでる　變人
行先を問へば辨當箱を見せ　同
行先は日向ばかりと思ふてず　鮎美
（軸）それ〴〵に行先のあアスフヲルト　雅幽

川柳雑誌社松江支部　**七月に集ふ會**（松江）

天　痴　人

七月一日午後八時開く。會場はいつもの寺町龍昌寺。集ふ者、十名。霖雨の爲極めて小集だつた。當夜の詠草を清記すれば——。

兼題　夏の雲　　柳人選

無心なる蟬へ夕立雲せまる　都之介
天幕からヨットから湧く夏の雲　馬耳郎
夏の雲一雨ほしい肌を脱ぎ　一實
背泳の視野に入道雲が湧き　都之介
カンバスの上を走つた夏の雲　九紫
水番の旗へ思はせぶりな雲　天痴人
生ビール風が吹く吹く夏の雲　卷二
紀念寫眞のバックになつた夏の雲　玲人
夏の雲田圃へさつと風を呼び　天痴人
大の字で見る窓雲が光つてる　白谷

兼題　一稼ぎ　　玲人選

事務服がシヤツと變つて一稼ぎ　卷二
一稼ぎしたので法裸も吹いてみる　白谷
一稼ぎした顔金魚をほめに來る　天痴人
一稼ぎして朝飯となる百姓　同
一稼ぎしようバットを踏んで立ち　馬耳郎
一稼ぎすべく篠つく雨を出る　都之介

席題　金魚屋　　九紫選

金魚屋は晝を眠たい聲で來る　馬耳郎
朗な聲で街行く金魚賣　一實
金魚屋の聲カーテンに風があり　卷二
金魚屋は賣れると水を注いでゐる　玲人
（人）金魚屋へ晝寢の街が靜なり　都之介
（地）金魚屋の趣味が嵩じた儲なる　天痴人
（天）金魚屋へ昨年買ふたたの見ごろ　都之介

席題　情　死　　都之介選

おきまりの手紙殘して情死する　白谷
情死の海へ無情な月が冴へ　一實
カルモチン女の方が先に呑み　卷二
貸ボート情死しさうな客があり　九紫

唄に聞く情死へ涙する娘　柳人
貸ボート情死しさうな客があり　九紫
溜息がつもりつもつて二人の死　巷二
（客）情死して中年の戀さげすまれ　天痴人
（客）緋鹿の子の帶がゆれて二人の死　巷二
（客）情死した女の足の白かりき　同
（人）猫いらずが二人の力になつて呉れ　白谷
（地）情死する二人と見えず宿にゐる　柳人
（天）カルモチン情死の膝へ怖く散り　天痴人

席題　便衣隊　互選

大和魂ちとこたへたる便衣隊　巷二
攻撃へ醉ふたまんまの便衣隊　都之介
便衣隊人の流れに捲き込まれ　柳人
便衣隊妻子のために銃を持ち　白谷
便衣隊の目に呪はしき愛國機　天痴人
（天）創作に昨日のベンチ親しまれ　濁水
（軸）木の影のベンチに憩ふ日傘連　同

請求書　春風選

花代の内譯が無い請求書　紫涙
請求書へ小僧算盤稽古する　青果
商賣人かたぎ五錢へ請求書　芳水
（客）請求書こゝも内入かと思ひ　紫白
（同）請求書器量と異ふ筆で來る　柳風
（同）請求書月給よりも多すぎる　花舟
（同）新婚の當座へ附の出し具合　春水
（同）ポケットに昨夜が知れる請求書　翠葉
（人）請求書急ぎませぬと簀戸の音　濁水
（地）月末を惱みつゞける請求書　花舟
（天）世辭だけで一度は去ぬる請求書　啞聲
（軸）電話とは別に二度目の請求書　白選

川柳雜誌社 高知支部例會（高知）

六月十日　於本與力町碌々庵　中澤濁水報

席題　ベンチ　花舟選

ハンカチを敷いてベンチのいゝ話　春風
公園のベンチで眺む朝の町　芳水
來る春へベンチの色を塗り替へる　春水
寄附ベンチ疲れた足を喜ばし　柳風
噴水のしぶきでベンチ寒うたち　紫白
（客）讀んでゐるベンチ後に知った聲　濁水
（同）ロハ臺の夢を夜警にとがめられ　紫白
（同）夜の秘話を置いたベンチへ朝の露　紫涙
（同）吐息つくベンチへ闇が迫って來　啞聲
（同）洋裝はベンチに意氣な足を組み　柳風
（人）散策の疲へベンチよい所　翠葉
（地）父母のベンチへ遠く子は遊び　春水

看板　紫白選

看板をまた塗り替へて見る世相　春風
屋根看板嵐に悲鳴あげて落ち　柳風
看板に電飾が要る喫茶店　春水
（客）看板の裏と表が社會に似　柳風
（同）看板の文字に思案の辻を折れ　紫涙
（同）看板を見上げる首へ傘のつゆ　春風
（同）寄せ付けぬ服で看板書いてゐる　柳風
（人）活動と言ふ看板の字の具合　翠葉
（地）盛場の看板は畫を眠るやう　春風
（天）當選の立看板は濡れるまゝ　濁水
（軸）看板の數へ藥を買ひ迷ひ　紫涙

告知板　柳風選

滿足の白墨が無い告知板　芳水
告知板スキー場は吹雪です　青果
諦めた眼で告知板讀みつゝけ　紫白
肝腎の事を洩した告知板　春風
告知板動悸のまゝに讀み返し　青果
電文に似て告知板それでよし　柳風
（客）告知板彼女と同じ頭文字　啞聲
（同）其の上へ其の上へ貼る告知板　啞聲
（同）告知板チトぢれつたい事を書き　柳風
（同）團体にはぐれて告知板へ立ち　紫白
（同）告知板成程急いだ跡を見せ　濁水
（人）白墨がこゝから盡きた告知板　春風
（地）斯う書けば氣がつくだらう告知板　紫白
（天）告知板書く手にきっぷ發車ベル　青果
（軸）告知板他人の事に氣をもまし　柳風

盛裝　芳水選

盛裝の顏へもぬかり無い女　紫涙
滿員の中に盛裝息を詰め　春風
盛裝は近所の門で蹴躓き　啞聲
（客）盛裝の足ごりにぶい〳〵もの　同
（同）盛裝のさて此れから下駄の事　春風
（同）盛裝は肩を並べて息が切れ　濁水
（同）盛裝の呼び戻さるしわを貧ひ　紫白
（同）紹介の數にはにかむ裾模樣　青果
（人）盛裝の和洋氣まつい歩であゆる　紫涙
（地）盛裝の汗へ扇の小さ過ぎ　青果
（天）盛裝で歸る古郷に意地があり　翠葉
（軸）盛裝の脱げてほんとの息になる　青果

毒　濁水選

溺愛の酒をみんなに毒にされ　柳風
片割が毒を飲んだと言つて來る　翠葉
毒藥がトランクにある智能犯　青果
毒藥を飲んでコップをぽんと投げ　金子
毒藥も二人嬉しいものにする　春水

斷末魔毒は凱歌を奏でゝる　紫涙
決心の鈍さを毒はあざ笑ひ　紫涙
毒を前に女は度胸据つてる　同
(人)注射器へ喘ぎ中毒生きてゐる　芽柳
(地)毒草と聞いて放した手のやん場　柳風
(天)毒藥の試驗へ匙の手も震ひ　青果
(軸)藥劑師毒を秤つて返事なし

撫順川柳會六月例會

六月三日夕　於柳路居

岩崎柳路選

微笑

窓と窓微笑を交す日が續き　矢車
姿見へ微笑み二つふと出逢ひ　松代
ほゝ笑んで待つ夜の月の圓い事　俵堂
微笑を返し二人に何かあり　一風
顔なじみ微笑だけで通り過ぎ　同
はつきりと笑窪を見せて娘は別れ　十酊
カメラ班歩く微笑を見逃さず　仙涙
包紙さげて戻れば子の微笑　天弓
微笑を交し合つてる滿員車　阿喜良
(客)ウキンドへほゝ笑む妻にしいも　蝶古
(同)針仕事何かほゝ笑む事があり　俵堂
(同)微笑を置いて女給は次へ行き　天弓
(同)微笑を隱し切れない娘の晴衣　阿喜良
(人)落ちつかぬ髷へ微笑む里の母　松代
(地)一合の酒に微笑む父を持ち　俵堂
(天)玩具屋で子の微笑をふと思ひ　天弓
(軸)ほゝ笑みのモデル何かを意識し　柳路

怪

福井天弓選

火の玉の噂で通る松並木　俵堂
怪談になつて末ッ子膝へ來る　蝶古
怪談は化けて出そうな手つきなり　一風
怪談にふと天井が氣にかゝり　仙涙
奇怪な噂を立てゝ家が空き　阿喜良
(人)凉臺話上手に怖くなり　同
(地)怪談に浴衣の衿をかき合せ　仙涙
(天)兄さんも怖しかつた怪談會　柳路

素足

安武仙涙選

降り續く雨に素足の冷を知り　俵堂
美しい砂へ素足で歩いて見　阿喜良
人前へ娘素足を詫びて起ち　關朗
赤鳥居素足で來てる妓と出合ひ　天弓
畫行くと女給は足の爪を切り　柳路
梳髮の素足に湯札見當らず　同
(客)切れ話里で素足の儘で居る　天弓
(同)足袋はかぬ足へ蒲團が立派すぎ　俵堂
(同)婚禮へ素足で上る用があり　同
(人)素足の女もう一度座り替へ　水舟
(地)都から來て居る素足尊ばれ　同
(天)素足ふと男のずるい瞳を感じ　同
(軸)夜店から素足埃に疲れて來　仙涙

外出

高橋俵堂選

もう一度錠を見直す外出着　天弓
外出へスキッチを消す順があり　仙涙
外出が許され患者肥つて來　矢車
其の當座二人で出るに決めて居る　柳路
たまさかの休を妻に誘われる　十酊
外出の行衛を追ふて夜店に來　阿喜良
外出の兄へ又かと舌を打ち　蝶古
(佳)外出へ少し氣になる不精髭　一風
(同)外出へまだ靴刷が見當らず　仙涙
(軸)出ついでに道具を一つ買つて來る　俵堂

畫寢

日高阿喜良選

配達夫畫寢の顔へそっと置き　蝶古
二の腕もあらわに見せて畫寢なり　一風
母ちやんの畫寢の髷が落ちかゝり　仙涙
ふと覺めた目へ風鈴の動かない　天弓
サイレンに覺めて畫寢は部所に着き　柳路
俄雨畫寢の母のあわてよう　松代
(客)ふと覺た畫寢急ぎの用がり　天弓
(同)畫寢を外れたボールに起される　俵堂
(同)妻の愚痴うら〳〵と聞く畫寢　同
(人)風通しほめて畫寢がしたいなり　天弓
(地)畫寢から覺めてニキビをつぶす居　柳路
(天)煽風機畫寢の髮が搖れて居る　柳路
(軸)畫寢にも飽いた欠伸へ金魚賣　阿喜良
(同)野菜屋の聲をうゝに畫寢醒め　同

阪大川柳會（大阪）

六月廿三日（前號發表の續き）　竹涯報

雜吟

路郎選

釣革へお腹の空いた下りやう　橙舍
聞きもせぬ塘をしへる女給なり　湧三
鮎の骨舞子はとつてやると云ふ　路生
あみ舟や小魚さんびきしひきとり　義郎

席題　腰

路郎選

中腰の仲居は一つ受けて立ち　路生
逃げ腰であるを女も知つてゐる　同
腰車子供をそつと投げてやり　同
丸腰のやうに役所のくだけやう　方正
腰掛けに往く就職に意氣があり　柳秀
腰すえた話に社長ベルを押し　湧三
泳ぎ出さんばかりの腰でしかつてる　同

腰据えてかゝればなどゝ貧けをしみ　橙舎
(人)ひしごきの儘で戸を繰る濱の茶屋　柳秀
(地)人の世の姿ぞ腰の曲りやう　橙舎
(天)その腰を鍬にゝへてうつろなり　湧三
(軸)腰が抜けた話を酒の肴にし　路郎
(同)春霞腰から女形になり　同
(同)腰が立てばまだ富田屋の一の客　同

簸川支部の四君を迎ふ

天痴人報

七月三日夜奈良井柳人宅で、來松した簸川支部の海月、與詩緒、田鶴雄、華村の四君歡迎の句莚を開く。本社其他へ寄せ書などをし、午後十時二十五分の終列車へ見送つて名殘を惜しんだ。收穫を次に——。

席題　肉體美、刺青、靜座、街道

靜座せば過去まざまざと甦る　與詩雄
戀は悲しい毒婦の刺青　同
刺青に勝氣をみせてゐる姐御　同
肉體美惜しい所にある黴子　同
夫の死へ坊やと靜座朝な夕な　田鶴雄
ま夏の陽の刺青へカン〳〵と　同
夏の夕闇に女の肩の丸々と　海月
文明は街道筋を淋しくし　同
街道へ糸の調子はさびしいぞ　同
純情へ刺青なんぞ見せられよか　華村
靜座ふと淋しく見入つた流星　都之介
刺青は見せずあぢけなき假面　同
瞳を閉ぢて座せば冷淡な疊だ　同
胃袋も思ひやられる肉體美　同
砂埃街道筋の夏となり　卷二
捨鉢の腕をまくつた刺青よ　同
押賣のふと刺青をのぞかせる　同
街道の昔を語る石地藏　柳人
人の氣を離れ靜座の山さびし　同
二の腕に刺青をもつ流行妓　同
藤椅子へ團扇一つの肉體美　同
街道へガソリンの匂ひ暮殘り　天痴人
街道の朝、砂利までが生きて光る　同
刺青師妖婦の肌をよろこべり　同
刺青を呪ひ妖婦へわたす金　同
ちと肥えて見たき野心あり靜座　同
血壓へ生きたき未練靜座法　同

明珠居偶會（神戸）

六月十一日　西村明珠報

兼題　警察　互選

警察の前で自轉車ぬすまれる　華水
警察の夜丸腰へ堅い椅子　竹風
警察の月へ情痴の夢が覺め　麥刀子
警察で分れたやつと會はされる　明珠
警察で女は強い口になり　秋彦

兼題　浴衣　鬼笑太選

十錢のストアへ友は浴衣で來　幸村
マネキンの早い浴衣を見て戻り　秋彦
浴衣着てみても寂しい未亡人　麥刀子
(人)藝者町宿の浴衣の五人組　春秋
(地)初戀は華宵好みの浴衣着て　麥刀子
(天)浴衣きて遊ぶ話に夜が更ける　明珠

席題　元金　華水選

高利貸元金の事は後にする　竹風
元金は無事で競馬も儲からず　春秋
(人)元金に喰ひ込む事にあぜ出し　明珠
(地)捨鉢は元金なんか考へず　秋彦
(天)元金を使ひたくない未亡人　幸村
(軸)元金が妻にすまない額になり　華水

席題　角　竹風選

角の立つ返事へお茶をつぎこぼし　麥刀子
角ばつた顔へ催促しておぢけ　明珠
丁稚の眼に大番頭の四角過ぎ　繁堂
角砂糖一つ足らない小集日　秋彦
衝立の虎へ角兵衛反りかへり　春秋

席題　番外

番外は手品になつた座談會　鬼笑太選
番外もありますなどと札を賣り　幸村
番外の角力で傷をしてしまひ　秋彦
番外の番地こゝから折れてゐる　竹風
番外の餘興へ皆んな座りかへ　麥刀子
番外へ末の子供は寢てしまひ　華水
番外に出て玄人に近い藝　春秋
(軸)番外に出たろがなと腕を撫ぜ　明珠

席題　垢　春秋選

ポスターのたか子手垢に汚れてる　秋彦
輕石へ垢面白い程よれる　麥刀子
爭議團一週間の垢に醉ひ　幸村
ルンペンの垢そのまん陽にやけて　竹風
垢ためてゐては遊んでくれませぬ　明珠

席題　アイスクリーム、海岸　互選

クリームのせんべい子供踏んで行き　鬼笑太
街路樹の陰でクリーム取りまかれ　秋彦
クリームが解けて金談まとまらず　華水
踏切でクリーム半分程になり　麥刀子
砂濱の砂につまづくものもなし　明珠
海岸の月が出たのへさそはれる　鬼笑太

海岸へ欠伸を投げるバスガール　麥刀子
席題　土　清記　互選

土運ぶ人へ眞晝の陽がまとも　麥刀子
故郷の土踏めと脚氣に手紙が來　繁堂
野良の晝茶をのむ土瓶缺けてゐる　春秋
あこがれの田舍の土はぬくかりし　明珠

春秋居偶會（神戸）

七月十日夜　咽喉　西村明　春秋選　珠報

小兒醫者自分の咽喉を先に見せ　寄舟
水藥もらつて咽喉を卷いてゐる　明珠
咽喉卷いて來て言譯が通される　同
咽喉骨を撫ぜてる啞の眼が曇り　秋彦
(佳)戀しつて近頃咽喉が變なのよ　靖弘
(佳)ぜいたくな咽喉空腹が滿たされず　明珠
(秀)唄つてる咽喉へ冷たい風が來る　秋彦
(軸)あゝ遂に何も語らぬのと佛　春秋

波紋　靖弘選

靜けさへ落ちた雫の輪が消える　春秋
波紋から遠く野心のある男　寄舟
(佳)抱合の波紋に汽笛鳴り續け　同
(軸)二人見る月の波紋へ千鳥鳴く　靖弘

匂ひ　寄舟選

働らいた汗の匂ひをぬぎ捨てる　明珠
酢の匂ひ蠅が一匹飛んでゐる　春秋
寢轉べばタンポポスミレ匂ふて來　耕人
(佳)匂ひも消えてる百合へ病み續け　同
(佳)意見する父へ香水匂ひすぎ　秋彦

沈默　秋彦選

それからの男默つて金をためる　寄舟
沈默の肩を子供に叩かれる　耕人
まゝ母に啞かと口をひねられる　春秋
沈默へ今夜も虫がないてゐる　同
沈默に夫婦別なる物思ひ　明珠
(佳)神佛も賴りとならず默り切り　同
(佳)弟の沈默姉が知つて居る　靖弘

力　明珠選

ありあまる力を見せる遊戯室　耕人
先生の力を笑ふ五年生　秋彦
重態へ嘘もまじへて力づけ　寄舟
險惡へ力と力靜かに居　春秋
愚さよ酒の力に生きてゐる　靖弘
(軸)明日出す爲めの力へ宵寢する　明珠

中　互選

雨の窓暑中見舞が投げ込まれ　秋彦
寢むそうな女中へ雨がふつてゐる　靖弘

鮎美居小集會（大阪）

六月十三日夕　死線を越へて　水谷鮎美報

蘇生してまた人の世に泣かんとす　晴夫
無雜作に死線を越へたひろい胸　同
死線を越へてさて人間の慾があり　同
死線を越へて更生の歩一歩　坊茄子
死線を越へて太陽のあかるさよ　同
冬の山死線も越へたおもしろさ　瓦坊
弟よ死線を越へてよくなれよ　同
死線を越へて最後の一人なる　鮎美
朝顏へ死線を越へて顏をむけ　同
禁斷の木の實死線の彼方なる　同

口笛を吹きつゝ

口笛を吹きつゝ已が若さ知る　鳴玉
口笛輕く五月の空に寢る　晴夫
仕事あり戀あり口笛で街をゆく　同
さみしさはおのが口笛呼へて居り　坊茄子
口笛を吹きつゝ歩むハイヒール　同
口笛吹いて明日の日を思ひ　瓦坊
口笛の眼にさびしいはちぎれ雲　鮎美
口笛を戀の疲れと誰が知る　同
父若く兒へ口笛を吹いてゐる　同

美しい夢

美しい夢よされども現實よ　晴夫
母も居た故郷の村の晴れた夢　同
美しい夢もなく酒のにがさよ　坊茄子
美しい夢思ひ出せないふしがあり　瓦坊
アダリンの夢に女の美しく　鮎美
美しい夢が故郷につゞくなり　同
紅葉散る君の笑窪の夢に醒む　卜居
忠魂塔へ美しき夢抱きし　同

雜吟

一錢の儲けに資本いろのなり　晴夫
潮風の荒い日なり何かうれしくて　同
あかつきの瞼にうつる母の影　鮎美
雲のかたちに人間があり　同

赤壁句會（大阪）

六月二十日夜西田艸樂參加句會を開く。

兼題　苦學、物語　艸樂選

片親の夢が氣になる苦學生　コロン坊
苦學さす頑固な父は達者なり　當葉
隣室の寢物語へ咳一つ　狸村
物語小供寢息になつてゐる　雨少
物語眼鏡を拭いて續けられ　同
物語時々母を見て笑ひ　かつら

物語る二人へ月は高うすみ　父義
切腹のときれ〳〵の物語　沖三郎

席題　日傘　艸樂選

結立の髪へ日傘をさし上げる　陀羅助
くろ〳〵と廻る日傘に謎があり　かつら
通り雨日傘に少しはしのがせる　杢十
繪日傘の上から蟬の聲がする　雨少
（軸）蜜豆が欲しい日傘が覗き込み　艸樂

扇

落語家の扇いろんなものに化け　杢十
結納の扇をそつと人に見せ　流九
前講の續き扇でたゝき出し　陀羅助
扇出して悔みの言葉聞きとれず　紹殼
仲人は扇納めて汗をふき　かつら
隣席の扇香水匂はせる　雨少
（軸）電話だけ小さくある扇を女將へ　艸樂

陳情

陳情の結果で爭議するつもり　桃林
陳情は只で歸らぬ覺悟で來　一風
陳情に來て警官を突とばし　流九
陳情に其場限りの返答し　同
陳情へ心にもない判を押し　蛇羅助
陳情の朝があまりに晴れてゐる　雨少
陳情へ同町である判を押し　同
（軸）陳情は派手な令嬢を見て戻り　艸樂

阪大川柳會（大阪）

七月十四日　竹涯報

兼題　泊り客　路郎選

泊り客大きくなつた娘にみとれ　柳秀
泊り客二階で手紙書いてゐる　路生
誰も彼もとまると聞そただうれし　湧三
大潮の引いた後なる泊り客　深雪
泊り客無心の先手打たれてる　正甫
内緣の妻があわてる泊り客　柳秀
泊り客日のある内に歸つて來　路生
泊り客寢かしてほつとする二人　柳秀
泊り客起きるに早い目を覺し　柳秀
いゝ氣嫌飲むで明かそととめられ　湧三
泊り客蒲團の數へ口が過ぎ　柳秀
厭がられぬ内に歸國とはいやみなり　橙舍
思出へ歸つてくれない泊り客　方正
上方の酒に限ると泊り客　肩山
あすたつと〳〵と云ふ泊り客　方正
歌劇から野球と若い泊り客　肩山
（人）泊り客悠然として山を見る　路生
（地）泊り客手數の容らぬやうに寢る　義郎
（天）泊る氣で來たが此家の世帶振り　橙舍

雜吟

パナマ帽惡漢らしく鍔を下げ　路生
お人好しスツパ〳〵と煙草吸ふ　橙舍
友禪屋川一筋に色をつけ　柳秀
湯に浸る時だけ別な世を感じ　竹涯
花嫁の誇りまぶしい物ばかり　柳秀

席題　貸家　路郎選

頃合と思へば權利ついて居る　山彦
あの家は疊建具が附くと云ふ　方正
梅ばかり無駄に咲いてる貸家札　柳秀
段梯子利休の足を危ながり　湧三
當にして行けばかしやと書いてある　橙舍
（軸）申分は家賃が高いだけのこと　路郎
（同）出前持貸家の前で持ちかえる　同

ひかり集 —その八—（大阪）

水谷鮎美報

妖婦

野いばらの匂い妖婦の薄化粧　卜居
絹靴下をなげて妖婦の嬌笑よ　同
讀美歌へ妖婦は林檎むいてゐる　同
痴態の妖婦へゆがんだ夜の壁　同

（曲譜×27を見て）

暗號の悲曲！妖婦の鍵は沒へ　同
催眠術にかゝらぬ妖婦　鮎美
美生活の煙を妖婦何んと見る　同
罵れば妖婦の嬌笑虹が出て　同
キリストの像へ妖婦の無口な日　同
通り魔に似たる妖婦の闇のなか　同
すき髮の妖婦の髮のつや〳〵し　月觀
弟のように妖婦に愛せられ　同
さみしさに妖婦は酒の香を匂ひ　同
男てふものが妖婦のおもしろく　同

靈塲めぐり（その六）

六月十九日　水谷鮎美報

高野山

神杉の木末ちぎれ雲を呼び　卜居
常夜燈魂ゆれてゐるごとし　同
串跡の魚へ二人は立ちつゞけ　同
杉の奥六月の陽に登り着き　鮎美
唱命の水かけ地藏へ水をかけ　同
說明の僧の衣が我に觸れ　同

粉河寺

小蕋へ梁の雀の巢を見つけ　卜居
六月の雲がひかつた粉河寺　鮎美

粉河寺陽にてりかへす石疊　同
觀音像の屏風が見へる納經所　同
紀三井寺
石段をのぼれば僧の立ち話　卜居
賽錢の音へ詠歌のつゞくなり　同
海の風吹く紀三井寺夕暮れる　鮎美
鐘樓の再建鉋屑が散り　同
蟬鳴いて紀三井寺にて飯の味　同

川柳雜誌社 **西條支部句會**（愛媛）

七月十日晝　於神拜小學校　荒井英賀夫報

登山、扇子、晝寢、暑い、日曜、海水着
女等も混り登山の渉らず　虹一
犧牲者を出して淋しい山岳部　英賀夫
水垢を取つて登山の宵を寢る　孤鶴
足もんで登山話に花が咲き　矢舟
腹の立つ暑さへ扇子置き忘れ　同
寄せ書の扇子の一人今は亡く　村雨
金借つて居るに銀行扇子來れ　英賀夫
所在なき扇子の紐をなぶる癖　孤鶴
扇風機無駄に廻つてゐる晝寢　虹一
金魚屋の聲へ晝寢は差がなし　英賀夫
晝寢から覺めて添寢の子を探し　孤鶴
此のまんま晝寢出來たらなと思ひ　矢舟
梅雨晴れの暑さへ蟬の聲を聞き　村雨
蒸し暑い風へ氷の旗がゆれ　英賀夫
草木までうなだれてゐる午後三時　孤鶴
九十餘度金魚も泡をふくばかり　英賀夫
日曜日二人がかりで料理をし　村雨
日曜日隣も海へ行く話　英賀夫
教室にカニがはつてゐる日曜日　白石
釣竿は長し亭主の日曜日　虹一
ハズが今朝子守してゐる日曜日　矢舟
あてゝゐた日曜雨に祟られて　孤鶴
海水着派手なは見せに來たのなり　村雨
海水着ぬげば日燒が目立つなり　矢舟
海水着モデルは田中絹代嬢　虹一
くつきり乳房が目立つ海水着　白石
海水着派手と言ふのが泳げない　英賀夫
海水着提げて夕日の町を拔け　孤鶴

つどひ（大阪）　姫田夕鐘報

蛙

養蛙場蛙の逃げたさわぎにて　水車
蛙食ふフランス料理習ふて來　同
蠅が來て目玉がうごくひきがへる　夕鐘
降るまでの風にあぶなし雨がへる　同

春秋居對座吟（神戸）

六月二十九日

題　カレンダー　夏生出題

カレンダー一日もうけた積なり　夏生
日めくりと日記へ失意つゞくなり　春秋
日めくりの今日から女手にかゝり　同

題　商賣　春秋出題

さかな賣いきほひの良い聲を上げ　夏生
二十一もう呉服屋になりきつて　春秋
商賣の話はよせと唄になり　同

酒豪鼎座吟（大阪）

六月一日　於舟々居　島田

友情、交換手、失戀

友情の包みを金にかへて來る　規堂
友情のしみ〴〵切符手にありて　舟々
友情の風呂札までも添へてあり　翠峯
重役のお眼に止つた交換手　規堂
混線を暫しほつとく交換手　舟々
差く二十になつた交換手　翠峯
失戀の男とあへば道を除け　規堂
窓のあかり裏切り者の靜かなり　舟々
いつまで戀に破れた一人者　翠峯

天痴人居對座吟（松江）　天痴人記

五月二十四日午後、田打ち休みの半日を利して川柳雜誌への作句を案じてゐる所へ松江の巻二が訪問して呉れましたので漫談の後題詠をして四時半別れました。その收穫を次に御報告致します。

大臣、薄着　互選

大臣の趣味どん底を視察する　巻二
薄着して乘るフランコの氣持よし　同
カクテルの雫薄着の袖に散り　同
大臣にゴルフリンゲの朗な　天痴人
處女として乳房の張を知る　薄着　同

水車居對座吟（大阪）　吉田水車報

席題　水

堰かれ水僕の姿にさも似たり　夕鐘
井戸水を汲むにも處女のポーズなる　同
演習の一人が水を貰ひに來　水車
植木店値を云ふ度に水をかけ　同

川柳雜誌 **七月例會**（島根）　簸川支部

七月十六日夜　於綠之助居　尼綠之助報

兼題　茄子　綠之助選

盆なれば茄子を供へた墓もあり　田鶴緒
鹽加減いゝ茄子漬けへ朝の膳　比佐緒

洋館の裏へ廻れば茄子畑　同
茄子の籠捧げて夕餉の支度らし　海月
長茄子ぬつと目立つて野菜籠　喜久路

席題　夏の夜　田鶴緒選

彼方へも寄つて見ませう夏の夜　喜久路
夏の夜はたゞ用もなくぶらづいて　比佐緒
宵散歩「生ビールあり」目を射たり　海月
涼み臺且ては戀ひし合つた人　綠之助
水打つて見飽かぬ宵も夏の事　同

光るもの　互選

水光る植田をほつとして眺め　田鶴緒
忍從も追ひつめられてゐる眼　海月
ヘッドライト突然光る街の角　喜久路
夏の陽をはじき鋤の柄光りたる　綠之助
軍國の感激指揮刀の光りさへ　同

加茂川句會（京都）

七月廿三日夜　仲源寺　平岩司郎報

水銀は上る〜三七度六の焦熱地獄をいとはず集つた人々の句作熱で暑さをふきとばした。（出席順）

綠雨、鶴峰、蒼太、一點紅、草村、富美三、香朝、乃の字、正平、弘一、佐一郎、艸樂、風林、麗光、紫明、斗船、啓秀、喜久男、水明、甫三、豊次、新水、木羊、蛙舍、迷帳、ゆきち、黄子朗、浮壺、可仙、款乃、司郎、冥之祐、梅香、流石、好涙

兼題　色街　新水選

色街をおチョボが走る宵の口　琴人
色街を旅ならこそと宵の口　綠雨
色街の朝をひよろりと人の影　蒼太
色街へつゞく柳の青い朝　黄子朗
色街へ來る鼻唄に連れがあり　可仙
傾むけた傘も醉ふてる先斗町　紫明
見學の色街と知るあわてやう　乃の字
門付が色街え來た聲となり　正平
生溫くい風を色街受けるとこ　豊次
色街へやけな氣持の捨てどころ　一點紅
色街へ意氣な姿の煮豆賣　木羊
色街でチトフェルトは拔け心地　好涙
色街へ社の鬱憤捨てに來　啓秀
色街に外人を見る花見時　弘一
色街に近う惡友派手に住み　喜久男
色街を平氣で通る年齢になり　同
ステッキの先色街の灯が揃ひ　斗船
色街へ肩をすぼめて逢いにくる　同
色街の手柄女の兒が生れ　同
(佳)色街を誘ふ秋に猪口の音　香朝
(同)色街の月は朧で良いのなり　紫明
(同)色街の晝を白痴の子が唄ひ　佐一郎
(軸)禁治産もう色街に用はなし　新水

兼題　根氣　草村選

小包の紐は根氣を試すやう　黄子朗
根氣よい妻の内職へ子は寢むり　浮壺
三男の根氣はラヂオ組立る　正平
根氣などありませんと繼ひ續け　香朝
根氣〻口說いて見ろと智惠を貸し　乃の字
根氣よく負けける將棋に夜を更し　同
根氣がなくなつた父五十過ぎ　可仙
根仕事肩がこらへんかと問はれ　同
根氣よくかよい惡友ばかりふへ　鶴峰
根氣よく恩給までも勤めあげ　同
(佳)釣堀の根氣へ雲が動くなり　琴人
(同)ネクタイを變へ勸誘員は來る　甫三
(人)根氣よく働く番頭の青い顏　浮壺
(地)母は母根氣でといたもつれ糸　梅香
(天)本職へ其根氣を向けなさい　啓秀

産聲　冥之祐選

産聲に萬年筆が見當らず　富美三
産聲へ電氣が暗い臺所　香朝
産聲へ今日からの兄起される　風林
産聲へ上の子父の膝で泣き　梅香
産聲を聞いて責任一つふえ　浮壺
産聲に重なり合ふて覗き込み　好涙
産聲を隣りも知つて夜が白み　紫明
産聲に母親の耳遠いこと　香朝
産聲にごう書いてよい輕信紙　麗光
産聲を待つ臺所しんとして　黄子朗
産聲を聞いて出て行く若い父　佐十郎
産聲に母ともかくも落ついて　迷帳
産聲へ女でもよしあんどする　斗船
宿直の夜を産聲の知らせなり　木羊
産聲の豫感通りに男なり　同
(佳)産聲の大きい事を産婆言ひ　流石
(同)産聲へ父電球を變へに來る　風村
(同)産聲へ暑さの中の暑さなり　啓秀
(軸)産聲へ隣は人手貸して吳れ　冥之祐

夏の夜　紫明選

一人減り二人減り橋の風が更け　艸樂
カーブンのドライブ星が飛んでゆく　蒼太
寢てるのを奥に殘して夏の夜　失名

夏の夜の話題を替る消防車　斗船
みつ豆に今宵限りの人と居る　可仙
満月を向ひへ知らす夏の夜　風林
自轉車の氷眼に付く夏の夜　乃の字
夏の夜フツト女が引つかゝり　好涙
戀もなく夏の夜を飲み明し　良之祐
夏の夜を女朗らかに生き　喜久男
夏の夜を三人連れで醉てゐる　同
蛾を追ふてから講議錄眠くなり　黃子朗
山の灯の位置に揉のてるキャンプ村　同
寢苦しさ寢冷え知らずも門に立ち　同
(人)堤はながい夏の夜の戀　豊次
(同)ヒヤシ飴夜店で飲んで腹が鳴り　梅香
(同)玉手飛車かけに涼しい夏の夜　草村
(地)夏の夜探しに行けば橋にゐる　木羊
(同)夏の夜を子は子で遊とこがゐる　啓秀
(天)夏の夜あはれ舞妓の厚化粧　鵜峰

後悔　互選

後悔をしてる手紙を笑ふなり　佐一郎
煽風機の風を後悔受けて居る　豊次
後悔に噛む唇の赤いこと　蒼太
後悔の腕の節々まだ痛し　可仙
後悔をする頃酒がさめて來る　富美三
後悔のうしろ姿は勵まさし　黃子朗
後悔を母は不安な顏で見る　麗光
後悔をする男窓の雨　甫三
後悔の膝から下へ灯が暗し　紫明
後悔へセーラズボンのハネを知り　風林
後悔へ無口な夜がつゞくなり　斗船
後悔の氣つけば耳につくいびき　同

川柳雜誌社
御旅支部　**涼納句會**（大阪）
七月廿四日夜　生田翠夢報

席題　納涼（電車中にて）　路郎選
いゝ風があります下を呼び上げる　紅
船納涼團扇はぬれてほつとかれ　琴人
野も山も涼しく窓へ迎へたり　翠夢
（納涼電車内にて）
對角線俺の好いてる顏があり　あや美
納涼で惱ます彼女見つけ出し　同
納涼が電車に乘つてゆくときめ　みつる
納涼もビールも飲んでからのこと　同
（軸）納涼に青訓はチト野暮に見え　路郎
（同）夕涼娘が拔けぬかぎりゐる　同

席題　納涼（船中雜感）　琴人選

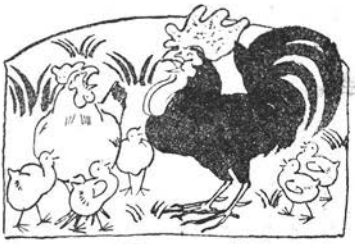
沈默の松へ噴水わめいてる　紫石
納涼へ赤い水青い水噴きちらし　あや美
涼み船タブルで來ない悔があり　同
嵐峽の死れる深さを船にきゝ　紅
肩よせた涼みは暗い道を行く　同
囃子船紅提灯にゆるゝメロデー　翠夢
たまゆらの命よ花火へ灯取虫　同
水中照明こゝも文化の波が寄せ　路郎
涼み船水の深さをきゝたがり　同
死にゝ來た二人が夜を漕いでゐる　同
夕涼み女をよべば灯がながれ　同
涼むのかと思や女はついとたち　同
涼み船花火と嘶の中をこぎ　みつる
かゞり火を川の向ふで見て涼む　同
納涼へふと戀人も欲しいなり　同
この次はダブルで來ます嵐山　同
お互ひにやじりあつてる納涼船　同
（軸）落着けば涼しい嵐山の　琴人
（同）餘興の噴水エンジンは汗をかき　同

轉居

吉田清君（兵庫縣今津町浦風五六へ）
綿谷雪君（東京市外杉並町天沼二三九へ）

正誤

前號三七頁「ひとし」は「しとし」の誤



編輯の窓

路郎生

▼この頃の挨拶は「やア」の代りに「暑いね」を交換することにしてゐる。

「暑いぢやアないか」

「ウン、暑い〳〵」

「まつたくやりきれないね」

「ホントにやりきれん」

「どうしてこんなに暑いのだらう」

「さあ」

「君のこつたから何んか一ト理窟ありそうなものだが——」

「別に理窟も何もありやせん。暑いから暑いのさ」

「なるほどね」

とみんな感心して肝心の用事を忘れて歸つてゆく。何んのこつた、暑いのを知らせに來てくれたやうなものだ。こちらはそれどころか、幾ら暑くてもペンの尖からインキをたらして行かればならないのだ。

▼八月號特輯號は海水浴行きの電車がホク〳〵してゐるを餘外目に眺め、疊の上へ脂汗をニチヤつかせながら出來上つた。

▼骨が折れただけに讀みごたへはするだらう。せいぜい涼しい顏をして讀んで吳れ給へ。

▼表紙は時節柄、野球漫畫だ。フールペースは暑さを超越するだらう。句はスポーツ川柳の名作家森東魚氏だ。漫畫は野球狂の吉岡鳥平畫伯だ。

▼特別記事は銷夏ナンセンスといふ編輯局の意見が一致して、「柳壇諸家に關する第一聯想」を同人社友から募つた。かなりこつぴどく、やつつけられてゐるのもあるが、他所の火事は美しいのと一緒でせいぜい涼しがつて讀むべしである。尤も槍玉にあがつた人々にはお氣の毒だが生命に別狀がないのをせめても諸けものと諦めて頂きたい。

▼毎號連載の「或玉川初篇研究」は特に本では增頁をして先を急ぐことにした、幾ら暑くともこれ位のものを讀まなくては駄目だぞと押寶りをしておく、

▼長野吉高氏の「柳の絮」も柳の絮のそれの如く、ねばりを見せてゐられる。愛讀を乞ふ。

▼「近作柳樽」欄はゲン〳〵力作が出て來たのでよろこんでゐるページ數の都合もあるが、本號では增頁した諸家の奮鬪に酬ゆることにした一層の精進を祈る。

▼地下鐵も近來出色のものが集まつた。洋畫家森ひさし氏が「近事片々」を寄せられたのも地下鐵に於ける異色であらう。

▼河盛純子の「川柳に就て」は本誌の如き專門誌には、どうかと思つたが、遲れた教育界への一投石として本誌に據つて紹介するのもよからうと思ひ、誌面を割くことにした。河盛純子は故河盛蘆村翁の嗣子で、私の長女である。本年高女の五年、執筆は四年の學期末のものである。自分の長女の執筆だけに私としては發表に就いて多少躊躇するところがあつたが、教育界への警鐘は自分としても早くより亂打してゐるので、本稿の發表についてて遂巡すべき理由もなからうと編輯局の贊同を得て掲載の運びとなつたものである。

▼遠くハルピンにある立井登美坊君からの「川柳ハルピンの此頃」これ又特輯號の好讀物たるを失はないと信ずる。同君は同地にあつて日本軍の通譯をされてゐるらしい。

▼福田山雨樓君が久しぶりに健筆を奮つた。それが「天地人制廢止說に駁す」である。天地人制廢止說に對しては私には私の意見があるが急いで發表しなければならぬほどの問題でもないから他日に讓ることにした。

▼柳壇の一異彩であつた淺井五葉君が七月六日に長逝した。私も長い間の交友であつただけにその訃を聞いて黯然とせざるを得なかつた。

暑中御伺

遙に諸氏の御健康を祈る

汗を流して玉を突く。汗を汗して烏鷺を戰はす。汗を汗して句を作る。汗を流して原稿を書く。なんでもいゝ。夏は汗を流してその中に浸ることである。私達は生きてゐる證據にウンと汗を流さればならない。

編輯室にて

麻生路郎

麻生葭乃

▼七月十六日の夜「番傘」の主催で五葉追悼川柳會があつたので私も席末を汚し求められるまゝに「五葉君の片鱗」と題して交友尤も繁かりし頃のこと故人の遺品について性格について、句の一端について追憶談をした。そして拙い追悼の一句を靈前に捧げた。

▼五葉君は一番傘の五葉でないだけに、本號では木村半文錢君橋本絲雨君と私とが悼惜の文を掲ぐることにした。

▼一路集のカットが本號から改まつた。森田ひさし畵伯の筆。

▼長い間懸案になつてゐた川柳光纏會がいよ〳〵創立され、七月十一日午後一時に米本氏邸でその創立句會が開催された。婦人のことであるからいろ〳〵支障が多く出席者は少なかつたが氣持のいゝ會合であつた。八月例會は高師濱へ出掛けることになつてゐる。文字通り萬障を排して女性の爲め大いに氣を吐いて欲しい。

▼北山悟郎君が七月十一日の休日を利用して久々に來訪された近來政治の畑へ首をツ込んでその世話方として活躍してゐる原前拓相に大いに私淑してその會を大阪につくるためにお骨を折つてゐる。熱の男一疋大いに奮闘を祈つておく。

▼七月廿三日の夜、京都支部の加茂川句會が仲源寺で開催された。私は差支で不參したが絲雨琴人、鶴峯、新水君等が出席した。かなり盛會だつたさうだ。

▼七月廿四日の夜、新京阪の納涼電車で、御旅支部の納涼句會が開かれた。嵐峽まで直通で涼味百パーセント、嵐峽では船を浮べて千鳥ヶ淵まで遡流した。

▼七月三日、函館で開催された第三回海峽親善川柳大會はなか〳〵盛會だつたらしい。その大會にのぞんだ川上三太郎君から「完全に握手させました」三太郎といふ寄せ書きが屆いた寄せ書の人々は不涙人、三休、〇丸、花童子、白眼子の諸君である。この意味は三休、花童子兩君對白眼子君の問題特に花童子對白眼子君のゴタ〳〵が解決したことを報告して來たのである。うまく片附いたとすれば何よりである。

▼其後花童子君と白眼子君の寄せ書が來た。これは矢張りこの問題の解決を報じたものであつた。

私もこの問題については花童子君に多少の注意はしたが片方の事情だけでいゝ加減な意見を述べることはよろしくないから深く立入らなかつたのである。白眼子君が謝意を表して晃がついたとすれば何よりである。過つて改むるに憚る勿れである。惡るいと氣づいたら男らしく頭を下げることだ。尤も白眼子君が惡るかつたと氣づいたのか、事實惡かつたのか、どうかは知らぬがお詫びが叶つて嬉しいといふたよりは、かなり大膽な猛烈な筆陣を張る白眼子君としてはサツパリしたところをもつてゐる。今度は先輩は先輩、後輩は後輩としての立場を深思して函館柳壇のために、外へ向つて筆陣を張つて欲しい。あまり忌憚なく書き過ぎたかも知れぬが小生の微意のあるところだけは汲んで貰ひたい。

▼東京の關西訪問團から社宛に木版刷の一軸を惠贈された東西川柳家交歡の日の感激記念とあつて、宮尾しげを氏の初代川柳翁の畵像に阪井久良伎氏が川柳翁の辭世句を謹書されたものである。同時に、當時の幹事として活躍した本社の同人及社友にも各一葉宛を贈られた。好箇の記念品である。關東川柳團の心からの贈物に對して厚く感謝の意を表する。

▼同人、安西杏三君の四女洋子さんが七月十五日に夭逝された生後八十幾日、親としての慈しみを思ふと痛ましいことである子を失つた悲しみのまだ癒え切らぬ私は悼辭を知らない。

▼松江支部幹事、廣江天痴人君の令息三男好也君が七月二十三日松江市の縣立病院で永眠された。杏三君と云ひ天痴人君といひ何れも子ぼんのうのこととてお悔みの言葉もない。私はただ小さな御魂の瞑福を祈るのみである。

▼閨秀作家朝田スエノ女（同人新水君の令閨）が七月二十四日大阪市外守口町の自宅で急逝された。二十五日の朝、絲雨君から電話があつたので驚いて早速守口へ出掛けた。岩本素人君が來て萬事世話をやいてゐた。その日の夕刻密葬、廿七日午前九時十時に大阪市北區空心町一丁目の西慶寺で告別式を執行、多數川柳家の會葬があつた。故人は光纏抄に於て長らく活躍され、佳句に乏しくない。謹しんで哀悼の意を表す。

▼柳窓亭指田春彦君が七月十三日、府下池田町の親戚の宅で亡くなられた。行年六十九歳。君はもと〳〵狂句畑の人で、大同阪柳界ではあまり知られてゐない。日日柳壇を暫く擔當してゐたが、私の鳴尾時代に度々訪れたいといふ書面に接したばかりで遂々顏を見せられなかつた人である。かなり不遇な一生の幕を閉ぢられたらしい。悼惜に堪えぬ。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
▼光耀抄は女性作家に限る。
▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
▼締切は嚴守されたし。
▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第九卷第十號課題

八月五日締切
（各題十句以內）

▼教會　安井ひろし選
▼池　中見光路選
▼幕　楊井二南　日野華水　共選

第九卷第十一號課題

九月五日締切
（各題十句以內）

▼閻　大島濤明選
▼損料　朝田新水選
▼食堂　須崎豆秋　西村明珠　共選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選
▼光耀抄（雜吟廿句）麻生葭乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年七月廿五日印刷
昭和七年八月一日發行
第九卷第八號
（毎月一回一日發行）
編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　麻生幸一郎
發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番
大阪市住吉區平野西之町八三番地
事務所　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（國館）石塚
（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

川柳雑誌社關係の人々（順はいろは）

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清一　淺田一　末弘嚴太郎　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　伊藤彦造　森一歩　烏山

大島濤明　岡田三面子　大谷五花村　亀井花童子　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　吉岡平　吉田清　前田雀郎　前田五健　安川久流美　窪田銀波楼　田村孝之介　片桐靈霊　大西八歩　亀井愚寵　吉田水車　立井登美坊　辻左馬　西おさむ　中木村晃卓　中川めかく子　中野柳陽　中澤濁水　三輪夏曉　三好計加

社友

岩垣奇可愛　伊藤緑之助　生田翠夢　石曾根民郎　松下小柳子　市塲沒食子　増位汀柳　山本雨迷　姫田夕鐘　桑原京郎　廣江天痴人　平井蒼太　上野錦水　白井梅里　村松夢裡　水谷鮎美　朝田新水　阿部閑生　關本雅幽　庄萬よし

同人

高橋かほる　高見光路　中島鐵洲　永田里十九　王幹　日野華水　平岩司郎　紅妹尾變人　熊谷月山　須崎豆秋　西田帥樂　太田朝陽　福田山雨樓　安井ひろし　山本丹路　松丘町二　松盛琴人　橋本緑雨　伊藤愚陀

編輯局（同人）

住田亂耽　庶生路郎

客員

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
濱寺支部（大阪庁）幹事太田　朝陽
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
國館支部（函館市）幹事亀井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事永田　里十九
螢ヶ池支部（大阪府）幹事亀井　愚寵
金澤支部（金澤市）幹事中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
篠川支部（島根縣）幹事伊藤　緑之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村晃　卓
堺支部（堺市）幹事八木　均
松山支部（松山市）幹事坂井拓　水
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事生田　翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事廣江　天痴人
塗青支部（大阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南五六二番

カナメ喫茶店

朗らかな心と愉快な顔は
カナメ喫茶店より
大阪市南區疊屋周防町
東入南側

女給を募る

二十二三までの朗らかな方、美しい方をお世話下さい—葭乃
大阪市西成區玉出本通三ノ三六（仲小路）
喫茶店 **キング**
電話 天下茶屋 二五七九番

▽川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊 價金拾二錢（送料共）
▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用不苦）

川柳街

金拾五錢
京都市木屋町四條北入
川柳街發行所

國民川柳

金十六錢
東京府品川町二日市二二五
國民川柳會

短冊頒布

筆者 **麻生路郎先生**
上短冊一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし（句の希望の方はお知らせ下さい）
大阪市住吉區平野西之町八三番地
川柳雜誌社事務所內、短冊頒布係

懸賞川柳募集

題「記念」 路郎選
八月十日締切
その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛
化粧新聞社

社告

川柳手拭 路郎主幹の染筆 一枚 金拾五錢（送料共）

暑中御伺

大阪帝國大學醫學部
長崎柳秀

阿部閑生
大阪市外豐中千歲通二丁目

南海電車
池澤樂居
大阪府下高師ノ濱

大嶋濤明
大連市西公園一四五

富士野鞍馬
東京王子堀ノ内一三四

山本丹路
大阪市南區鰻町一ノ五一
船場三四七七番

中澤濁水
高知市本與力町

庄萬よし
大阪市南區新戎橋南詰

下記に下宿獨居蚊軍の襲擊と戰ひつゝあり
兵庫縣川邊郡小田村潮江字前田十六
安井ひろし
通信宛先 大阪市西區阿波座一森ビル四〇三號

暑中御伺

岩崎柳路
岩崎松代
滿洲撫順東二條通五八

川柳雜誌社
塗青支部
大阪市西區新町南通五ノ二〇熊谷紅方

川柳雜誌社
御池橋支部
西區四ッ橋南日本樂器會社大阪支店内

川柳雜誌社
神戸支部
神戸市神戸區中山手通七丁目一七七日野華水方

米本儀助
米本貴志子

川柳雜誌
簸川支部
大地吟社
同人一同
幹事 尼綠之助
島根縣今市町

大阪市東區今橋二丁目
關西土地句會
大橋素月
竹原一久
八田鐘生
辻祥平
小西無鬼

今村吉朗
尼崎市中大物町六〇

阪崎串二
尼崎市中大物町五一

清水虚白
尼崎市西大物町五一

暑中御伺

前田五健
松山市眞砂町二一

西田艸樂
大阪市東區岡山町三七四
電話東二二八二番

川柳雜誌社別府支部
木村晃卓
別府市下野口

大久保大夢子
大阪市住吉區
阿倍野橋筋二丁目五三

大西八歩
大阪市東區博勞町一ノ一八
（竹中方）

高峰柳兒
長野縣須坂町絲の街川柳會

竹内機見女
大阪市天王寺區
上ノ宮町五六ノ三

吉川啞人
山口縣久賀町
電話一四番

岡田陽喜亭
大阪市東區鎗屋町二ノ二六
電話東三二一二番

名越不然
神戸市灘區大石一五ノ九

竹田芦穗
大阪市港區八條通二丁目

月刊誌「あけぼの」金十錢
久田狂水
福島縣石城郡磐崎村

越中今雨
金澤市小立野一本松三二

西村山月
大阪市東成區深江町九八九

酷暑の折柄柳道に精進を祈る
嶋田翠峯
大和龍田町百井

高橋かほる
大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九六番

福田山雨樓
大阪市浪速區湊町保線事務所
電話戎一〇〇三番

松盛琴人
大阪市此花區上福島南三丁目六六

暑中御伺

宮岡白峯
宮岡公子
大阪市港區鶴町三丁目八八

川柳雜誌社松江支部
廣江天痴人
松江市外乃木村上乃木

駒田白帝子
大和

金泉萬樂
尼崎市西本町北通二ノ五八

乞御風交
宮内耕朗
松山市花園町二ノ二五

山本白丘土
東京

森口一風
撫順驛前

「れこ柳」大阪支部若葉會
清水白柳子
東區空堀通一丁目九三

川柳も古本も新本
古本 賣買
飯島史錄
東區東雲町二丁目一四三

川柳雜誌社
螢ケ池支部

伊藤愚陀
大阪市東區仁右衛門町五〇八

矢追矢次郎
大阪市西區阿波座中通
日本織物新聞社

川柳雜誌社
鶴町支部
大阪市港區鶴町四ノ一六
妹尾變人方

川柳雜誌社
天王寺支部
大阪市住吉區旭町三ノ一四
須崎豆秋方

暑中御伺

川柳雜誌社 **梅田支部**

水谷鮎美
大阪市東淀川區大和田町六三六

天野卜居
大阪市住吉區喜連町二一九六

本橋坊茄子
大阪市北區金屋町二丁目一七

今井良坊
大阪市東淀川區十三西ノ町四丁目一三

姫田夕鐘
大阪市港區東田中町八ノ四四

小寺鳴玉
兵庫縣武庫郡大庄村字西樂地四九六

上久保まさる
大阪市西淀川區浦江上二丁目五八

都藤古木
大阪市此花區上福島北三丁目一二

横田方眠
大阪市西淀川區姫島町五二一

永田里十九
大阪市南區疊屋町六

川柳雜誌社

西條支部
愛媛縣西條町新町
荒井英賀夫方

鳥取支部

增田耕民
鳥取市川端町一丁目

中島鐵洲
鳥取市川端町一丁目

杉谷湖山
鳥取市職人町

川柳雜誌社

御旅支部
大阪市東區粉川町六
生田翠夢方

橋本綠雨
大阪市住吉區平野西ノ町八三
電話天王寺一一六七番

松丘町二
大阪市東成區別所町五〇二

安西杏三
大阪市東成區北清水町八九一

平岩司郎
京都市嵐山天龍寺前

福田鶴峰
大阪市天王寺區北河堀町六二

弊社の工場

暑中御伺

設備

輪轉機と數臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活孜豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

營業種目

新聞雜誌、印刷圖書版引受、紙型鉛版活字製造販賣、各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可毎月一回一日發行
昭和七年七月廿五日印刷納本　昭和七年八月一日發行

にきびとり美顔水

面白い様に効く！

年來の信用！的確の効果！

▲ニキビ吹出物に――頑固なニキビ吹出物にも本當に確かに、而も何等の副作用をも伴はず、目に見えてよく効くので非常な評判です！年來の信用！効果は彌々向上してゐます！

▲眞正の美の成長――尚ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へん喜ばれてゐます！

▼素顔の美を貴ぶ
御家庭人の親友▲

發賣元　桃谷順天館株式會社